日清貿易研究所生一覧表の作成と『対支回顧録』編纂をめぐる若干の考察

野口　武（Takeru NOGUCHI）

はじめに

1890年に上海に日本人教育機関として成立した日清貿易研究所については、すでに戦後から幾ばくかの研究成果が挙げられており、その成立経緯は明らかにされている。従来、この日清貿易研究所について述べる際には、東亜同文会の教育機関であった東亜同文書院（及び大学、以下書院と略称）の前史として、その系譜を整理することが前提として述べられてきた。(1) それら論拠となるものは、言うまでもなく東亜同文会や東亜同文書院の関連史料であり、その基礎資料群がもたらした叙述の仕方に起因することは疑いない。

例えば、日清貿易研究所成立後から18年（東亜同文書院成立後7年）の歳月を経て出版に至った『日清貿易研究所東亜同文書院　沿革史』は、編纂の目的について、「・・・・・・吾人ガ最モ遺憾ニ堪エザルモノハ、彼ノ日清貿易研究所ナルモノガ、東亜発展ノ先導者トナリ、対清経営ノ鼓吹者トナリ、以テ十九世紀末葉ニ於ケル我ガ国民ノ迷夢ヲ攪破シタル偉烈勲功アルニ拘ハラズ、其歴史ノ世ニ公ニセラレザル為メ、世人尚ホ未ダ彼レノ雄図壮略ニ通ズルモノ非ルコト是ナリ」として、日清貿易研究所から東亜同文書院に至る成立過程に「組織形態ニ於テ全然相異ナレルノミナラズ、実際上亦何等関繋スル所無キモノナリ」としながらも、「特殊ノ国家的事業ガ今ヤ漸ク世人ノ脳裏ヨリ消失セントスルハ是レ実ニ吾人ノ坐視スルニ忍ビザル所」とあり、当時の対中対露情勢の最中、「東亜発展の先導者」として「対清経営を鼓吹」して日本国民の「迷夢を攪破」したと自らの役割を「公」に位置づけるために出版したことを述べている。この『沿革史』は後に東亜同文会や東亜同文書院の関係者が、自ら「通史」を描く上で基礎資料となったと考えられる。それは、1920年9月に東亜同文書院の20周年を兼ねて根津一の還暦祝賀祭記念として編纂された『根津院長還暦祝賀紀念誌』においても、この『沿革史』をもとにして編纂されたと見られる類似した内容が記述されている。(2)

---

(1) 六角恒広「東亜関係諸団体考古記」(1)～(6)『東亜時論』第 5 巻第 3 号～第 8 号、霞山会、1963 年 3 月～8 月。野間清「日清貿易研究所の性格とその業績――わが国の組織的な中国問題研究の第一歩」『歴史評論』167 号, 1964 年 7 月。竹内好「東亜同文会と東亜同文書院」『中国』(特集・東亜同文会と東亜同文書院）No.21、中国の会、1965 年 8 月。村上勝彦「産業革命初期の日中貿易」『東京経大学会誌』No.174, 1992 年。

(2) 松岡恭一編『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』東亜同文書院学友会、1908 年。清水董三『東亜同文書院創立二十周年　根津院長還暦祝賀紀念誌』上海東亜同文書院同窓会、1921 年。さらに、『創立三十周年記念　東亜同文書院誌』上海東亜同文書院、1930 年、『創立四十周年記念　東亜同文書院誌』上海東亜同文書院大学（久保田正三）、1940 年、といったこれら資料も同様の「通史」として位置づけられよう。後年、後継団体である霞山会や滬友会が編纂した、東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、1988 年、『東亜同文書院大学史』(創立八十周年記念誌)、滬友会、1982 年、霞山会編『東亜同文会史・昭和編』財団法人霞山会、2003 年も、「自団体史」を整理する「回顧」的史料属性を持つ。また、これ以外にも『巨人荒尾精』や『山洲根津先生伝』のような伝記資料なども、組織の「沿革」を語る史料は、いずれも東亜同文会や書院の関係者自らの当事者の手でなされた史料である以上、

こうした「回顧」史料が編纂される際には、まず、その何等かの事象に関与した各一人一人の「当事者」によって「エピソード」が回顧される。そのひとつひとつのエピソードは、何等かの「史料」として「編纂しようとするもの」によって、ひとつの「物語」に集積される。この「回顧」されてから「編纂」を通じて「物語」化されるまでに、その「回顧」「回想」によって再整理してまとめられた「物語」には、「編纂者」の何かしらの「認識」が付加される。その際に、そうして編纂された「物語」としての回顧史料が、「回想」した者の視点で「思い出され」るがゆえに、当然、当事者の視点で描かれることとなる。そうして描かれた「想い出エピソード」は、自ら描くエピソードの中に同時代的背景や事象が「回収」され、検討すべきひとつひとつの事項を捨象してしまう可能性がある。

「回顧するもの」と「編纂するもの」は必ずしも同一にはならない。しかし、東亜同文会及び書院に関連する回顧史料は、その関係者が中心となって編纂に関与している。このため、その「回顧」「回想」を通じて「思い出され」た「物語」のひとつひとつは、東亜同文会及び書院関係者によって編纂に至った「再整理」「再認識」のバイアスが付加されており、より「自団体史」的な史料属性を強めていることが考えられる。つまり、東亜同文会及び書院関係者の当事者視点で描かれた史料である以上、漢口楽善堂から日清貿易研究所を経て、書院へとたどり着く「経緯」が描かれたその叙述方法のなかには、当然、その史料属性として、より意識的に自らを認識して「経緯」を描こうとした、「自団体史」特有の「自己認識」であることに注意せねばならない。その物語が「自省」的であれ、あるいは「誇張」的であれ、自らを自らの手で位置づけようとする「自己認識」が現れた内容であることを踏まえておく必要がある。

後世、その系譜を導き検証しようとした際に、こうした当事者の手によって著わされた基礎史料の叙述をもとに問題を検討することは当然であるが、しかしながら、従来これら連続した「エピソード」を検証しようとする際に、その史料的価値は認められながらも、史料批判が問われてきたとは必ずしも言えない。(3)

同様の記述方法である。井上雅二『巨人荒尾精』左久良書房、1910 年(村上武増補編著、東光書院出版部再版、1993 年)。東亜同文書院滬友会同窓会(代表油谷恭一)編『山洲根津先生伝』根津先生伝記編纂部、1930 年。

(3) 東亜同文会最初の機関紙・「東亜時論」について、加藤祐三「東亜時論」、小島麗逸編『戦前の中国時論誌研究』文献解題 26 中国関係新聞雑誌解題Ⅱ、アジア経済研究所、1978 年。森時彦は、『清国通商綜覧』を「日本人による最初の実地調査にもとづくエンサイクロペディアであった」(50 頁)と再評価しつつ、楽善堂の諜報活動から荒尾精の貿易立国論に触れ、「日清貿易研究所を設立し、日清貿易のエキスパートを養成するとともに、中国の商情の調査研究をおしすすめ、欧米の手から中国の商権を奪回しようという」「ふつうの商業学校などとはちがう一種特有の使命感をもつ教育機関となった」として、東亜同文会や関連人物の史料をもとに位置づけた。森時彦「東亜東文書院の軌跡と役割―『根津精神』の究明―」『歴史公論』4(近代アジアのなかの中国と日本)第 5 巻 4 号(通巻 41 号)、雄山閣、1979 年 4 月。ほかに東亜同文会及び東亜同文書院が刊行した資料について論じたものに、財団法人霞山会編『東亜同文会史論考』(第 1 部第 5 章)、1998 年、56-79 頁。「東亜同文会の人事と事業」(東亜同文会 通史 第 4 章)、「東亜同文会の組織及び文化事業等諸活動」(活動編 解題 第 5 章)『東亜同文会史・昭和編』財団法人霞山会、2003 年、30-36 頁、118-148 頁。また東亜同文書院学生が行った「旅行調査」についてその報告書から述べたものとして、藤田佳久『東亜同文書院 中国大旅行調査の研究』大明堂、2000 年。最近では、機関紙をもとに、大里浩秋「東亜同文会機関紙に見る明治期日中留学交流史」、大里浩明・孫安石編『近現代中国人日本留学生の諸相― 「管理」と「交流」を中心に』御茶の水書房、2015 年。管見の限り対支回顧録について解題を行った論考はほぼ見当たらない。指摘として、中村義『白岩龍平日記 アジア主義実業家の生涯』研文出版、1999 年、156 頁、これが先

とりわけ、本稿で扱う『対支回顧録』[4]は上下巻で1936年に刊行され、特に下巻は戦前の人物を端的に知る上で現在も欠かせない重要史料である。『対支回顧録』の編纂母体となったのは、これも指摘するまでもなく東亜同文会である。当然、同書には東亜同文会関係の人物たちが頻出する。同時に、日清貿易研究所を分析対象とした場合にも同様に頻出することから、やはり欠くことのできない重要な基礎史料である。

今回、筆者は日清貿易研究所を検証するに当って、「日清貿易研究所生一覧表」を作成するに及んだ。その作業として利用したのが『対支回顧録』をはじめとする回顧録史料である。特に『対支回顧録』以外にも、続編として1941年に刊行された『続対支回顧録』[5]と、黒龍会が1936年の同時期に刊行した『東亜先覚志士記伝』[6]に依拠した。これら三書の「下巻」にはそれぞれ「人物列伝」として、日清貿易研究所や東亜同文会関係の人物以外にも、政治経済界や軍人といった、当時の対中問題に関与した人物が多岐にわたって収められている。この「人物列伝」に記載される各情報を項目化してデータ処理することで、日清貿易研究所に参加した人物たちがいかなる存在であったのか、傾向が把握できるのではないかと考えた[7]。あわせて、これら回顧録史料について俯瞰しようとした場合、同書の編纂背景や目的以外にも、後に連続する東亜同文会や東亜同文書院の研究を理解する上で重要となるものではないかと考える。

こうした着想をもって、本稿では「日清貿易研究所生一覧表」の解題を兼ねて、同表の主たる史料として利用した『対支回顧録』についても、あわせて若干の考察を試みることを目的とする。

なお、本稿では、上記の回顧録から日清貿易研究所の出身者を抽出して分析するにすぎず、分析上の限界を有している。同時に回顧録の史料属性に加えて、依存した「人物列伝」もすべての情報を明確に記載しているとは言いがたく、表の遺漏は免れ得ないものであいる。とはいえ、同史料から抽出した各データをもとに、研究の起点として位置づけること、または研究を俯瞰する上での一材料とすることは可能であると考える。

また、本稿は、『国際問題研究所紀要』第147号に公表した、拙稿「日清貿易研究所出身者の『立身』と教育機会（1）」[8]に対応した解題であることを付言しておきたい。日清貿易研究所の検証

行研究としてあたる程度である。

(4) 対支功労者伝記編纂会『対支回顧録』上・下、東亜同文会、1936 年（〔復刻版〕原書房、1968 年）。趙軍は『対支回顧録』下の掲載人数が 832 名、『続対支回顧録』下が、213 名、『東亜先覚志士記伝』下が 1,018 名と数えている。趙軍「近代日本と中国の一接点―大陸浪人、大アジア主義と中国の関係を中心として―」『駒沢女子大学　研究紀要』第 2 号、1995 年。しかし、筆者が再度集計し直した掲載人数は、『対支回顧録』下においては 822 名で、うち、「鏡泊学園の犠牲者」の項（1433 頁）の記載人数を含めると 831 名である。

(5) 対支功労者伝記編纂会『続対支回顧録』上・下、東亜同文会、1942 年（〔復刻版〕原書房、1973 年）。

(6) 葛生能久『東亜先覚志士記伝』上・中・下、黒龍会出版部、1933 年、1935 年、1936 年（〔復刻版〕原書房、1966 年）。黒龍会の機関誌については、櫻井良樹「黒龍会とその機関誌」『黒龍会関係資料集』1、柏書房株式会社、1992 年。黒龍会『黒龍会三十五年事歴』、1935 年。

(7) この着想に至った先行研究として、小峰和夫『満洲紳士録の研究』吉川弘文館、2010 年。対支回顧録も同時代的要素として「紳士録」と捉え直すことが可能であると判断した。

(8) 野口武「日清貿易研究所出身者の『立身』と教育機会（1）」『国際問題研究所紀要』第 147 号、2016 年 3 月。同論文では、本稿で公表する「日清貿易研究所生一覧表」をもとに、データ分析を行い考察した。

についてはそちらを参照していただくものとし、本稿では以下に、①『対支回顧録』の編纂背景について、②「日清貿易研究所生一覧表」の作成について述べてみたい。

Ⅰ 『対支回顧録』の出版経緯について

1 対支回顧録の外観――書誌と凡例

はじめに、『対支回顧録』(以下、引用括弧は削除)の外観から眺めてみたい。対支回顧録は1936年4月に東亜同文会から上下巻の二冊に分けられて出版された。この経緯は後述するとして、同書における数少ない情報源として、上巻、下巻ともそれぞれ別々に巻頭言と凡例が付してあることに気づく。この巻頭言と凡例に基づけば、上下巻とも以下の役割が見て取れる。

まず、上巻は当時東亜同文会会長であった近衛文麿が巻頭言を執筆し、中島眞雄と白岩龍平(理事長)の連署で凡例末に名が挙げられている。上巻の凡例によれば、明治初年から満州事変まで、執筆期間中の重要事件として日中間に生じた「重要記事」が記載された(9)。一方の下巻は中島眞雄の巻頭言で、「列伝」として明治初年から執筆期間までにおいて「対支功労者の事蹟」を収録したものとなっている。ただし下巻の凡例として、①英雄伝でも人物伝でもなくその「功績」の大小を問わないこと、②軍陣において戦没した人物に対して中国に関係したもの及び「単独あるいは国隊特別任務」に従事したものを採録したこと、③出版した段階で伝記が刊行された人物は事歴のみを採録したこと、④列伝記載の順序は功績ではなくおよその年代順として並べたことが述べられている。(10)

上巻の巻頭言を記した近衛文麿は、明治以来の対中情勢に「此間幾多先輩諸士が、身命を擲ち艱難に處して、国運の発展に資し、国力を培養したる結晶に他ならぬ」として述べ、一方の下巻では主編となった中島眞雄が「壮年筆を投じ亡友等の驥尾に附して大陸に奔走するもの四十餘年。遂に涓滴の国恩に報ゆるなく徒らに山林に老死するは其平生の志にあらざるを思ひ、せめて幾多先輩の残せる対支事績を顕彰」するものだと述べている(11)。

これら上下巻それぞれの凡例の記載からは、東亜同文会が対中問題の時勢に対処するなかで「貢献」を果たしてきた「事績」として、自団体を整理する上で自らを「顕彰」することが刊行の目的であったと理解することができる。(12)

また、上巻には編纂・刊行に際して、外務省、陸軍省といった国家機関や関連人物を掲載して

---

(9) 「凡例」『対支回顧録』上、1 頁。『支那』27 巻の白岩の報告では、「明治三年支那と修好条規及び通商章程の締結交渉を皮切りと致し、昭和六年満州事変に至る七十年間に亘る交渉事件と其の間に活躍した先亡功労者八百十数名の事績を列伝的に編述した」と述べている。白岩龍平「対支回顧録出版一部完成に就いての報告」(霞山会館記事」)『支那』第 27 巻第 5 号、東亜同文会、1936 年 5 月、152 頁。

(10) 「凡例」『対支回顧録』下。

(11) 「本書刊行に就て」『対支回顧録』上。

(12) 近年、戦争慰霊者の「顕彰」を課題とした論考が成果としてあげられている。例えば、矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館、2006 年。国家的ナショナリズムを前にして「慰霊」あるいは「顕彰」されるという要素を考慮した場合、東亜同文会や東亜同文書院の道徳規範や思想形成とは無関係ではいられない。

いる[13]。これらは言うまでもなく東亜同文会と関連した主体的人物であるが、この点も後述する。

2　対支先覚者伝記編纂委員会の組織―『支那』と『白岩龍平日記』

次ぎに対支回顧録がどのように編纂されたのか時系列に沿って整理してみたい。この点は東亜同文会機関紙の『支那』と中村義編纂の『白岩龍平日記』(以下、『白岩日記』と略称)から追うことができる。

企画が提起された時期については、『支那』26巻2号から、1932年10月頃に同文会内の「有志事業」として「同志者」の申しあわせで始まったとの記述が窺える[14]。この同志者が誰を指すのかは不明であるが、同時期の中島眞雄は鎌倉で「功労者」を弔う準備を立てており、中島を中心とする人間関係のなかから持ち上がった話だと考えられる。ひとまず、東亜同文会の組織の中で発足した時期は、1933年5月に「対支先覚者伝記編纂委員会」が設置されたことが『支那』27巻5号の報告で確認できるため[15]、この時期から編輯が本格始動したのであろう。

ここで注視したいのは「対支先覚者伝記編纂委員会」の東亜同文会内部における位置である。東亜同文会及び東亜同文書院の事業を簡説すれば、それは主として「調査研究」と「教育」に集約される[16]。この二つの要素は東亜同文会の結成当初から継続して事業が展開した。前者の「調査研究」は調査の実行と刊行物の出版を中心に、1907年に組織体制の調整で本部に「調査編纂部」が設置されると、1920年代に至るまでには、機関紙『支那』の発行とあわせて、『支那経済全書』に見られるような刊行物を相次いで出版していた。また、一方の東亜同文書院を中心とする「教育」事業に対しては、この調査編纂部を通じて東亜同文書院にも分担がなされており、書院生の調査報告書を通じて編纂・出版活動に結びつけられていた。

対支回顧録出版に至る前提として、こうした東亜同文会内部に「調査編纂部」が置かれ、「編纂」「出版」を中心とする事業活動が展開されていたことも要因のひとつとして挙げられる。

しかしながら、対支回顧録が編纂された1930年代当時の調査編纂部の動向を確認すると、機関紙『支那』の発行以外に、外務省委託の『支那人名鑑』販売やその他51種類の書籍刊行、これにあわせて研究会や講演会活動を行いながらも、対支回顧録は「調査編纂部」の事業活動には位置づけられていない[17]。

第一次世界大戦後の東亜同文会の情勢を整理した翟新によれば、中国の関税自主権撤廃や外国輸入品の内地関税実施などにおける産業保護路線に対して日本企業の損害を憂慮した結果、パリ講和会議後の山東問題に対しては国際情勢を配慮した権益擁護として日本政府に同調したが、しかし、五四運動などに見られる中国側のナショナリズム激化とワシントン会議における治

---

(13) 「凡例」『対支回顧録』上、1-2 頁。

(14) 「東亜同文会記事」『支那』第 26 巻第 2 号、1935 年2月、197 頁。

(15) 白岩龍平「対支回顧録出版一部完成に就いての報告」(霞山会館記事」)『支那』第 27 巻第 5 号、1936 年 5 月、151-152 頁。「対支先覚者伝記編纂委員会の成立」『支那』第 24 巻第 11 号、1933 年 11 月、108 頁。

(16) 翟新「中国における調査活動」(第七章)『東亜同文会と中国:近代日本史における対外理念とその実践』慶應義塾大学出版会, 2001 年。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015246500、東亜同文会関係雑件　第七巻(H-4-2-0-1_007)(外務省外交史料館)。藤田佳久「東亜同文会の組織及び文化事業等諸活動」(活動編解題・第五章)『東亜同文会史・昭和編』財団法人霞山会、2003 年。

(17) 「5-1-1 東亜同文会組織沿革(昭和 3 年?)」『東亜同文会史・昭和編』590 頁。

外法権撤廃要求の最中に生じた五三〇事件によって、日本の主導性を前提としながらも日本政府とは路線を異にする権益擁護の立場を取ったとする。ところが、親ソ路線の北京民国政府及び北伐推進の南京国民政府の南北両政権に対して懐疑を抱き、既得権益による経済活動を前提としながら事業活動を展開する東亜同文会では言説に齟齬が生じていると、さらに指摘している[19]。

こうした時勢への態度と合わせて、「教育」事業（東亜同文書院、天津同文書院、漢口同文書院）は「対支文化事業」として外務省委託の中核事業に組み込まれたものの、開始当初から経費不足をめぐる国庫補助金三千円の削減、反日気運による教育利権回収運動によって難航した時代である[20]。さらに東亜同文会にとって打撃となったのは、1923年の関東大震災で、それまで蒐集した資料をはじめ図書及び刊行物や一切を消失したことと、これにあわせて世界恐慌の余波から円相場の下落による補助金の削減[21]、さらに満州事変勃発による時勢悪化[22]は、会の運営方針の転換を余儀なくされたと言える。

『白岩日記』によれば、1933年の時点で東亜同文会理事長であった白岩龍平[19]は、同年5月19日まで満州事変後の視察に出ており、5月27日に同文会理事会で報告を皮切りに、日華実業協会（29日）、外務省文化事業部（30日）、満蒙協会（31日）、同文会（6月1日）と、白岩自身の関係する諸団体で旅行視察の報告を相次いでしている。この背面で、同文会側に対しては「講座研究部更生案」「編纂部更生」と日記に現れるように、研究部の再編や機関紙『支那』の改良に力を注いでいた時期である[23]。

---

(19) 同時期の東亜同文会の満州事変に対する態度については、翟新「第一次世界大戦後の日中共存論」（第８章）、「満州事変期の時局観」（第９章）『東亜同文会と中国：近代日本史における対外理念とその実践』。

(20) 東亜同文会及び東亜同文書院の「文化事業」について、対外認識と文化事業への志向性を問うものとして、細野浩二「東亜同文会の対外認識と文化工作――欧米列強と清末民初中国のはざまで――」阿部洋編『日中関係と文化摩擦』巌南堂書店、1982 年。対支文化事業と東亜同文書院の教育義業については、阿部洋「対支文化事業の発足」（第二部）『「対支文化事業」の研究』汲古書院、2004 年、を参照した。

(21) 昭和期の東亜同文会の事業の動向は、『支那』および外務省外交史料館収蔵の資料によって確認できるが、関東大震災での資料紛失によって、1929～1931 年、1940 年以降の事業報告書が失われている。『東亜同文会史・昭和編』62 頁。

(22) 特に牧野伸顕が会長就任後、「文化面」の充実を方針として、機関紙『支那』も順応し「政治外交ノ批判ヲ避クルト共ニ、主トシテ現代支那ノ政治、経済、文化各方面ノ学術的研究調査ヲ採録スル」として発行部数を 1400 部、120 頁を増加し、購買者 700 名、官庁寄贈 200、関係者 300、広告掲載及募集用として 100 を配布した。このほか特殊出版物の刊行、調査編纂と出版引受、「支那事情講習会」、定例講演会（支那談話会、公開講演会、学生支那問題講習会）、研究会（支那学術研究会、水曜研究会及小委員会）が実施された。「5-3-4 東亜同文会調査編纂部事業概要(昭和 7 年)」『東亜同文会史・昭和編』624 頁。

(19) 1930 年代時期の白岩龍平については、中村義『白岩龍平日記 アジア主義実業家の生涯』研文出版、1999 年（以下、『白岩日記』と略称）が最も参考になる。

(23) 『白岩日記』1933 年 5 月 27 日～6 月 1 日の条、527-529 頁。7月 1 日、7 月 10 日の条、536-537 頁。8 月 26 日の条、543 頁。また、満州事変を契機に、調査編纂部は「研究編纂部」として改称し、専任部長制を廃止して理事の者を委員、または理事長を委員長として部務を処理することとなった。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015256700、東亜同文会関係雑件／補助関係 第六巻(H-4-2-0-1_1_006)(外務省外交史料館)。

『白岩日記』は1933年4月22日の視察報告から始まっており、それ以前の動向が途絶えているため東亜同文会と伝記編纂にいかような因果があるのか、この時点では判然としない。しかし、伝記編纂の動向については、同年の10月9日に「伝記編纂事務に付き打合せ」たとして、委員長となった中島眞雄と面会を果たしてから会の調整が開始され[24]、10月19日には委員が「20名許」集合している[25]。

この開始時点での「伝記編纂委員会」の位置づけについてはそれ以上の情報が得られない。とはいえ、これらのことから判断すると、対支回顧録の史料属性には、『支那』の企画に現れるような、時局情勢をテーマに「公」へ向けて意見提示するような対外的な要素よりも、東亜同文会内部で自団体の足跡を辿り、再整理を通じて自己を再確認しようとする、対内的要素が色濃く現れたものだと捉えられる。

1933年10月以降は翌年2月7日、2月16日に伝記編纂の「小委員会」を開いており、編纂へ向けての実質的な場として、これ以降に実質的な作業が進展したと考えられる[26]。

3　編纂の主体

編纂の組織や事務体制についても東亜同文会内に伝記編纂委員会が置かれた以上のことは不明である。ただし、『支那』に記載されている各会の「報告」や白岩の動向から、編纂協力者の関係を考察することは可能である。

実質的に編纂の主編となったのは中島眞雄である。中島は自叙伝として『不退庵の一生』[27]という本を残している。同書は対支回顧録の「補遺」に位置づけられるもので、対支回顧録、続対支回顧録を完成させた後に、中島自ら回顧して述べているものである。

この回顧録によれば、中島は幼少期から母親が中島家と離縁した関係上、家族間及び地域を転々として過ごしたが、青年期に至るまでに母親の再嫁先である三浦梧楼の縁者となる。伯父にあたる三浦梧楼とは、三浦が維新後に兵部省へ出仕するために東京へ出向いた際に初めて面会した。以後、中島は1874年に15歳で上京するまで、三浦の「秘書」的存在として神風連の乱に同行したり、単身東北旅行へ起ち、鎌倉・洪川老師に参禅したりするなど、人伝いに世を渡り歩き、「浪人」的気質を養った。

---

(24) 『白岩日記』1933 年 10 月 9 日の条、551 頁。

(25) 『白岩日記』1933 年 10 月 19 日の条、554 頁。

(26) 『白岩日記』1934 年 2 月 7 日、2 月 16 日の条、572-573 頁。

(27) 「はしがき」を昭和 19 年（1944 年）11 月に緒方竹虎が記している。緒方によれば対支回顧録編纂の段階で、中島についても記載するよう再三依頼したが、中島はこれを辞去したと述べられている。中島眞雄『不退庵の一生　中島眞雄翁自叙伝』我観社、1945 年。白岩や中島たちの背面で、中国側にて対支文化事業を担った橋川文三は『不退庵の一生』について、対支回顧録及びその続編が編纂された点について「敬服」するとした上で、記述は「淡々としたもので、たとえば中島の思想遍歴とか、中国関心の内容を明らかにしようとしても雲をつかむようなところがある」として中島について述べている。また同回顧録の記述について「一種禅味をおびた沈黙のようなものが感じられるし、自家宣伝の臭味がない。彼は二十歳前後から鎌倉円覚寺の今北洪川のもとで参禅しているが、その他にも観樹（三浦悟郎：筆者）やその仲間の鳥尾小彌太などの影響もあったのだろうか、大陸浪人風の粗大な感触が感じられない。その文章も、黒龍会系の伝記に見られる厭味がないと私は思う」と書評している。橋川文三「中島真雄のこと」『歴史と人物』中央公論社、1971 年 11 月号（橋川文三『逆順の思想―脱亜論以後』勁草書房、1973 年所収）。

中島は三浦家の人脈伝いに1890年に福州に渡清する。日清貿易研究所に関与するのは1892年のことで、根津一の仲介を受けそのまま日清商品陳列所にも参与した。日清戦争になると、陳列所の撤退から第二師団の従軍記者となり、戦後は渡台し台北県庁へ出向くも、閔妃事件で三浦が投獄されたことを理由に帰国許可を得て広島へ戻る。その後は京都、沖縄（八重山の鉱山開発）、大阪（造幣局の機械注文）と各地を移動した。この間様々な人脈のなかで、再度渡清して福州へ戻ると、1897年に『閩報』を創刊し、その際に陳宝琛や孫葆瑨、陳璧ら有力な福建人と交遊を重ねた。義和団事件の頃には清朝の大官に向けて東亜同文会の宣伝を根津から依頼され北京へ移動し、天津での『順天時報』創刊（1901年）はこの関係上による。

中島の青年時代は炭鉱や銀行など多くの事業に関与しているが、「実業が向かない」[28]と自身も述べているとおり、起業はしても経営者としての才覚は開花しなかったようである。彼が『順天時報』創刊以後に記者活動を積極的に行い得たのは、それまで辿った人脈関係の中で、有力者として三浦梧郎をはじめ児玉源太郎などの政府筋の援助を得ている点が大きい。これは中島に限ったことではないが、同時期「実業エリート」を志す人間が、何かしらの事業や地域を渡り歩く間に、人的仲介を得て「立身」してゆく過程のひとつのケースとして捉えても意味深い。

その後、日露戦争時には外務省へ『順天時報』を売却、さらに営口で『満洲日報』、盛京で『盛京時報』といった新聞事業を大正期にかけて展開してゆくのも、様々な人脈関係を仲介しながら事業を果たし得たことを考慮する必要がある。そうした新聞事業で共に活動してきた人物たちのうち、編輯に関して支援された人物として一宮房治郎、稲垣伸太郎、辻岡三郎、佐藤善雄、菊池貞二、河内山武雄、大石智郎、営業上に関係した人物として染谷保蔵、相部政太郎、斉藤松三、瀬戸保太郎、宮川貫作、斉藤周造、山本久治、大橋熊三郎、岩間彦三の名を挙げている[29]。一宮房治郎や染谷保蔵は同時期の白岩日記にも頻出しており関係性も深い。

一方、もう一人の編纂主体者となった白岩龍平は、中島とは日清貿易研究所以来の旧知の間柄であり、在清時代においても東亜同文会への参加においても、時勢に対して常に共闘してきた間柄である。白岩自身は日清貿易研究所を卒業した後、日清汽船会社の母体となる大東汽船（新利洋行、湖南汽船の立ち上げ、これらは後に日清汽船に合併）を創業し、以来、日中間をまたぐ実業家として「成功」を収めていた。

晩年の中島が新聞事業を手がけながら「情報通」となると同時に多くの人脈関係を形勢し、とりわけ日中間をまたぐ政府関係者や実業界の人間関係を仲介し得る存在となった一方で、一起業主から、国の支援を受けながら準国策的事業家として発展的「成功」を収めた白岩自身の社会的役割を考えた場合、日中間をまたぐ事業斡旋（仲介/ビジネスインキュベーター）を行い得る日本財界の顔役へと成長した「実業エリート」であると捉えることは容易であろう[30]。両者は『対支回顧

---

(28) 『不退庵の一生』28 頁。

(29) 『不退庵の一生』52 頁。満洲日報については、李相哲「営口『満洲日報』と中島真雄――満州における初の日本人経営の新聞とその創刊者について」『マス・コミュニケーション研究』43 号、 日本マス・コミュニケーション学会、1993 年。なお中島の回顧では 1905 年 10 月としているが、李氏は 8 月以前であると指摘している。この指摘からも回顧録の遺漏性は免れ得ない。

(30) 永谷は明治・大正期に形勢されていく「実業家」像の社会的プロセスを可視化している。特に、実業家が残した雑誌や刊行物以外にも、明治 20 年代に数多く発行された「人名録」や「紳士録」の持つ史料性を「メディア」として捉えて分析し、単なる高額納税者として財力にものを言わせた「長者番付」のステータスだけでなく、自身等の位置づけ方について「自己の事績を正当化する言説」が生み出されてい

録』が編纂された時点では、日中「実業界」の顔役としてパイオニア的役割を果たしてきた東亜同文会の指導者であった。

対支回顧録編纂の役割分担としては、中島が執筆編纂を実質的に担ったのに対して、白岩は東亜同文会の理事長としても当然であるが、編纂の後ろ盾として会の報告やイベントの主催、事務の後援を担い、刊行に向けての準備活動を調整している(31)。

その他の「20名許」とするスタッフについては、1933年5月の対支先覚者伝記編纂委員会の発足時に発起人としての人名が挙げられており、近衛文麿や、林權助、本多熊太郎、小川平吉、一宮房次郎、川島浪速、床次竹次郎、坪上貞二、松井石根、佐藤安之助、中島眞雄、鎌田勝太郎、船津辰一郎、菊池武夫、安達謙藏、小幡酉吉、芳澤謙吉、白岩龍平、井戸川辰三　瀬川淺之進、水野梅暁、井上雅二、坂西利八郎、高木陸郎、柏原文太郎の蒼々たる人物たちが名を連ねている(32)。

また、『対支回顧録』の上巻に付されている「凡例」には、「多大の援助を与へられて事を附記」したとして、外務省、陸軍省、参謀本部、在支帝国大使館、在満支帝国領事館、賞勲局、各府県庁、全国市町村役場、南満洲鉄道株式会社、在華日本紡績同業会、大日本紡績聯合会、児玉兼次、町野武馬、吉田茂、小幡酉吉、実相寺貞彦、船津辰一郎、田鍋安之助、緒方二三、郡島忠次郎、隈本康真、小貫慶治、甲斐靖、平山周、水野梅暁、松井石根、本多熊太郎、佐藤安之助、土井市之進、土井伊八、井上雅二、宮島大八、染谷保蔵、菊池貞二、油谷恭一、落合泰蔵、牧田武、宇治田直義、根岸佶、瀬川淺之進、吉田増次郎、湯野川忠一、中村純九郎、柴五郎、井戸川辰三、瀬戸保太郎の諸機関・団体、人物名が挙げられており、別項に分けられて、井上幸一（故）、松井七夫、西村虎太郎、岡野増次郎、布施知足、高木富五郎、三沢信一、香月梅外、雑賀博愛、中山優、高倉徹一等、として、出版される直前の1936年3月に、中島と白岩の連名で謝意が示されている(33)。

編纂委員会が発足した開始時点（1933年5月）と、刊行後の終了時点（1936年4月、続対支回顧録が続くため一時終了ではある）の人物を対比した場合、2つの時点で両方に名が刻まれている人物が存在する。東亜同文会関係者であれば、白岩と中島以外には井上雅二がいる。井上は荒尾精が京都に隠棲した時期の門弟であり、後には「南洋方面」の事業家となる人物で南洋関連の経緯には明るかった人物であろう。これ以外の緒方二三、実相寺貞彦などの漢口楽善堂以来の協力者や、土井伊八や郡嶋忠次郎などの日清貿易研究所卒業生、一宮房治郎や岡野増次郎な

ったことを指摘している。その上で、実業家像に刻まれた国益主義や文化的戦略性についても及ぶ。明治期の実業エリートが形成されていった過程については、永谷健『富豪の時代　実業エリートと近代日本』新曜社、2007 年、227 頁。『対支回顧録』も「対外的言説」を用意しようとしたと捉えれば、団体の性質を捉える上で、白岩をはじめとする東亜同文会の実業や教育、文化的戦略が問われなければならないが、『白岩日記』に解題をつけた白岩の人生を総じて「アジア主義実業家」とする中村義は、白岩の辿った軌跡について「舞台が航運、通商、借款など経済分野から教育文化にも及ぶため、日本近代政治史、経済史、外交史など広汎なジャンルの数えきれぬほどの先行研究、業績に立ち向かわなければならない」と述べており、広汎に渡る研究課題に対して、多くの検証作業が必要となる。白岩自身についても論考が乏しい。『白岩日記』695 頁。中村義「アジア主義実業化論――白岩龍平と中国――」歴史科学協議会編集『歴史評論』614 号、校倉書房、2001 年 6 月。

(31) 同指摘は中村義による。『白岩日記』156 頁。

(32) 「東亜同文会記事」『支那』第 24 巻第 11 号、1933 年 11 月、108 頁。

(33) 「凡例」『対支回顧録』上、1-2 頁。

どの書院卒業生などの存在を確認することができる。これらの人物は東亜同文会の系譜を実体験し、その経緯を語るに足る社会的地位にある人物である。こうした中島・白岩以外の人物は、1933年の開始時点から随時協力者が増えていったものだと推察しうる。

いまここでそのすべての人間関係を分析しきることは筆者の能力を超えているため、同時期の人間関係像全体を明らかにすることができないが、このほかにも、外務省系列の人物であれば、瀬川淺之進、小幡酉吉、本多熊太郎、船津辰一郎、政治家あるいは支那通軍人であれば、床次竹次郎（大蔵省、1913年政友会）、松井石根（陸軍大将）、佐藤安之助（参謀本部出身、1915年陸軍大佐）の存在を確認することができる。東亜同文会設立に至る日本陸軍との接点や1920年代の対支文化事業（東方文化事業）を通じての外務省との協働を考えれば[34]、これら人物が関係することも当然であり、彼等を軸に各省庁などの国家機関へ編纂協力の依頼がなされたことが考えられる。対して、1933年の発足時から、出版の段階で名が消えている人物は、外務省関連の人物として林権助と芳沢謙吉、政治家や支那通軍人として張作霖・学良親子に関与した菊池武夫などを確認することができる。

特に、これら人物のうち、当時東京在住であった郡嶋忠次郎や香月梅外の日清貿易研究所出身者は、同時期の白岩日記のやりとりのなかにも散見しており、同研究所の人脈関係が東亜同文会内に根強く作用していることも見て取れる。

彼等以外にもここに挙げられた人物は、当然東亜同文会を通じて顔を合わせており、随時編纂に関する情報交換や資料提供がなされたのであろう。いずれにせよ、ここに挙げられている諸機関・団体、人物は編纂当時、東亜同文会に参加していた主要人物であり、これら存在が刊行の支援者であり、編纂の主体であったと言える。

4 原稿査閲と資料蒐集

『対支回顧録』下巻の「人物列伝」に関する執筆は、中島眞雄を委員長として、1934年中におよそ五百人分の伝記を完成させ、その後完成時までに八百十数名に至ったとしている。[35] この点は、1934年中に伝記編纂として骨子を作成してから、情報不足者に対する史料収集に及んだことが考えられる。

上巻については、『白岩日記』に、1935年3月9日に東亜同文会より「対支功労者伝記原稿第一篇征韓論副島外務卿赴清の条を閲覧」し、3日後の11日には中島から提示された「伝記編纂部第八章海運篇を一閲」、6月6日には「同文会伝記編纂稿本中各団体の記述の内直接関係ある分を一通閲」したとして、原稿査読の形跡が残されている[36]。これらから、上巻の骨子については1935年中に編輯過程が進展したものと見える。

資料蒐集に関しても『白岩日記』から一端を追うことができる。例えば、1934年6月には、田鍋安之助が九州へ出張するに伴い、伝記編纂の取り調べについて白岩と中島が共に聴取するために行動している[37]。田鍋は日清貿易研究所所属以来、終始協力者であったが、田鍋以外にも香月、

---

(34) 前掲、阿部洋「対支文化事業の発足」『「対支文化事業」の研究』。

(35) 白岩龍平「対支回顧録出版一部完成に就いての報告」（霞山会館記事」）『支那』第 27 巻第 5 号、1936 年 5 月、152 頁。

(36) 『白岩日記』1935 年 3 月 9 日、1935 年 3 月 11 日の条、1935 年 6 月 5 日の条、641、657 頁。また原稿は「稿を改むること実に7回」に及んだという。『支那』第 27 巻第 5 号、1936 年 5 月、151 頁。

(37) 『白岩日記』1934 年 6 月 11 日の条、591 頁。

郡島らの名が同時期の『白岩日記』から散見される。

日清貿易研究所の出身者に関して、『対支回顧録』上巻の凡例には、郡島忠次郎、隈本康真、甲斐靖、土井伊八、三沢信一、香月梅外の存在を確認することができる。このうち、香月梅外も卒業後に貿易業関係に携わり日中間を行き来していた人物である。香月は1932年に日本へ戻り、中国語教師として東京へ滞在しており、この編纂が進められてゆく時期と重なる【研究所生一覧表：No49】。郡島も輸出業において日中を渡り歩いた人物で、東亜同文書院が成立する以前の南京同文書院の段階で、根津一の命で九州へ遊説に出るなど、卒業後の東亜同文会に対する関与が強く、彼もまた1930年の段階で外地から引き揚げてきている【研究所生一覧表：No54】[38]。

対支回顧録編纂のうち、日清貿易研究所や東亜同文書院出身者が一定数を占め、かつ経歴がおよそ明らかになっているのは、香月や郡島が資料蒐集に協力していたのであろう。研究所の存在が消滅した後も一定の「成功」を収めた彼等の人的交流は、東亜同文会を介在して常に協働関係にあり、東京の霞山会館で執筆過程にあった中島眞雄と共に、白岩龍平が伝記の関係者の調査先をつないでいたと考えられる。また、漢口楽善堂以来関係した田鍋安之助や、緒方二三、実相寺貞彦、荒尾精の門弟となった井上雅二、南京同文書院あるいは初期東亜同文書院出身の水野梅暁、菊池貞二、牧田武、油谷恭一といった、これらの人物たちは白岩を介して東亜同文会に接続された存在として捉えられよう。

実質的な蒐集作業に当っては、白岩が「非常に骨が折れるのでありますが、之も官民の関係各方面から色々お世話を願つて」[39]と述べており、困難を極めたようである。同年10月27日の『白岩日記』には、海軍の津田静枝少将を訪問し、伝記中の死亡者に関する協力依頼を要請しており、翌1935年2月5日には、拓務次官の入江海平に「対支功労者伝記につき説明合力方懇願」したとして各省庁に対して照会をかけている[40]。

外務省側の史料では、1935年5月4日に、東亜亜同文会の対支功労者伝記編纂会委員代表として近衛文麿名義のもと、外務省大臣官房人事課長・日高信太郎あてに、18名の所在不明者に対する原籍地、遺族の氏名と所在地、及び死亡年月日に関する身辺調査が図られたことが確認できる[41]。

---

(38) 『対支回顧録』下、香月梅外の項、407 頁、郡島忠次郎の項、519 頁。なお、香月梅外、田鍋安之助、角田隆郎、郡嶋忠次郎、三澤信一は東亜先覚志士記伝の資料提供にも関与している。「凡例」、葛生能久『東亜先覚志士記伝』黒龍会出版部、1936 年。

(39) 「東亜同文会記事」『支那』第 26 巻第 2 号、1935 年2月、197 頁。

(40) 『白岩日記』1934 年 10 月 27 日、1935 年 2 月 5 日の条、615、635 頁。

(41) 昭和十年五月四日、対支功労者伝記編纂会委員代表近衛文麿より外務大臣官房人事課日高信太郎宛、「対支功労者伝記編纂事業ニ関スル件」1935 年、防衛省防衛研究所所蔵（陸軍省-陸満密大日記-S10-1-23）。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C01003048500、昭和 10 年、「満受大日記 11 冊の内其3 陸満密終了目録 自 3.14～3.16」。このうち調査対象の人物は以下のとおりである。池田寛治（初代天津領事、『対支回顧録』下、53 頁）、石原初太郎（三十四年頃杭州領事館警部、『対支回顧録』下、795 頁）、大倉謹吾（二十二年頃上海領事館書記、『対支回顧録』下、25 頁）、渡辺典一郎（十三年頃北京公使館書記生、『対支回顧録』下、204 頁）、南部陳（十三年頃北京公使館書記生、『対支回顧録』下、190 頁）、穎川高清（十三年外務二等属、『対支回顧録』下、203 頁）、水野長知（十九年頃外務二等属、『対支回顧録』下、203 頁）、宮崎駿児（交際官試補十九年頃、『対支回顧録』下、204 頁）、平部二郎（外務書記生十八年頃、『対支回顧録』下、204 頁）、伊集院兼良（十九年交際官試補、『対支回顧録』下、194 頁）、大賀亀吉（領事、『対支回顧録』は未記載）、大越成徳（公使『対支回

その史料から、このうち丸毛直利に対する調査を例に取れば、5月13日（16日接受）に外務大臣官房人事課から品川区役所へ向けて、住所（本籍地）の身辺調査が図られており、5月25日に東京市品川区長工藤隆治の名義で、本籍地及び家督相続者に関する回答をなしている[42]。また、6月には逓信大臣官房秘書かから外務大臣官房人事課にあてて、「履歴事項ノ件」として寺田一郎の照会に関する回答が述べられている。

この寺田に対する回答には「大正十二年ノ震火災ニ因リ」之カ参考トナルヘキ関係書類焼失シ不明ノ處内閣ニ保管ノ履歴書ニ就キ調査」したとして寺田の履歴書が付されている。同様に、寺田以外の残りの17名に対しても、「孰レモ退官後相当ノ時日ヲ経過シ居ルヲ以テ其調査ニ当リテハ甚タ困難アリタルモ各方面トノ照覆ノ結果・・・・・・9名ニ付テハ照会先ニ於テ大震火災等ニ因リ記録文書ノ焼失等アリタル次第」であるとして、退官後の状況や関東大震災の影響によって、人物調査に及んだ行政の照会先でも情報収集が困難であった様が窺える[43]。

これらのことから、『対支回顧録』上巻の凡例に挙げられた、外務省、陸軍省、参謀本部、在支帝国大使館、在満支帝国領事館、賞勲局、各府県庁、全国市町村役場、南満洲鉄道株式会社の組織・団体は、伝記編纂の資料蒐集及び人物調査に協力した関係上、列記されたものである。

5　対支功労者への慰霊

特筆すべきは、1934年2月の近衛篤麿没後30周年祭と9月の荒尾精（没後39年）の追悼座談会、靖亜神社との関連性である。前者の近衛30周年祭は、本会では年明けから調整が続けられ、白岩が幹事役として2月11日に東京の本会と上海の東亜同文書院において挙行した[44]。後者の荒尾追悼記念に関しては、同年8月20日に霞山会館にて座談会開催の相談か催され、9月7日に実施している[45]。これらの祭事とあわせて、東亜同文書院長大内暢三の提案による書院敷地内の靖亜神社[46]建立が進められ、近衛篤麿と荒尾精及び初代院長であった根津一を「三先覚」として「書

顧録』は未記載）、大河平隆則（領事、『対支回顧録』下、418 頁）、加藤義三（領事、『対支回顧録』は未記載）、村瀬忠房（上海領事館書記生、『対支回顧録』下、203 頁）、丸毛直利（大使館参事官、『対支回顧録』下、759 頁）、寺田一郎（香港領事館書記生、『対支回顧録』下、194 頁）、水品梅処（北京公使館書記生、『対支回顧録』下、194 頁）。また、これより以前に、4 月 21 日外務省大臣官房宛、室田義文（衆議院議員）とのやりとりで田辺太一（元清国臨時代理公使）の調査が行われている。4 月 24 日には、外務省人事課森清吾宛で、坂田重次郎、高橋場太郎、田辺太一に関する調査がやりとりされている（坂田、高橋は対支回顧録には不掲載）。『対支回顧録』下、丸毛直利の項、759 頁。

(42) 同上史料、JACAR、Ref.C01003048500、0214 コマ目。『対支回顧録』下、寺田一郎の項、194 頁。

(43) 同上史料、JACAR、Ref.C01003048500、0225 コマ目。

(44) 『支那』（拡大特輯号：近衛霞山公記念誌）第 25 巻第 2 号、1934 年 2 月、『白岩日記』1934 年 1 月 9 日、10 日、19 日の条、567-569 頁、2 月 10 日、11 日の条、572 頁。

(45) 『支那』（二十五周年記念号：追憶東方齋荒尾先生）第 25 巻第 10 号、1934 年 10 月、1-292 頁。『白岩日記』1934 年 8 月 20 日、604 頁、9 月 7 日の条、607 頁。

(46) 靖亜神社は、1934 年の近衛篤麿 30 周年記念の挙行を機に、同年 4 月、当時院長であった大内暢三の提言で、総工費予算 8,516 元のもと 1935 年 11 月 10 日に東亜同文書院の敷地内に鎮座祭が挙行され建立された。実質的に対処を成した書院教授山田謙吉（岳陽）を委員長として、その御神体は根津一の軍刀、近衛篤麿の宝刀、荒尾精の神剣が山田謙吉を通じて寄進、奉納された。また、これら「三先覚」以外にも、東亜同文会の他、日清貿易研究所、東亜同文書院（在学中逝去者を含む）の出身者、計 646 名の関係者が合祀された。『支那』26 号には、このうち「日清貿易研究所並同文会経営に関し特別援助者」として、松方正義、川上操六、長岡護美、岸田吟香、陸実、池邊吉太郎、佐々友

院精神」の主柱に位置づけている[47]。

これらの企画編纂の間、白岩は7月から10月にかけて、従来の調査編纂部を研究編纂部としてあらためると同時に、それまで雑誌『支那』の改良手段として企画特集を組むようになっていたが、東亜同文会関係者や『支那』の発行兼編輯印刷人であった宇治田直義と随時調整を図りながら、両追悼イベントに対して着々と準備を進めている。この祭事における行動を考慮すれば、同時期の東亜同文会自らの存在意義を「国家貢献」に結びつけて捉え直そうとしていたことが考えられる。

1933年11月の対支先覚者伝記編纂委員会が組織された際に、その伝記編纂について「従来支那問題に関与せる人物程環境に恵まれずして終生を犠牲となしたるものは、他に其類例を見ざることも亦世間周知の事実である。されど此の轗軻不遇怜佇孤行数十年の生涯を此の問題に捧げて冥々の中に国運の進展に資したる功績は沒すべからざるもの有るは今更贅言を要せざる所なるも、未だ之に対して何等酬ひらるゝ所なきは同人等の看過し能はざる所である」[48]と述べている。

対中問題において何等かの状況で落命したものたちを「犠牲者」と扱い、「国運の進展に資したる功績」として顕彰し、国家発展への貢献者として位置づけなおすこと、これが対支回顧録編纂の第一義の目的であった。同時期に並行して行われた催事として、対支回顧録の編纂に求められた思惑を考慮すれば、「三先覚」以外の人物を補い、名の知れぬ「国家貢献者」を慰霊し、顕彰することに自団体の存在意義をかけたことも考えられる。

白岩は1934年10月の荒尾追悼号に際し、満州事変以後の情勢に対し「日本の対外関係や対内

房、内藤虎次郎、成田与作、原口聞一、鍋島直大、青木周蔵、井出三郎、佐藤正、福島安正、恒屋盛服、国友重章、安東俊明、福田和五郎、野澤雞一、山口正一郎、江藤哲三、江藤新作、佐藤宏、伊集院彦吉、細川護成、津軽英麿、犬養毅、床次竹次郎、「日清貿易研究所職員」として、猪飼麻次郎、小山秋作、西村忠四郎、宗方小太郎、御幡雅文、草場謹三郎、井澤彦三郎、山口嵓、中西正樹、片山俊彦（外 12 名）、「日清貿易研究所関係者」として、鐘﨑三郎、中西重太郎、浦敬一、高見武夫、広岡安太、藤島武彦、石川伍一、山崎羔三郎（外 3 名）、「日清貿易研究所卒業生」として、猪田正吉、楠内友次郎、藤崎秀、福原林平（外 53 名）、「南京同文書院功労者及び卒業生」として、佐藤正、山田良政、西田龍太、曽根原千代三、中村兼善、西本省三（外 5 名）、「東亜同文書院卒業生」として、坂東末三、松井小右衛門、横山吏弓、野村正、大間知芳之助、山田勝治（外 507 名）として列記されている。ここでそのすべてを列記しないが、御神体の手続き経緯や、合祀者の人物選定などについて、同年の白岩日記からもやりとりがなされていることが読み取れる（例えば、『白岩日記』1934 年 7 月 14 日、11 月 21 日の条、1935 年 5 月 7 日、10 月 11 日、16 日、30 日の条、596、621、652、654、678-679、682 頁）。また、『支那』26 号の先頭論文に、牧野伸顕が「靖亜神社の建立に就て」と題して、「対支先覚諸氏の胎した偉業勲績を一々枚挙するならば、単にそれだけで悠々数巻の書を編まなければならない。即ち我等は夙に此の点に鑑むる所あり、別に対支先覚者伝記編纂委員会を設けて先烈の偉業勲績を永く後世に顕揚せんと期しつつある次第である」と述べていることからも、これら追悼祭が連動して行われたことが理解できる。また「靖亜神社鎮座祭式典」（執筆者不明）には当日式典の概要がまとめられているが、「元来此の計画たるや日支関係の先駆者として国事に殉難犠牲となられた対支先覚者の招魂社とも云ふべきものである」との言も見られる。今、その思想性を問うことは筆者の能力に余るので、この点は他稿を期したい。これら詳細は、『支那』（靖亜神社建立記念号）第 26 巻第 10 号、1935 年 12 月。また、戦後の状況については、村上武編『靖亜神社秋季大祭記念資料集』靖亜神社、1988 年。なお、『東亜の先覚者　根津先生竝夫人』には 1939 年 4 月 11 日に東亜同文会哈爾賓支部で流された放送が原稿化されている。ただし内容は荒尾、根津、近衞らと東亜同文会及び書院の設立経緯についてである。宗像金吾編『東亜の先覚者　根津先生竝夫人』内外出版印刷株式会社、1943 年。

(47) 『白岩日記』1934 年 7 月 14 日、596 頁 11 月 26 日の条、621 頁。

(48) 「対支先覚者伝記編纂委員会の成立」『支那』第 24 巻第 11 号、1933 年 11 月、108 頁。

事情は誰も想像の出来なかつた程の変遷を見つゝあつて、いづれの方面も、精神的に先人を思慕するとか故人を憶ふといふ感じが非常に篤くなりました」とし、このため近衛の30周年祭と書院の靖亜神社と連動して、「先師の面影を此際もう一度見出して、之を自分等だけでなしに世間にも紹介したい」と、これら追悼祭と対支回顧録編纂の目的と近しい内容を述べている(49)。実質、こうした荒尾や近衛の霊祭・靖亜神社の建立とあわせて「対支功労者」として伝記編纂によって足跡を辿ることは、1934年中の東亜同文会の事業の中では連動している。

これら一連の動向について、まとめ直せば、対中関係において「国家貢献」をなした荒尾精や近衛篤麿、根津一を筆頭に慰霊祭を行ったことと、それまで着目されてこなかった人物を『対支回顧録』としてひとつに集約したことは、両側面において連動した「祭事」であり、東亜同文会自らの顕彰と「国家的顕彰」を結びつけることによって、自らの団体的結束を再度強固にしようとする意図があった。

この一方で、近衛、荒尾らの慰霊祭と連動する縁起を作ったのは中島眞雄である。1932年の10月に同志で企画し、翌年に編纂委員会を立ち上げてから、中島自身が編纂を本格化させたと思われる時期は、中島が鎌倉に居を落ち着かせた1934年の段階であると考えられる。中島が実質的に編纂作業を行っていたのは鎌倉に在住しはじめてからのことで、鎌倉から東京麹町の霞山会館に通って執筆作業にかかっていた。

中島の鎌倉との縁起は、鎌倉の長谷寺に一室を借りた日露戦争前のことで、『順天時報』の経営が傾いた頃であった(50)。本格的に居を構えたのは1913年に帰国した頃で、長谷寺の本堂続きを新築して母親を移住させ、同時に自身の上京時の拠点としていた(51)。「そして又私は常に対支功労先烈供養の為めに、一宇の観音堂を鎌倉に建立したき希望を持つて居た」たとの想いとともに、奈良の忍辱山にあった古堂を鎌倉の腐朽していた長壽寺に移した。ところが観音堂を建立する以前に関東大震災によって家屋が倒壊したため、1923年の10月に神戸へ、翌24年8月に大連へ移った後、1926年に盛京時報を辞職した後帰国し、観音堂も竣工し、1928年に住宅を含めて完成した。さらに、1931年の4月26日に、「多数支那関係者を招いて入仏式を行ひ、爾来毎歳春秋二期支那関係者参列の下に、之が法要を怠らず続けて居る」(52)のであった。

中島の回顧によれば、1934年の紀元節に東亜同文会と黒龍会の双方で「先輩の満支鮮に尽力した人達のお祭りを日比谷公会堂で催したが、其席上これはお祭りばかりでなく、夫れ等功労者の伝記を編纂して、世に公にしては如何かとの諸が起り」(53)、共同で編纂を持ちかけたが、会毎に

(49) 『支那』第 25 巻第 10 号、1934 年 10 月、276 頁。

(50) 順天時報の資金繰りのため 1902 年に帰国したが、警視庁の密偵が張り付いたため、寺内正毅(陸相)に相談すると北京へ戻るよう進められたため、北京へ戻っている。『不退庵の一生』32 頁。

(51) 『不退庵の一生』53 頁。

(52) 『不退庵の一生』54 頁。

(53) 『不退庵の一生』55 頁。1934 年 1 月 6 日の同文会理事会以後、近衛篤麿の祭典につき協議を重ねる最中、2 月 4 日から黒龍会編纂の『先覚志士紀伝』を閲読しはじめ、2 月 22 日に読了している。『白岩日記』1934 年 2 月 4 日、2 月 22 日の条、571、574 頁。中島の言とあわせて考えると、黒龍会と東亜同文会は、同時期に同様の対処をしていた。黒龍会についてはひとまず、松沢哲成「『黒龍』(1901.5～1908.3)」、小島麗逸編『戦前の中国時論誌研究』文献解題 26 中国関係新雑誌解題Ⅱ、アジア経済研究所、1978 年。また、日比谷公会堂での慰霊祭については、『東亜先覚志士記伝』上巻の末尾に補足説明がある。その説明によれば、黒龍会主導での満洲問題挙国一致各派聯合会主催のもと、東亜同文会、東洋協会、日露協会、南洋協会、中央朝鮮協会などが参加し、1933 年 2 月の紀

別々に行われることになった。このため、同文会側でも対支功労者伝記編纂委員会を組織し、中島自身が監修となり編纂に対支回顧録の携わったことを述べている。こうした、慰霊を弔う「空間」を中島が用意し、自ら体感していたことによって、「対支功労者」の伝記編纂へと発展した契機になったものだと考えられる。

6　編纂過程から出版まで

以後、1936年4月に出版に至るまでの過程は、1935年4月13日に東亜同文会理事会が開催され、諸報告が済まされた後、「伝記編纂事業補助の件を附議、今秋完成迄の不足額約四千円を同文会より支出の事可決」したとある。およそ四千円の不足額をどのように捻出したのか、また出版費に総額いくらかけたのかは史料上定かでない。とはいえ、同日午後二時から評議会を開き、1935年度の予算について審議決定したことが確認できる(54)。

5月15日には東京の霞山会館で伝記編纂の印刷出版につき説明会を開催し、あわせて啓明会の鶴見佐吉雄へ出版補助の支援を依頼している(55)。8月7日には白岩と岡野増次郎が同行し、自動車で井の頭にあった三浦邸（中島は三浦梧郎の縁者）へ向かっている。これは「三浦邸に事務所を暑中移転した」ためである。この年、古希であった中島には酷暑であったようである(56)。およそ1935年の夏以降は、刊行の体裁が整い、白岩と中島で打合せを経ながら進展したと考えられ、12月12日に霞山会館にて中島と「伝記刊行の事に付協議」し、「凡例近公〔近衞文麿：筆者〕署名の巻頭言等を決定」したとある。

白岩は「すべて中島氏のみの名をだすこととし、余との連名にとの中島氏の提案を修正した。功を譲り名を避けるの意にて此意義ある大事業は実に中島氏の三年に亘る労苦に成るものにて、氏の晩年の事業として署名させることが実質に副ふものでもあり当然と思ふたからである。此事業は実に我先輩同志の紀念碑であって余の提唱に本づき中島氏が全精神を込めた精神的偉業であ

元節に日比谷公園音楽堂にて 1,454 柱を慰霊した。『東亜先覚志士記伝』上巻、886 頁。

(54) 白岩日記には「八年度決算一〇年度予算につき審議決定」とあり、1933年度の決算と1935年の予算について同日に協議されたことが分かる。なぜ1933年度の決算について審議が諮られたかは不明である。『白岩日記』1935年4月13日の条、647-648頁。
また、『東亜同文会史・昭和編』にまとめられている「表 1-6 収支予算（収支決算記載） 本部費経常支出」には、1935 年度の費目のひとつに「対支先覚者伝記編纂費」として 400 円の費目が立てられている。「表 1-8 収支決算 本部支出」には、1934 年度の同費目に 1000 円、1935 年度の費目に 500 円の記載がある。ひとまず、本部経費から捻出されたことが分かるが、白岩日記には「不足額四千円」とあり数字が一致しない。なお、東亜同文会および東亜同文書院の収支予算には、一年度につき①本来の収支予算、②翌年度の収支予算に前年度予算として掲載されたもの、③収支決算に記載されたもの、の三系列が存在する。さらに費目によって数値が食い違うことが指摘されている。「（付）東亜同文会会計資料－解題」（摂津斉彦執筆）、「表 1-6 収支予算（収支決算記載） 本部費経常支出」、「表 1-8 収支決算 本部支出」『東亜同文会史・昭和編』656、677-678、680-681 頁。

(55) 鶴見佐吉雄への出版補助依頼は、7 月 22 日に白岩と中島で啓明会の鶴見を訪問し、「伝記出版の事に付書類を呈示して懇談を遂げた」とある。しかし、11 月 30 日に中島と白岩協議の上、白岩が撤回の書類を鶴見へ送っている。また同日、伝記編纂に関して満鉄へ援助を近衛文麿に要請している。『白岩日記』1935 年 5 月 15 日の条、11 月 30 日の条、652、666、688-689 頁。

(56) 『白岩日記』1935 年 8 月 7 日の条、668 頁。

るのである」[57]と述べている。

この年の12月28日には中島から白岩に向けて「対支回顧録上巻を受領」したとあるが、結局、刊行された上巻は連名になっているため、その後の経緯が知れない[58]。

刊行は翌1936年4月であるが、4月11日に霞山会館にて完成披露宴を開催している。また、4月22日には宮内大臣・松平恒雄を通じて、天皇皇后両陛下、皇太后陛下に献本がなされた[59]。

Ⅱ　日清貿易研究所生一覧表について

1　日清貿易研究所生一覧表の作成作業の契機

「日清貿易研究所生一覧表」を作成した契機には、冒頭にも述べたように、第一に『国際問題研究所紀要』第147号の拙稿論文を分析するために作成したものである。日清貿易研究所の記載については、同稿で詳細を検討しているため重複をさけるものとしてここでは記述を省略する。

第二に、同表の主たる根拠として、対支回顧録をはじめとする「人物列伝」をもとに作成し直した。特に、この結果再確認し得たのは、日清貿易研究所出身者が、『対支回顧録』『続対支回顧録』『東亜先覚志士記伝』の人物列伝に頻出することである。この上、同三書を史料として活用しようとした場合、どの人物が記載されているのかをめぐって出典頁を確認せねばならず、煩雑な作業が必要になる。このため、出典頁を明記した一覧表の作成に思い至った。ここでは、以下に上記の二点を理由に及んだ同表作成の作業について、判断した点をとりまとめてみたい。

2 「人物列伝」の重複人物

対支回顧録、続対支回顧録は先述の通り、東亜同文会で編纂されたものであるが、東亜先覚志士記伝は黒龍会が編纂した。言うまでもなく『続対支回顧録』は、『対支回顧録』の続編として1941年に刊行されたものであるが、1936年刊行の『東亜先覚志士記伝』は『対支回顧録』が編纂された時期と重なる。

---

(57) 『白岩日記』1935 年 12 月 12 日の条、690-691 頁。

(58) 『白岩日記』1935 年 12 月 28 日の条、694 頁。「凡例」『対支回顧録』上、1-2 頁。

(59) 白岩は体調を崩したため欠席し、宇治田直義(『支那』発行兼編輯・印刷人)が代理で挨拶を代読した。会中、本多熊太郎(来賓代表)の謝辞で、伝記編纂事業の存続を切望するとの声が出されており、『続対支回顧録』への刊行へと繋がってゆく。同披露宴の出席者は、井戸川辰三、岩村成允、井上雅二、五百木良三、一宮房次郎、林久治郎、男爵林權助、服部漸、坂西利八郎、西村虎太郎、侯爵細川護立、本多熊太郎、北條太陽、等々力森蔵、子爵岡部長景、荻野元太郎、岡野増次郎、小幡酉吉、緒方竹虎、大竹貫一、小貫慶治、大西齋、岡田謙一、大林一之、和田助一、神津助太郎、香月梅外、河野久太郎、河野仙之助、片谷伝造、神田正雄、吉田茂、吉岡文六、芳澤謙吉、横矢重道、横澤次郎、吉村庄太郎、高木陸郎、田鍋安之助、高倉徹一、高木富五郎、角田隆郎、中島眞雄＊、中山優、中島裁之、宇治田直義、郡島忠次郎、八角三郎、松井石根、町野武馬、松井七夫、深尾幸太郎、寺西秀武、秋月左都夫、油谷恭一、秋山昱禧、雑賀博愛、男爵菊池武夫、湯野川忠一、宮島大八、三澤信一、実相寺貞彦、重田鉄夫、平川周、関口泰、瀬川淺之進、須永元、杉本重道、鈴木恭堅、牧田武、森下笑吉、土井伊八、小川平吉、諸氏(順序不同)として『支那』27 巻 5 号に挙げられている。このうち下線(筆者)が日清貿易研究所出身者である。「対支功労者伝記編纂会」『支那』第 27 巻第 5 号、1936 年 11 月、151-154 頁。

表項目の出典欄のうち、「①『対支回顧録』下」、「②『続対支回顧録』下」、「③『東亜先覚志士記伝』下」には、それぞれ下巻「人物列伝」の先頭の出典頁を記載した。日清貿易研究所出身者を例にとりあげても、この出典頁から明らかなように、東亜同文会（対支功労者伝記編纂会）編纂の『対支回顧録』と『続対支回顧録』には、人物の重複は見られない。一方、『対支回顧録』と『東亜先覚志士記伝』には、記載の重なる人物が存在する。また、上述したように、日清貿易研究所出身者の一部は対支回顧録編纂に関与しており、彼等もまた多くが『対支回顧録』に記載されている。遺憾ながら、人物列伝において人物の選定、順列についてはいずれの三書も不明である。とはいえ、白岩は1934年の2月に近衞篤麿の祭典を指揮する際に、『東亜先覚志士記伝』を自ら取り寄せ、一覧（2月4日～22日、註30参照）しており、2月7日と、2月16日に同文会編纂部小委員会を開いている[60]。人物選定に及び、推測上、『対支回顧録』には何等かの意図が加わったことは考えられる。

3　人物列伝の記述パターン

本表を作成した際に、「人物列伝」から以下の記述パターンが見えてくる。ここでは、『対支回顧録』と『東亜先覚志士記伝』の記述に対して、記述パターンを把握するために、本表【No.2】に記載した「小池信美」を例にとりあげて、考察してみたい[61]。なお、小池信美自身の経歴については、本表の記載に負うものとして、ここでは詳述を避ける。

具体的に、「人物伝」の記述パターンとしての構成を以下に示すことができる。

①氏名、②その個人の家系、③家族関係、④身分、⑤出生地、⑥生年月日である。これらは各個人の属性情報としてまとめられる。人物によっては、両親に先立たれたり、親族と離縁したりするため、家系や出生の経緯が挿入される人物もいる。

小池信美を例に取れば、まず、前半部分は、その個人の家系、家族関係、身分、出生地、生年月日が同時に記述される。氏名については、本名以外にも「称号」をもつ人物が存在する。小池の号・「霞庵」は、東亜先覚志士記伝に記載されている。このうち、両書で記載の異なる点は、身分の説明について対支回顧録が「阿部藩士」としているのに対し、東亜先覚志士記伝が「棚倉藩士」と記述している。こうした細かい記載の差異は、当然随所に見受けられる。

次ぎに、幼少期から青年期にかけての記述が記載される。記述される項目としては、⑦幼少期の人柄、⑧「立身」の志、青年期に地域を移動していれば、⑨移動した経緯が語られる。小池の場合は、両書とも17歳で中国へ渡航したことが述べられているが、対支回顧録のほうが、渡航後に上海領事館（林権助）を頼って中国語学習を修めたことなどの経緯について比較的詳細に触れている。日清貿易研究所出身者の多くは日清戦争時に「通訳」として動員されている。このため、日清戦争以後の記述は、⑩通訳の身分、⑪従軍した部隊、⑫戦後の所属先が記載される。

小池が日清戦争時に陸軍通訳官として従軍した記述は両書に存在する。しかし、戦後、台湾総督府の通訳官として台北、台南にて任官したとの記述が対支回顧録にある一方で、東亜先覚志士記伝には「厦門方面」に及んで「画策に従ふ所があった」として、何等かの「活動」に及んだことを

(60) 『東亜先覚志士記伝』は 1936 年 11 月に刊行されるが、巻頭の内田良平の言に「編纂に着手してより星霜茲に六閲年」とあり、およそ3年で刊行した『対支回顧録』よりも時間をかけている。この 1934 年2月の段階で、両者の差異化が図られたと推察される。『白岩日記』1934 年 2 月 4 日、1935 年 2 月 11 日の条、571-572 頁。内田良平「跋」、葛生能久『東亜先覚志士記伝』黒龍会出版部、1936 年、1 頁。

(61) 『対支回顧録』小池信美の項、550 頁。『東亜先覚志士記伝』小池信美の項、547-548 頁。

臭わせる記述の仕方をしている。台湾の赴任に関しては、『旧植民地人事総覧』の台湾編などを調べると、1900（明治33年、4月1日現在～1903年まで）に、台北地方法院宜蘭出張所兼台北地方法院通訳、として在籍していたことを確認できる[62]。小池の場合は、日清戦争に従軍してから台湾の植民地行政に関与した記述であるが、その他の人物の立志してからの記述は、日清戦争以外にも義和団事件や戊戌政変、日露戦争、山東出兵などの重大事件に関与した記載が目立つ。こうした「功績」が記述されるのと同時に、⑬晩年・没年までの記述、ということになる。

この後、小池は大阪朝日新聞社に入社する。『対支回顧録』にも、『東亜先覚志士記伝』にも、大朝入社と、新聞社を仲介した留学生支援に関する一文が記載されている。その記述の差異は、『対支回顧録』が日露戦争時の招聘について「新聞社務のため之を辞し」と述べているのに対して、『東亜先覚志士記伝』では、内藤湖南に推薦による入社である点、支援した留学生のうち袁翼、陳承修、銭鈞、施弼、楊熙年などの名を出している。小池は辛亥革命になると特派員として漢口に出張している。両書ともその記者活動を評価した記述があるが、『対支回顧録』では、その特派記事に重きが置かれた理由に、「支那留学生の為に尽瘁した因縁があるから」と結びつけている。1915年に喉を痛めて小池は逝去してしまうが、この点の記述は両書ともほぼ同様である。

小池に対する『対支回顧録』での人物評は、「君躯幹短小、精悍の気眉宇に溢れた」との一文のみで、比較的平易に記述されている。これに対して、『東亜先覚志士記伝』の「人物評」では、「姿性恬淡豪快、好く飲み好く談じ、酔へば益々快活となりて裸踊りにまで発展した。平素直言忌まざるの風があつたが常に一誠を以て貫き、談笑の間に他の性行を矯むるが如き美徳を有し、上下の差別なく人を待ち、義侠的の気質によつて日本人のみならず支那人からも甚だ敬愛せられた」として『東亜先覚志士記伝』のほうがより人物像を重視した叙述方法になっている。これ以外に、記述の材料が乏しかったと思われる人物に対しては、⑭会話形式のエピソードや⑮記述を補うための資料[63]が挿入されている。

4 「日清貿易研究所生一覧表」項目の凡例

以下に同表の項目について述べておく。本表に関して、上述した点とあわせて以下の項目を作成して表に記載した。

(1)【No.】・【氏名】・【出身県】　氏名については、全員の読み方を判別できなかった。このため、出身県別に並び替え、順不同で表記するものとし、その上で番号をふった。

(2)【出身地】　出身地については、出典史料により表記が異なる。このため、原則1888年4月に実施された市町村制に依拠して表記した。また括弧内は現在の所轄地である。

(3)【戸籍】　戸籍については、便宜上の目安として、原則1898年の戸籍法に依拠して判断した。

(4)【家系・身分】　家系や身分について、一部史料表記上から判断できるものはそのままとし、判別しないものは一部出身地から判断した。

(5)【続柄】　続柄について、「長男」「二男」「三男」「四男」と表記した。「次子」「次男」「二男」等の表記はすべて「二男」に統一した。

---

(62) 『旧植民地人事総覧』台湾編1、日本図書センター、1997 年、191、192、269、268、353、354 頁。

(63) 例えば、鐘崎三郎や楠内友次郎など、早逝した人物に多い。『対支回顧録』鐘崎三郎、楠内友次郎の項、580、583-587 頁。

(6)【出生時期】・【没年時期/満年齢】　出生時期・没年時期について、史料上判別できるものは表記した。没年がわかるものは満年齢を表記した。

(7)研究所参加前の経歴　研究所参加後の経歴　経歴は、日清貿易研究所の参加前と参加後に分けて記載した。年号は和暦で統一した。

(8)各出典欄　出典については、以下の史料を中心に記載し、出典頁(先頭頁のみ)を表記した。

A:主要出典

①『対支回顧録』下　:先頭の出典頁を記載

②『続対支回顧録』下　:先頭の出典頁を記載

③『東亜先覚志士記伝』下 :先頭の出典頁を記載

B:旧植民地統治に関与した人物は、台湾中央研究院近代史研究所のデータベース「台湾総督府職員録系統」及び『旧植民地人事総覧』で確認した。

④『旧植民地人事総覧』

記載例:台-1-88　＝『旧植民地人事総覧』台湾編第1巻, 88頁

⑤「台湾総督府職員録系統」

職＝『台湾総督府職員録』

甲＝『職員録甲』

乙＝『職員録乙』

文＝『台湾総督府文官職員録』

所＝『台湾総督府及所属官署職員録』

記載例:甲M30-642　＝『職員録甲』明治30年, 642頁

C:同時代的な人物伝として、皓星社のWebデータベースおよび『日本人物情報大系』を確認した。

⑥「皓星社データベース」

芳賀登, 杉本つとむ, 森睦彦, 阿津坂林太郎, 丸山信, 大久保久雄編『日本人物情報大系』皓星社, 1999年

記載例:企業家編39-326　＝『日本人物情報大系』企業家編, 39巻, 326頁

＝中西利八編纂『財界人物選集』第5版、財界人物選集刊行会、1939年、1239頁

D:以下の史料では日清貿易研究所生の氏名を確認することができる。登場人物の記載有無、出典頁を表記した。

⑦『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』 :出典頁を記載

⑧「第一学期試験成績表」 :氏名の有無を記載(有＝○)

⑨『河野久太郎伝』卒業写真　:氏名の有無を記載(有＝○)

⑩『上海新報』 記載例:50号　＝「日清貿易研究所現存生徒諸子の決心」『上海新報』第50号

E:その他、すべてを銘記することができず遺漏は免れ得ないが、個別の出典史料として確認できるものは参考文献欄に記載した。

(9)【備考】　備考欄には本人の称号や家族情報、史料上関係する内容について表記した。また、同表を作成するため、以下の参考文献を参照した。そのうち①～⑩までの通し番号は、同表の参考文献欄と対照している。

おわりに

以上のように、1936年4月に刊行された『対支回顧録』は、明治初年から執筆期間までにおいて、特に下巻の「人物列伝」を中心に、対中問題で果たした「功労者の事蹟」を東亜同文会自らが「顕彰」する目的をもって編纂されたものだと言える。

その編纂過程は、1933年5月に「対支先覚者伝記編纂委員会」が設置されて以後、中島眞雄を実質的な主編として、白岩龍平が後援体制を調整しつつ実施された。編纂の実質的主体者となったこの両者は、1930年代にはそれまでの人脈関係から、日中間の政府関係者や実業界の各種「実業」を「斡旋」・「仲介」し得る大きな「顔役」として老成していた人物である。このほかにも漢口楽善堂や日清貿易研究所に関連する人物をはじめ外務省や陸軍の人物を仲介して、各府県庁、全国市町村役場、各産業界の照会を通じて史料収集から編纂がなされた形跡が窺える。

この背後では中島の慰霊を弔う姿勢を起点として、白岩主導の下、1934年2月の近衞篤麿没後30周年祭と、同年9月の荒尾精の追悼座談会、東亜同文書院に建立された靖亜神社が祭事として連動して催された。『対支回顧録』のもつ史料属性も、対中問題における「落命者」を「国家の犠牲者」として位置づけ、「顕彰」している点においては、これらの催事と同様に明示している。あわせて、1936年4月に完成披露宴を催し、天皇皇后両陛下、皇太后陛下に献本がなされたことからも、自団体の「称揚」的要素が強いものと考えられる。

また、本稿は「日清貿易研究所生一覧表」の作成に及んだことを契機として執筆した。日清貿易研究所の出身者に関して述べれば、香月や郡嶋のように、白岩と行動を共にしながら対支回顧録編纂に協力した人物が存在する。『対支回顧録』に漢口楽善堂や日清貿易研究所、東亜同文会や書院に関連した人物が多く記載されているのは、彼等自身が編纂に関与しているためでもある。特に分析対象とした日清貿易研究所生の「人物列伝」に限って記述パターンを要約すれば、①氏名、②その個人の家系、③家族関係、④身分、⑤出生地、⑥生年月日、⑦幼少期の人柄、⑧「立身」の志、⑨移動した経緯、⑩通訳の身分、⑪従軍した部隊、⑫戦後の所属先、⑬晩年・没年まで、⑭「人物評」となる。これら項目は筆者の用意した目安程度にすぎないが、各個人ひとつ毎の事象において、「功績」が強調された記述となっている。

日清貿易研究所生一覧表

野口武「日清貿易研究所生一覧表の作成と『対支回顧録』編纂をめぐる若干の考察」,『OCCASIONAL PAPER』No.5, 愛知大学国際問題研究所, 2016年
（http://www.aichi-u.ac.jp/aiia/book.html#occasional）付表：日清貿易研究所生一欄表

No	氏名	出身県	出身地	戸籍	家系・身分	続柄	出生時期	没年時期・満年齢	家系・研究所参加前の経歴	研究所参加後の経歴	①対支回顧録	②続対支回顧録	③東亜先覚志士記伝	④旧満民地人名総覧	⑤台湾総督府職員録系統	⑥地見社データベース日本人物情報大系	⑦沿革史附録	⑧第一学期試験成績表	⑨同期会名簿写真	⑩上海新報	参考文献	備考
1	佐賀鉄治郎（鉄次郎）	北海道								明治30年11月（1日現在）、台中県埔里社辨務署主記。 明治32年2月（現在）、台東庁総務課通訳（土語通訳兼掌者銓衡委員）。 明治33年4月（現在）、同上。 満洲普蘭店満韓塩業公司				台-1-88、166、243	甲M30-642 甲M32-720 甲M33-801		12		○			＊『沿革史』は「鉄治郎」、『河野伝』卒業写真では「鉄次郎」。
2	小池信美	福島	東白川郡棚倉町 （現白川郡棚倉町）	士族	棚倉藩士	二男	明治6年1月15日	大正4年6月4日 43歳	父・阿部家家臣、須藤信甲。 東京麻布にて出生。 7歳、親戚小池信徳の養子。養父信徳は風雅の道に入り、家道振るわず。 明治22年、単身渡清（17歳）。領事のもと（上海領事林権助？）に身を寄せ中国語学習。領事館を辞して厦門へ、商事会社に勤務。	明治22年頃、荒尾の知遇を得て、研究所参加。 日清戦争時、陸軍通訳官。凱旋後、台湾総督府の通訳官として台北、台南にて任官。その間、厦門方面にて画策。 明治33年（4月1日現在）、台北地方法院宜蘭出張所（明治34年4月1日現在、明治35年5月1日現在、明治36年まで）兼台北地方法院通訳。 明治36年、内藤湖南に推薦により、大阪朝日新聞社入社、通信部にて中国関係の通信事務、社務の傍ら、留学生の袁翼、陳承修、銭鈞、施弼、楊熙年などの人材を育成。 明治40年、東京朝日新聞入社、政治記者、中国関係記者、東西朝日の連絡係。 辛亥革命時、特派員として漢口へ、漢口通信を報道。 大正4年5月、咽喉の病により東京へ、帝大医科付属病院に入院。	550		547	台-1-191、192、269、268、353、354	甲M33-749、750 甲M34-790、791 職M35-25、26						『明治新聞雑誌関係者略伝』69頁	＊号、霞庵。 ＊長男・信行。
3	栗村顕三郎	宮城		士族	仙台藩士	長男	明治2年11月1日	明治43年10月14日 42歳	父・伊達家家臣、栗村質。	明治23年、研究所入所。家に許可を得ず事後承諾。 明治26年、卒業後、8月、日清商品陳列所。 日清戦争時、清国官憲に捕縛されるが正金銀行上海支店長西巻豊佐久により庇護され帰国。後、陸軍通訳官第2師団属、山東各地に転戦。 明治28年5月、師団に従い台湾へ。高雄で土地購入。 明治30年、土地を売却し、北米大陸へ。旅費が尽きると、ボーイ、鉄道工夫、人夫請負。貯蓄を得るとシカゴ市ブライアン商業学校入学、商学士となり、商店開設。後、知人に託してサンフランシスコへ。日露戦争中につき、友人とホテル経営（サンフランシスコ地震で後に倒壊）。 明治38年、帰朝。 明治39年4月、上海にて結婚。後、天津で泰東同文局開設、主管。教育用品玩具および書籍など販売。本業は藤山雷太、星野錫、伊沢修二、河村利助、湯浅武彦、阿多広介などが商議。株主拡張増資の意見が起ると、尚早を論じて不同意するも増資決定したため、店務一切を妻に託して、帰朝。大連満洲日々新聞社入社（日清印刷会社か）。 明治42年、帰郷。家計悪化のため、家族にも秘密裏に目黒にて飲食店経営。この頃罹病。	645		430				○	○	50号		＊妻・たか子は東北帝大卒。 ＊『対支』では大連満洲日々新聞社、『続対支』では日清印刷会社。
4	河西信	茨城	水戸市	士族	水戸藩士		慶応3年10月	昭和4年6月12日 63歳	父・水戸藩士、河西酉太郎。	明治23年、研究所入所。 後、外務省留学生、芝罘に留学。 明治27年5月、領事館書記生、京城在勤。 明治29年2月、上海転任。 明治31年3月、桑港赴任、ワシントンに転任。 明治39年6月、天津転勤。 明治41年、重慶転任。辛亥革命に遭遇。 大正元年10月、副領事。汕頭に赴任し領事代理。 大正4年12月、九江転任（7月に閉館）、領事事務代理。 大正6年6月、領事。 大正9年6月、依願退官。退官後、如水会幹事。	622													
5	角田隆郎	千葉	安房郡南三原村三原 （旧和田町、現南房総市）	士族			明治4年3月17日		先祖は里見家客将、房州天津城主里見丹後守一明代々土地の理正、総大名主。 祖父は同村渡辺家より入婿。 幼時、父古八は地方委員として木更津など出張、祖父に養育される。 11歳、吉田勤爾の家に寄食、北条小学校に通学。 14歳、上京を試み失敗、伯父角田佳一（東京大学医学部）にドイツ語を学ぶ。 15歳、上京、東京英語学校（神田錦町）に通学、夜間は私立学校にて数学を学ぶ。母方叔父窪田氏のもとに寄寓、牛乳販売・配達手伝い。 明治23年、高等商業学校試験に合格せず、町田実一と荒尾精の構想を新聞で知り、町田を訪問、紹介により荒尾に面会。	明治23年9月、研究所入所。 明治26年6月、卒業。日清商品陳列所入所。向野堅一、大川愛次郎、鍾崎三郎、荒井甲子之助とともに北四川路仁智里（月4元）に居住。 日清戦争時、向野堅一、鍾崎三郎とともに根津一、小山秋作の命により、漢口茶商に変装して、虹口久慶里に北京駐在武官神尾光臣からの密電取り次ぎの機関事務所を開設。8月初旬、英租界泥城橋畔の同窓生合宿所へ避難。引揚げ勧告を受けず投獄される（楠内友次郎、福原林平、吉原洋三郎、伊東良造、三谷末次郎も）。呉淞から長崎へ、御幡雅文、土井伊八をまち京都へ、陳列所の帳簿整理に着手するが、荒尾の勧告により従軍。 明治27年9月、同窓の平野六郎、吉原洋三郎、水谷三郎と西下、広島大本営にて第2師団司令部附通訳官。10月、花園河口上陸（鍾崎、山崎、猪田、大熊など）後、ニューヨークヘラルド従軍記者クリールマン、仏・ドラブリー伯の世話係。金州陥落後、兵站事務。宋慶軍1万5千と対峙。軍司令部、憲兵司令部、民政署の仕事手伝い、捕虜取調、訴訟繙訳、占領地宣撫、物資買入及輸送など執掌。 明治28年5月、第2師団司令部・乃木師団長附、台湾淡水へ。劉徳杓対抗のため澎湖島出張。マラリア罹病。辞職。道中、療養。 明治29年春、帰郷。10月、荒尾精客死、葬儀参列。 明治30年、益田三郎、暹羅国王弟より森林伐採権を得ると、小山秋作の勧めにより渡暹。山林視察後、阿川太郎と知己となり、雑貨店監督、タイ語学習。 明治31年春、帰京。戊戌政変に際し、小山秋作が劉坤一・張之洞のもとに派遣、これに同行、通訳。 明治32年、坪野平太郎の神戸貿易銀行に入店。 明治33年1月、坪野の仲介で大阪商船会社入社。支那部書記兼運輸部書記。南支那航路視察として、支那部主任石原市松・主事深尾隆太郎と香港・汕頭を視察、沿岸航路開拓。10月、漢口支店勤務。事務代行。鎮江、撫湖、九江、沙市、宜昌を整備。 明治34年秋、赤痢により帰朝。明治35年5月、漢口支店助役。漢口支店長堀啓二郎が上海支店長兼務のため、事実上事務一切を担当。 明治40年4月、郵船、商船、湖南、大東の四汽船会社を合併、日清汽船会社創立、漢口支店長就任。 明治41年1月、辰丸事件対処、漢口に居留民制布かれ、行政委員会副議長。 明治44年10月、辛亥革命遭遇。邦人避難に尽力。 大正5年、漢口にコレラ流行、感染（仮死状態となる）。 大正6年11月、監査役となり帰朝。大正7年10月、南洋視察（千浦友七郎仲介）。ジャワ島ソロー洲スンバルラーワン・サイザルの繊維採取のためオランダ人経営の農地買収。バタビアのハムリン洲農園、茶・ゴム栽培、東印拓殖会社に茶農園を、南洋興業会社にゴム園を区分、南洋興業の常務取締役。スマトラ島バレンバンにて虎に遭遇。ボルネオ島サンガサンガの石油地帯を視察。 大正11年、日華実業協会幹事。3月、上海へ、排日打開のため日清汽船会社顧問王一亭を介して商務総会会長宋漢章、中華学芸会会長殷汝驪、章士釗など歴訪、張謇と面会。漢口に戻り呂超伯と面会。5月24日、洛陽にて呉佩孚と面会。北京から奉天、大連・旅順をへて帰朝。 大正12年6月、日清汽船会社専務取締役。北支那航路開航着手・香港、汕頭、広東、青島、天津を視察。 昭和6年12月、専務辞任、平取締役。 昭和7年3月、辞職。病の治療に専念。	351					企業家編39-326 中西利八編纂『財界人物選集』第5版、財界人物選集刊行会、1939年、1239頁		○	○	50号		＊陳列所在籍中、向野堅一、大川愛次郎、鍾崎三郎、荒井甲子之助とともに北四川路仁智里に共同居住していた（家賃月4元）。 ＊台湾、大阪商船時代の記述あり。 ＊『上海新報』50号には「隆司郎」の記載。「日清貿易研究所第一学期試験成績表」では「隆二郎」。
6	松崎翠	千葉								明治29年11月（1日現在）、台湾総督府台北県淡水支庁通訳生。 明治30年11月（1日現在）、台中県租税課属兼通訳。（岩元嘉次郎と同僚か） 東京市神田区錦町日本売薬会社				台-1-48、86	甲M29-610 甲M30-640		15	○		50号		「台湾総督府職員録系統」には、大正15年以降に同姓同名の人物が検出されるが、出身地が大分であるため別人物と考えられる。
7	関口六三郎（池橋六三郎）	埼玉	秩父郡槻川村 （現東秩父村）						16歳、上京、神田区錦町の明治義塾、英語学習。 明治18年4月、アメリカに渡航（4年滞在）。 明治22年10月、帰朝。	明治23年9月、研究所入所。 日清戦争時、従軍、海軍通訳官、海軍司令部附、旅順口にて勤務。 義和団事件の時、北京。 明治36年、真泉病院（東京市下谷区根津須賀町）設立経営。その後、日本医学専門学校（私立日本医科大学）を創立。 大正7年、病により辞職、以後隠棲。	598						9	○	○	50号		＊『上海新報』50号には「池橋」で記載。

8	中川義弥	東京	東京市 京橋区 中橋和泉町 （現中央区）			長男	明治7年 11月21日		父・旧幕臣、中川義造。 明治22年、高等小学校卒業後、同時に大叔父武石恭義の世話で、荒尾の書生となる。	明治23年、荒尾に随行、研究所入所。 明治25年、病により帰京し療養・回復。 明治27年9月、陸軍通訳官、第2軍第1師団第2旅団司令部附、西寛次郎少将に従い遼東へ、金州、旅順、太平山、田荘台など戦闘参加。 明治28年5月、辞職し帰京。10月、陸軍通訳官、台湾総督府附。淡水憲兵隊勤務。 明治30年7月、辞職、帰京。10月、中嶋真雄に随行、福州、厦門を旅行。 明治31年、東京国民英学会入学。英語を専修。 明治33年4月、同会普通科を卒業。義和団事件時には有馬組に入り天津にて勤務、病により帰京。 明治36年5月、大阪商船会社入社、宣昌、重慶など勤務。 明治40年、日清汽船会社成立後も勤務続行。 大正9年7月、辞職、千葉県館山に蟄居。 大正12年、大震災に遭遇。家財焼失。 大正14年4月、白岩龍平の世話により日華学会へ入り、勤務。		374						○		51号		＊『上海新報』第51号の「中川武二」、「日清貿易研究所第一学期試験成績表」では「中川武二」。
9	有泉朝次郎	山梨								明治27年10月1日、陸軍通訳雇員、広島大本営附。 明治31年、台湾総督府台北県税務部租税課嘱託。 明治36年、台北庁総務課嘱託（～明治42年5月まで）。台北県地方土地調査委員会委員通訳兼掌者銓衡委員漢訳主任。 明治37年、台北庁総務課嘱託。 明治38年、総督官房翻訳官（～39年まで）。 明治39年4月1日（現在）、総督府官房文書課翻訳官兼掌者銓衡委員。台北庁総務課嘱託（～明治43年まで）。 明治41年、兼永大借地調査委員会通訳。 明治42年11月（10月25日現在）、総督官房参事官。 明治43年、総督官房翻訳官（大正3年まで）。台北庁庶務課嘱託。 明治44年、総督官房翻訳官兼通訳兼掌者銓衡委員、通信手特別任用試験委員、永代借地調査会通訳。 臨時台湾糖務局（分課未定）嘱託。 明治45年、総督官房翻訳官兼各種委員会・通信手特別任用試験委員（～大正3年まで）。 大正5年、鉄道部庶務課嘱託（～大正14年まで）。 大正12年、台北州台北市協議会員（～昭和3年まで判明）。				台-2-5、149、311 台-3-5、116、232	職M31-36 職M36-122、131 職M37-114 甲M38-599 文M39-3、116 文M40-11、163 文M41-14、188 文M42.5-15、192 文M42.11-6 文M43-13、194 文M44-16、101 文M45-25、85 文T2-28、63 文T3-28、67 文T5-83 文T6-85 文T7-87 職T8-100 職T9-98 職T10-100 職T11-98 職T12-100、241 職T13-102、246 所T14-92、232 所T15-241 所S2-252 所S3-272		15	○	○	50号		＊『旧植民地人事総覧』によれば明治31年の『台湾総督府職員録』は刊行されていないとのことだが、「台湾総督府職員録系統」では検索可。
10	河野熊吉	山梨								山梨県中巨摩郡榊村平岡							12	○	○	50号		
11	金嶋文四郎 （金島文四郎）	石川		士族	加賀藩士		明治元年 4月24日	明治40年 4月26日 40歳	金嶋は養家の姓。	明治23年、県費によって研究所入所。在学中、受賞5回。 明治26年、卒業。日清商品陳列所会計主任兼売買係。 明治28年2月、大本営の特許を得て遼東占領地に渡航、軍の糧食接済に尽力。商品陳列所維持のため通訳にはならず。講和後陳列所副支配人として上海にて前業務に従事。 明治30年、大阪商船会社漢口支店新設に努力、該支店勤務。 明治33年、本社詰。 明治39年、日露戦争直後、大連支店、兵隊引揚げの戦利品輸送、大連湾防備隊との交渉など過労で病に。帰郷後、金沢の病院に入院。	643		237					○	○			＊家系は不詳。養家の姓をつぐ。 ＊日清戦争時、金嶋と土井伊八ほか数人が通訳にはならなかった。
12	加藤菊次郎	石川																○				
13	小泉市太郎	石川	羽咋郡 志加浦村 （現羽咋郡志賀町）				慶応元年 11月24日	昭和2年 1月 63歳	小学校卒業後、上京。慶応義塾に学ぶが中途にて帰郷。大阪商船学校（→後東京商船学校に併合）に入る。	明治23年9月、石川県派遣生として研究所入所。 明治26年6月、卒業。 日清戦争時、通訳官。戦後、東京に僑居。 義和団が起きると天津へ赴き、陸軍用達として有馬組にて事務。 明治34年、飯塚松太郎（同窓）と鴻賓公司を起業。天津日本租界の埋立て工事を担当。 明治36年、営口に移り、飯塚と牛家屯の道路工事を請け負う。後、分離して加州組を起業、土木建築業を経営。 明治41年、奉天の帰途、大石橋にて足首を汽車に切断される。その後青島済南の間で骨董集め。	634					満洲編11-13		○	○			＊原籍地石川県、出生地は上雨後国酒田で僑居中出生。
14	小槌芳	石川	能美郡 小松町 字龍助町 （現小松市）				慶応3年 6月12日	昭和6年 7月29日 66歳	厳父・重作。 明治18年7月、石川県師範学校卒業。	明治23年9月、派遣生として研究所入所。 明治26年6月、卒業。 明治28年、大本営附、陸軍通訳官。後に近衛師団附。4月～5月、遼東各地に移駐し、5月～10月、台湾各所に従軍。 明治36年、日清協会（大阪）の事務員、会計処理、会員への支那語教授。 日露戦争時、陸軍通訳官。後辞職。また、第4師団第8連隊の酒保員。 明治38年7月、営口市街に平安組を組織、奉天や大連に支店設置、運輸倉庫業及び輸出入業。 明治42年6月、父重作の訃報により廃業して帰郷。帰郷後は不遇。	636		557					○	○			＊子・国男、神戸・万丸商店に勤務。
15	坪江徳太	石川															15	○				
16	土井伊八	石川	松任町 （現松任市）				慶応3年 5月14日		明治23年、荒尾の構想を聞き、家を舎弟に譲る。	明治23年、県費生として研究所入所。卒業後、日清商品陳列所。 日清戦争時、陸軍通訳官招集、荒尾の依頼により陳列所維持に奔走。 明治28年、上海へ、陳列所復興。販路拡張、原料品輸入など。 明治29年、福州造幣局の器械新造注文、無鑄電灯会社借款など尽力。 明治30年、農商務省、海外各地に陳列所設置につき、上海での事務嘱託。 明治43年、南京南洋勧業博覧会にて出品事務管理。 明治44年、陳列所（溫華広懋館）を溫華洋行に改称、輸出入貿易専業、本店を上海、支店を大阪、出張所を漢口、青島、済南、天津、東京、横浜など。 大正14年、副蚕業の輸入を開始、週二回商報を発行。		372				企業家編39-285 中西利八編纂『財界人物選集』第5版、財界人物選集刊行会、1939年、1075頁		○	○			＊長男・太郎は京大出身、日本銀行在勤。
17	那部武二	石川	江沼郡 大聖寺町 （現加賀市）			長男	明治元年 12月3日	明治38年 12月9日 38歳	小学校卒業後、石川県立専門学校（後の第四高等学校）。	明治23年9月、在学中のまま研究所入所。県費生。 明治26年6月、卒業。日清商品陳列所入所。 明治27年7月31日、上海から帰郷。10月、広島大本営に招集、同5日、第2軍附通訳官、10日、解職、大本営附。 明治28年1月15日、留守第5師団附、宇品・大阪間の清国捕虜送迎事務。7月17日、留守第5師団解散、上京の命、27日、大本営附、台湾行きの内命を受けるが辞して帰郷、9月、上海へ、日清商品陳列所入所（溫華洋行、～明治33年まで）、漢口・蘇州・杭州間の事業発展支援。 明治32年2月、過労によ病、帰郷。8月、回復し渡滬。 明治36年、根津一の推薦により三江師範学堂の日本語教師、在勤中病により上海篠崎病院入院。	637		334					○	○			＊妻・フデ、長男・啓一。
18	丹羽次吉	石川	河北郡 高松村 （旧高松町、現かほく市）			二男	慶応2年 4月28日	昭和3年 11月22日 63歳		明治23年、石川県派遣生として研究所入所。 明治26年、卒業。 日清戦争時、陸軍通訳官、第1軍従軍、満洲で馬糧買入の後方勤務。 明治29年11月1日（現在）、台湾総督府台北県宜蘭支庁通訳生。羅東付近の少数民族境界を出入り、事務。法院在職中、同僚と対立し辞官。 樟脳採取の特許を許可されるが、大倉組大倉粂馬も同時期特許出願したことにより、大倉組との共同事業を総統府から勧告され、これを拒否、後総督府の調停で同等の権利にて共同で製造開始するも、少数民族（生番）に従業員が襲われ、事業頓挫、許可取り消しとなり、財を失う。この後、台南にて市況視察、売薬行商となる。厦門にも拡大したが差財したため行商を停止。 石油掘削の事業を開始、三万円をつぎ込むが、失敗、散財すること2万数千円。 再度、売薬行商に戻る。台南で店を構え酒造権をを得るも、酒類専売制度実施により権利を総督府に返還。 その後精糖会社から焼酒の販売権を得て、夫人経営のもと質屋開業。晩年、中風症罹病。	643		87	台-1-49	甲M29-611			○	○			
19	山岸浅吉	石川	珠洲郡 木郎村 （旧内浦町、現能登町）				慶応元年 9月1日	明治37年 1月8日 40歳	明治20年、石川県農業学校卒業。 明治20年9月～明治23年6月、珠洲郡木郎村の不動寺尋常小学校に受業生として奉職。	明治23年9月、研究所入所。 明治26年6月、卒業。11月、帰郷中に広島大本営から招集、第5師団小孤山兵站司令部附陸軍省雇通訳官。 明治28年8月4日、解職。荒尾精の樟脳製造事業に参加。台湾の新竹庁に奉職。	636							○				『河野久太郎伝』卒業写真では「浅次郎」。

20	西島良爾 （志良以染之助）	静岡	田方郡 函南村 （現田方郡函南町）			三男	明治3年 11月1日	大正12年 12月26日 54歳	父・志良以新右衛門（志良以新左衛門）。 後、同郡北狩野村西島五郎の養子、家を継ぐ。	20歳、静岡県選抜生、研究所入所。 明治26年、研究所卒業前に退学。帰朝後、沼津にて教師。 明治27年9月、陸軍省雇員、通訳官として大本営附。10月第1軍司令部附、遼東各地を転戦。 明治28年5月、退官。10月、再び陸軍通訳、台湾総督府附、憲兵隊附。後、病で帰郷2年。 明治32年6月、裁判所書記、大阪控訴院、大阪地方裁判所にて通訳官勤務。大阪清語学校開校し教授。 日露戦争で陸軍通訳官（奏任待遇）、第1軍司令部附。安東県軍政署附に転じ、軍政官大原武慶少佐を補助。 明治37年9月、遼東軍政署附、遼東兵站監部附。 明治38年8月、御用済免官。10月、裁判所書記復任。神戸地方裁判所検事局通訳官（19年継続）。『日華新報』、『日華実業』などの編纂に携わる。神戸商業補習学校講師、中国語教授。 大正12年、肝臓硬変症。	600		97					○	○	50号	『近代日中関係史人名辞典』435頁 西島良爾著『支那語教程：四週間速成』近代文藝社、1933年 西島良爾著『実歴清国一斑』（初版.博文館、明治32年刊）、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』ゆまに書房、1997年	＊幼名、志良以染之助。号、函南。 ＊『河野久太郎伝』卒業写真では「白井染之助」。 ＊『支那事情』『支那語教範』（実文館発行）、『支那語教科書』『支那語教程』『支那語会話六十日間卒業』『日支商用会話』『支那助辞動詞詳解』『華濕商用会話』『忠経孝経千文字』『三字経新註』『支那官話字音鑑』（石塚松雲堂）発行、『支那官話辞典』（青木嵩山堂発行）、『清国一班』（博文館発行）、『日清日露従軍漫録』（自費出版）など
21	和田純	愛知	幡豆郡 西尾町 大字大給 （現西尾市）			三男	明治元年 1月12日	昭和4年 10月5日 62歳	幼名三吉。 16歳のとき純に改名。 村の小学校通学傍ら、笛井秋水に漢籍を学ぶ。小学校卒業後、知多郡半田町の小学校代用教員、19歳で辞し、京都・同志社入学、2年で退学。	明治25年、研究所入所。 明治26年、卒業。 日清戦争時、陸軍通訳官、第五師団従軍、鴨緑江、九連城、田荘台の戦闘参加、捕虜尋問、食糧買入など尽力、米国従軍記者と捕虜間の通訳担当。 明治28年、戦争終了後軍と共に帰国。9月11日、陸軍通訳官、台湾総督府赴任。 明治29年2月、総督府雇員。4月、民政局属官、乃木希典の秘書官（11月1日現在、台湾総督府総督官房附・属）。 明治30年8月、台中県牛罵語推務署長。 明治31年6月、北港推務署長。精神不安のため自殺企図、免官、台北に送還（送還中も入水自殺企図）。京都帰着後、根津一に預けられるが回復せず、精神病院入院。 明治33年、義和団事件時、陸軍通訳官。 明治34年5月、免官。 明治36年10月、乃木希典大将推挙で、陸軍幼年学校嘱託、支那語教授。 大正9年、陸軍士官学校予科教授部国語漢文授業嘱託。 大正10年、陸軍教授。 大正14年3月、行政整理のため免官。以後、逍遥自適、禅を学び、中国問題を研究。		425	198	台-1-11、87	甲M30-641				○	50号		
22	岡本忠平	三重								明治33年4月（1日現在）、台湾総督府覆審法院通訳か（？） 明治34年4月（1日現在）、台中地方法院法院通訳か（？） 明治35年5月1日（現在）、台中地方法院法院通訳兼台中地方院検察局通訳（～明治36年5月）。 山口県山口高等商業学校				台-1-190、269、353-354、446	甲M33-748、749 甲M34-791 職M35-27 職M36-32、33		9					
23	吉原洋三郎	三重				二男	明治5年 8月18日		父・吉原進。 郷里の学校出身。	明治23年、研究所入所。 明治26年、卒業。日清貿易陳列所入所。 日清戦争時、陸軍通訳官。戦後、日本銀行台湾出張所勤務、台湾銀行に転じる。 明治33年、福州支店支店長。福州居留民会長。後、広東支店支配人、日本居留民会長。在任中政府の財政整理公債発行などに関して建議。 大正3年6月、東京支店勤務。中国関係調査の事務に鞅掌。 （大正5年、長沙に中日銀行（台湾銀行系統）が開設したのは調査による。こののち病没。	1471		257					○	○	50号		
24	藤井善助 （善三郎）	滋賀	神崎郡 北五箇荘村 （旧五個荘町、現東近江市）	平民	商人	長男	明治6年 3月8日	昭和18年 1月14日	近江商人。織物業。父・周次。 幼名善三郎。出生後、母の実家に養育される。 明治12年、憲章小学校入学。 明治14年、京都へ、生祥小学校入学（9歳）。 明治18年5月、母死去（13歳）。 明治19年、卒業。菁々塾、東南塾（漢学塾）に通う。京都府京都商業学校（後の京都市立第1商業学校）入学、 明治22年、退学。上海へ遊学。	研究所入所（17歳）。 明治25年、帰朝、家業に従事。主に父の創業した、京都綿糸織物会社に従事。北海道からウラジヴォストーク、朝鮮へ巡歴。 明治26年、第四師団野戦砲兵第四連隊に入営。 明治27年、日清戦争時、軍人として充員招集に応じる。明治28年4月、大連へ上陸。営口に至り駐在。明治29年、現役満期予備役編入。結婚。 明治30年、京都にて家業に従事。明治34年、京都倉庫、大阪金巾製織会社監査役、実業界へ進出。明治35年、京都倉庫取締役。西陣織物委託販売、倉庫業経営開始、天満織物監査役。明治36年、家督相続、善三郎改め、4代目善助となる。財団法人憲章社創立、理事代表。 明治37年、織物倉庫会社創立、取締役。金巾製織取締役。五個荘村長となる。 明治38年、北川京都紡績所経営、金巾の朝鮮輸出拡大。 明治39年、金巾製織合併、大阪紡績監査役、天満織物、京都食料品会社取締役。父逝去、近江製綿撚糸会社社長、中之島製紙取締役。 明治40年、神崎郡立実業学校創設により1500圓寄付。東洋柞蚕、日本捺染、近江商業銀行取締役、京都電燈監査役。 明治41年、衆議院議員当選。日露韓貿易監査役。明治42年、憲政本党幹事（犬養派）。明治43年、立憲国民党常議員。 明治44年、万国博覧会へ、欧米漫遊。 大正元年、日本共立生命保険合資会社社長。 大正2年、湖南鉄道社長、天満織物社長。大正3年、近江倉庫社長、大津電車社長。 大正4年、衆議院議員当選（2回目）。大正5年、琵琶湖の内湖干拓事業計画、日本メリヤス、日本ビロード取締役。 大正6年、江商株式会社取締役、島津製作所取締役。衆議院議員当選（3回目）、立憲国民党代議士会長。大正7年、税法改正特別委員、第40帝国議会本会議にて演説。国勢調査会委員。大正8年、滋賀日報社長。藤井齊成会法人組織認可。大正9年、滋賀県自助会会長。第42回帝国議会重要法案特別委員、国民党代議士会長重任。普選案にて解散。月光亭内に藤井天文台着工。藤井保全合名会社設立。大正10年、日本絹織社長、国民党常議員。大正11年、政界引退。 大正12年、文化事業会社社長。近江新報、滋賀日報発行。大正13年、黎元洪訪日一行を招待。比叡山鉄道敷設認可、日本メリヤス社長。大正14年、京都インフォメーションビユウロウ監事、有隣館建設計画。 昭和元年、有隣館開館。淡海教育会設立。昭和2年、太湖汽船、湖南鉄道、大津電車を合併し、琵琶湖鉄道汽船会社成立。京都から堅田へ移住。近江銀行破綻整理の救済に奔走。近江協会常任理事。近江信託会社創立により相談役。京都電燈会社取締役。昭和4年、八日市鉄道株式会社社長、愛郷会を組織、顧問。公私救済緊縮滋賀県地方委員会委員。昭和5年、財団法人滋賀県社会事業協会監事。光明主義（浄土宗）を信仰し仏典を刊行。 昭和6年、財団法人瘧豫病協会発起人。北海道珠玖農場踏査。滋賀県自助会を滋賀好善会と合併、好善会副会長。郷里にて光明会の法話会開催。昭和7年、江州、京都にて光明会法話会開催。昭和8年、滋賀県農会長。昭和9年、琵琶湖ホテル会長。日本共立生命保険社長。満州国総理鄭孝胥来遊に従う。中国へ旅行。昭和10年、光明会支部長。選挙粛正委員。昭和11年、江商東紡提携、江商重役辞任。昭和12年、蘇東坡生誕900年により寿蘇会開催。 昭和13年、全国司法保護事業連盟評議員。（66歳）						憲政編30-241 企業家編32-512、33-410、35－261、36－307、37－124、38－391、39－360 ・「衆議院議員名鑑」、衆議院・参議院編集『議会制度七十年史』大蔵省印刷局、1962年、429頁 ・中村牟都雄『興隆日本の財界人』中、中央経済情報社、1941年、254頁 ・松本金次編『代表的人物と事業』人物と事業社、1935年、日本共立生命保険会社の項 ・中西利八『財界人物選集』財界人物選集刊行会、1929年、ふ8頁 ・浜達夫『現代実業家大観』御大礼記念出版刊行会、1928年、31頁 ・実業之世界社編纂局編『大日本実業家名鑑』上巻、実業之世界社、1919年、85頁 ・宮林亀治郎編『実業家人名辞典』東京実業通信社、1911年、フ14頁		○			瀬岡誠「江商の企業者史的研究――藤井善助の社会化の過程――」『彦根論叢』第258・259号.滋賀大学経済学部,1989年9月 熊川千代喜『藤井善助伝』内外出版,1932年 熊川千代喜『藤井善助伝』続編,内外出版,1939年	＊二男・彦四郎は、化学繊維（レーヨン）開発の先駆者。
25	伊東良造 （伊藤良造）	京都	京都市 柳馬場	平民	商人	長男			父・呉服商、三河屋伊東半次郎。 幼時、母を失う。継母に弟半二郎が出生。	明治24年、研究所入所。私費。 明治26年、卒業。 日清戦争時、陸軍通訳、遼東へ。 戦後、シベリアに入り、消息を絶つ。		598							○			『河野久太郎伝』の集合写真では「伊藤良蔵」。
26	秦長三郎	京都	京都市 衣棚 （現京都市中京区）			二男	明治4年 2月6日	大正6年 11月5日 47歳	父・平井甚七。出て秦氏を継ぐ。 明治22年、京都府商業学校卒業。日清の貿易活動を志願。	明治24年3月、学生再募集時に応募、研究所入所。 明治28年5月、紙商・中井三郎兵衛経営の上海支店支配人として渡航。中井洋行支店の事業を継承し、独立。太秦商会と改称。 上海では、民団議長代理、実業協会副会長、日本人倶楽部理事など。東亜製麻会社監査役。	634								○			＊戦時通訳官とならなかったのは土井伊八と秦の2人のみ、との記述があるが定かではない。

27	水谷三郎	京都	京都市上京区吉田町 （1889年以前は愛宕郡吉田村、現京都市左京区）	華族		三男	明治元年11月3日	大正15年7月10日 59歳	堂上家華族、吉田家旧臣（明治42年分家）。	明治23年、研究所入所。 卒業後、日清貿易陳列所。実務のかたわら、上海県立梅溪書院に入学、支那語を研修。 明治27年9月、陸軍通訳官、大本営附。10月、第1軍第5師団歩兵第9旅団第21連隊に従い遼東半島へ。 明治18年、南進軍司令部附、台湾へ。11月、台湾総督府附。 明治31年、臨時台湾土地調査局台北支局雇。 明治32年9月、台湾土地調査局技手細部測量員。 明治33年、臨時台湾土地調査局測量課技手（～37年まで）。 明治37年6月21日、日露戦争時、陸軍通訳官、大本営附、遼東特別任務、花田少佐の満洲義軍に付属、7月、着任。8月6日、マドリトフ支隊城廠逆襲で左翼第1隊長、26日、平頂山攻撃参加など。10月8日盛京省興京庁城廠南方畑地の戦闘で負傷、内地後送。 明治38年2月、再度出征、第2隊長として奉天会戦参加、松田大尉指揮下に通化占領。 明治41年11月、台北庁技手兼台湾総督府技手。 明治42年5月、民政部財務局税務課技手兼台北庁財務局税務課技手。11月、台北庁財務課技手（～45年まで）。 明治43年11月（1日現在）、民政部財務局税務課技手兼台北庁財務課技手。 明治44年5月（1日現在）、台北庁財務課技手。 明治44年11月、新竹庁財務課技手。（～大正8年まで）。 大正3年、新竹庁財務課技手（台湾総督府技師？）。 大正6年、新竹庁財務課技手兼殖産局林野整理課技手（～9年8月まで）。 大正9年8月、内務局地理課技手（～10年まで）。12月、新竹州知事官房税務課技手（～10年まで）。 大正15年、腎臓炎、東京牛込にて療養。	632		675	台-1-211、290、363、452、537 台-2-314、355、398、438、537 台-3-70、182、303、426、554 台-4-80、136、171、204、242、314、357、398	職M31-34 甲M33-769 甲M34-812 職M35-48 職M36-48 職M37-42 文M42.5-25、194 文M42.11-76 文M43-20、196 文M44-204 文M45-317			○	○	50号			＊『対支回顧録』に大正3年・台湾総督府技師との記述があるが、『旧植民地人事総覧』や「台湾総督府職員録系統」には見当たらない。 ＊下記資料を執筆か。 水谷三郎編纂『織物及莫大小に関する調査』（農商務省工務局編 工政会出版部大正14年刊の複製）明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会，1970年6月 豊図書庫#602.1:8-2:62-3
28	玉置留四郎	奈良	吉野郡十津川村	士族					父・十津川勤王志士。	研究所卒業後、早世。			297						○	○	50号		
29	飯塚松太郎（楢橋松太郎）	岡山	御野郡（御津郡）鹿田村 （現岡山市、北区）	士族	岡山藩士		明治元年2月22日	大正11年56歳	父・安本千代松は、藩老伊木家家臣、廃藩後に薪炭業となる。 幼少時、平松旦海について漢籍修める。 旦海の養女、飯塚作子（石州浜田藩士飯塚慶治の子）を配し、飯塚性となる。	明治23年、研究所入所。 明治26年、卒業。卒業前月、2～3人で武器（日本刀）輸入を画策し、退学しかける。卒業後、単身長江沿岸を視察。 日清戦争時、陸軍通訳。後台湾総督府に奉職。 明治29年、台北県基隆支庁通訳生。 明治33年、義和団事件時、台湾県庁を辞し、東京へ帰り、森清右衛門のもとで渡清斡旋の依頼あり、岡沢精侍従武官長の渡航に際会し、渡清。天津にて有馬組（天津支店主任、糧食輸送御用船其他一般汽船に対する貨物の取扱業）に勤務、森清右衛門と衝突し辞職。独立し、鴻寶公司を起業し、運輸・土木建築業を開始。天津居留地の築造に専心。 明治37年7月、本拠を営口へ移し、陸軍用達となり、飯塚工程局と改称、市街改築、遼河護岸工事、運輸事業を請け負う。 明治39年、大連支店設置。 明治41年、本拠を大連に移し、営口を支店とする。鉄道工事、満鉄本線改築、安奉線新築、長春寛城子間の連絡線新築など。 明治44年、老虎灘、于家屯に農場設置、農園経営。 大正3年、青島進出を目指すが病により大連へ、老虎灘の開拓指導（後身は郊外土地株式会社）。大連商業会議所常議員、満洲土木建築業組合副組合長、大連市議会議員（大正6年9月まで）。 大正12年（7年？）、会社を解散して満洲を去り、大阪漬寺にて養生。 郷里の岡山で没す。	628			台-1-48	甲M29-610	満洲編11-14、29、20-229 ・藤村徳一著『満洲紳士録』前編、1907年、1頁 ・「成功せる事業と人物」『満洲十年史』満洲十年史刊行会、1916年、4-5頁		○	○	51号	『「満洲」に渡った一万人』75頁 妹尾祭編著『備前岡山人名彙海』備前岡山人名彙海刊行会、1933年、58-59頁	＊奉天道路、長春駅、満鉄複線工事など。 ＊大連市会議員、商業会議所議員。 ＊北京順天時報、奉天盛京時報の創設、大連外国語学校創立に寄与。
30	河本礎平	岡山	大庭郡（真庭郡）河内村 （現真庭市）	平民	農民小作農	二男	慶応4年1月15日	明治32年1月30日 32歳	小作農出身。 明治12年、逓川小学校下等小学第3級を終了。 西薇山の開谷黌出身。	明治23年、西薇山の紹介により、研究所入所。 明治26年6月、卒業、優秀の成績。上海から長江を遡り、漢陽、武昌間を游歴。 明治27年10月、帰国。11月、陸軍通訳官、第2軍師団附、威海衛に従軍。 明治28年5月、台湾総督府附、台湾占領に従軍。 明治29年2月、近衛師団兵站監部附、糧秣輸送のため、海賊の巣窟であった基隆・淡水間を中国帆船で往復。5月、官を辞して帰国。8月、白岩龍平の大東新利洋行入社。上海・蘇州・杭州間の航運事業に従事（後、大東汽船会社上海支店長）。この間独力で上海に日清英学堂設置（香月梅外、牧放浪ら）、山根立庵と「亜東時報」を刊行し、変法派を支援。事業多角化により神経衰弱となる。 明治31年11月、白岩の勧めで江西、湖南の水路視察、荒井図南と共に上海から、九江、鄱陽湖、贛江を遡り南昌へ、湖南の湘江、資江、沅江、洞庭を視察、漢口に戻り視察報告書を執筆後、自刃。	640		222					○		50号	『近代日中関係史人名辞典』242頁 村上節子「河本礎平の生涯」『開谷学校研究』第9号、特別史跡開谷学校顕彰保存会、2005年5月 中村義『白岩龍平日記：アジア主義実業家の生涯』研文出版、1999年	＊号、黙堂。 ＊湖南水路視察時の視察報告書が基となって湖南汽船会社が創立した。 ＊黎庶昌（桐城派）、変法派・汪康年、宋恕、姚文藻、曾広銓らと交際関係あり。
31	景山長治郎	岡山	津山町（現津山市）／真庭郡勝山町（現真庭市）	平民	農民庄屋		明治4年1月19日	大正6年11月14日 47歳	代々庄屋、地方の旧家。 小学校卒業後、久世町正誼塾（後藤竹軒）にて漢学学習。 備前、赤坂中学校。 廃校後、岡山原泉学舎（西薇山）。	後日、研究所入所。卒業。 卒業後、上海で武器輸入を企て、荒尾精より一時破門。 日清戦争時、上海駐在武官黒井海軍大尉の密嘱、呉淞砲台内部を偵察。 明治27年8月、根津一、津川両大尉の命により、前田彪、松田満雄、成田錬之助と共に満洲へ、営口、牛荘などを偵察。上海帰任中、船上で追われるも無事。後、第2軍に従軍、台湾総督府幕僚附通訳官。 明治29年（11月1日現在）、台南県台東支庁通訳生。台東庁辨務署長（8月?）。 明治30年11月（1日現在）、台東庁奇莱辨務署長。 辞任後、台湾府袋嘴野崎塩行（岡山県富豪・野崎武吉郎、製塩事業経営）全権委任、塩水港の製塩事業に従事。 明治34年2月、東亜同文書院開設準備のため同文会の命で上海へ、校舎借入準備に尽力。 後病を患う。 大正3年、郷里に帰養。	623		240	台-1-54、98	甲M29-616 甲M30-652			○	○				＊書院成立時に根津の委託により開校準備に参加。

32	白岩龍平	岡山	吉野郡（英田郡）讃甘村宮本 （旧讃甘村、現大原町）		祠官	三男	明治3年7月9日	昭和17年12月27日	代々、荒牧大明神（現、讃甘神社）の神官。 父・折衛。長男・佐古武、二男・正雄、長女・まき、三男・龍平。 14歳、三日月藩藩儒岸南岳につき漢学学習。塾頭。 明治18年。能勢蒿（司法省法学校、後名古屋控訴院長）が三日月に帰省時の勧めで東京へ（16歳）。上京後、能勢の地方任官によりすれ違い、父方親戚の飯田年平（宮内省御歌所寄人）を頼るが病死し、流浪生活（4年）となる。長尾景弱の博聞社（新聞社、銀座）にて丁稚となり、法令全書配達。 新聞にて荒尾の構想を知り、大倉喜八郎邸別館（赤坂葵町）に荒尾を訪ね、新聞社を辞し、荒尾の秘書的事務となる。	明治23年、研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。在学中の学資は備前の富豪・野崎武吉郎が支給。 日清戦争時、上海にて、福原林平、楠内友次郎と共に中国内地視察の任。出発直前に広島大本営より招集、帰朝（福原・楠内は後捕縛・刑死）。戦時中、広島大本営附、柴五郎のもと書類閲覧翻訳、次いで戦地赴任。戦後、辞職し、上海へ。 明治28年9月頃、乙未同志会結成、参加。 明治29年5月、別懇であった姚文藻とともに、日中合弁の大東新利洋行創業、資本金10万円。上海–蘇州、上海–杭州、杭州–蘇州（下関條約で開港）の三角航路開拓（27歳）。 明治30年1月、上海–杭州間150里の航路開拓。 明治31年6月、乙未同志会をもとに同文会結成、参加。7月、上海同文会に組織拡大。9月、大東汽船合資会社に改称、合弁を解消し、株式会社化、本店を東京へ。11月、東亜同文会結成、参加。 明治34年4月、蘇州–杭州間270里の航路開拓、三角航路完成。湖南洞庭湖の航路開拓。 明治35年5月、政府支援のもと湖南汽船会社成立、資本金150万円。 明治37年3月、業務開始。8月、東亜同文会幹事。9月16日、西園寺公望の中国漫遊につき、横井時敬、高崎安彦ともに同伴、上海、杭州、南京、漢口、洞庭湖をへて長沙で巡撫と会見、10月23日上海帰着。 明治42年8月、日清起業調査会（渋沢栄一、近藤廉平、益田孝、大倉喜八郎ら）の幹事就任、鉄道、電灯、電話など事業調査をへて、東亜興業株式会社成立、資本金100万円。 明治43年、日清汽船会社成立、資本金1620万円、専務取締役就任（37歳）。5月、近藤廉平団長のもと、実業団15名の中国視察、南京博覧会観覧（三都商議会頭のほか、大橋新太郎、松方幸次郎、団長幕僚に西郷午次郎、川村景敏など）。 明治44年5月1日、東亜興業会社、江西南潯鉄道（南昌–九江間）に投資。500万円の借款契約締結、開通。 大正6年10月、寺内内閣による二十一ヶ条後の救済策・段祺瑞の後援として、資本金300万円に拡大。 大正7年、日本興業、三井、三菱、安田、久原、大倉、住友など財閥の支援により、資本金2000万円。日清汽船会社専務辞職、東亜興業常務取締役。 大正9年6月、日華実業協会参加。10月、東亜同文会幹事長代理（牧野伸顕会長）。 大正11年2月、東亜同文会財団法人化、理事長就任。 大正14年以降東亜興業業績悪化。 昭和2年1月、東亜興業常務取締役辞職、平取締役。この頃、日華実業協会理事。 昭和11年、軽微の脳溢血により東亜興業平取締役、東亜同文会理事長（11月）辞職。	338							○		50号	中村義『白岩龍平日記：アジア主義実業家の生涯』研文出版、1999年	＊夫人・艶子は関谷黌長・西薇山の娘。
33	福原林平	岡山	東北條郡加茂村（現津山市）／苫田郡加茂町字黒木			長男	明治元年	27歳	津山の儒者馬場不知皎斎に学ぶ。 備前関谷黌、西薇山門下。 卒業後、神戸で燐寸製造業に関与。荒尾が関谷黌にて遊説した際に、呼応。	明治23年4月、研究所試験に不合格ながらも談判により入学許可。 明治26年夏、卒業。郷里に帰省後、岡山・国清寺、海晏老師に参禅。11月、上海へ、日清商品陳列所入所。 明治27年、上海へ潜伏し偵察。楠内友次郎とともに、遼陽、奉天方面の敵情偵察、8月10日、出立。14日、捕縛。9月頃、処刑。	587		530					○	○		『巨人荒尾精』302頁 『近代日中関係史人名辞典』493–494頁 『烈士鐘崎三郎伝』烈士略伝、7頁	＊号、洞厳。 ＊関谷三烈士のひとり。
34	岡田晋太郎	広島	深津郡（深安郡）深津村 （現福山市）	士族	福山藩士		明治3年10月9日	大正12年12月16日 54歳	父・大参事岡田吉顕。 幼少時、東京本郷の旧藩主阿部邸に過ごす。 長じて、独逸協会中学。卒業。	明治24年、研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所、香港その他を視察。 日清戦争時、上海領事館引揚げのため残留邦人保護を同地駐米国領事に委任する際に、英語人材を要求されたため、任にあたり、残留民の恣代格として事務交渉を行う。特に開戦後、横浜、神戸在住の清国人が日本人に迫害を受けたとのデマが上海に伝わり、アメリカ租界虹口方面に散在した日本雑貨商店が報復をうけたため、これに尽力。 明治27年9月、残留邦人と共に上海引揚げ後、陸軍通訳官、広島大本営附、朝鮮満洲を転戦。台湾在勤中、海軍通訳官。荒尾精のペスト罹病に際し看護する。 明治28年、澎湖諸島の艦隊司令部在勤。後、樺山資紀の軍政により海軍幕僚部に在勤、以後台湾総督府に奉職。 明治29年11月（1日現在）、台湾総督府海軍部書記。 明治33年4月（1日現在）、台湾総督府海軍幕僚附通訳官（～明治36年5月現在）。 明治37年2月、第1艦隊に従軍、旅順口攻撃に参加。後、第2艦隊旗艦常盤に移乗し、旅順口封塞に鞅掌。 明治38年1月、旅順鎮守府附。戦後、戦没ロシア軍人の記念碑建立のために招待したロシア軍人への通訳官。海軍省にて『日露海戦史』編纂、高等官三等。 明治42年、退官。神戸川崎造船所入社、北京出張所長として再渡清。同年、海外視察中の清国海軍大臣溥倫貝子・陸軍大臣毓朗貝勒を造船業視察案内。 大正3年、東京出張所、支店長に栄転。 大正8年、友人三沢信一が山西炭田の開拓権利を得て帰朝し、財閥大会社に謀ったが決しなかったため、岡田から松方幸次郎に相談して50万金を確約、三沢は各社連合の事業を組織。 遺言として東亜同文会に財産寄付。	650		182	台–1–46、187、264、348、441	職M36–217				○	50号	篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981年、175頁	
35	日高勝太郎	広島	尾道（現尾道市）	士族	福山藩士	長男	明治7年4月7日		祖父・日高卓齋は海運業、尾の道に支店、日向産の陸海品取扱い、宮崎県細島港に永住。 父・得一郎、卓齋5男、広瀬淡窓門下。後江戸へ出て昌平黌入学。後、明誠館教授、藩士に準じ禄給。母幾代子は福山藩士。 6歳、父失い、母のもと細島へ。 小学校卒業後、延岡藩校亮天社入学。 明治21年、宮崎県立中学校第1期生入学。荒尾の講演を聞き研究所参加決意、退学。	研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。 日清戦争時、陸軍通訳官、朝鮮大同江から上陸、安東県にて、第1軍第3師団司令部附。前進中、病により広島病院へ後送。 明治28年春、帰郷。宮崎私立同志黌支那語研究所所長、第1回修業生卒業後、辞任。 後名誉職。漁業及び水産組合役員、信用組合理事、政友会支部幹事、都町会議員、名誉町長など。 老後、名誉職辞職、宮崎県商事調停委員、小作争議調停委員、臨時債務調停委員。	375								○			
36	石川宗雄	香川	那珂郡丸亀町地方村 （丸亀市字地方）				明治6年1月1日			明治26年、研究所卒業。 日清戦争時、病により応召できず。 明治29年、台湾守備第2旅団通訳。その後、台南県辨務署第1課長。次いで公学校長。 明治31年、台湾総督府台南県蕹豆辨務署主記。 明治32年、台湾総督府台南県蕹豆辨務署主記。台南県恆春国語伝習所教諭。 明治33年4月（1日現在）、台南県鳳山公学校教諭、旧城公学校教諭（～明治34年）。 明治35年5月（1日現在）、台南県鳳山庁旧城公学校教諭兼学校長（～明治36年5月1日現在）。 明治37年、日露戦争時、満洲軍総司令部通訳官、遼陽、奉天など軍政署に勤務。 明治38年4月、新民府軍政署附。 明治39年、軍政署廃止により、新民府知府衙門教育顧問（満洲新民府師範学堂か）。新民府日本人会幹事長。 明治40年4月、新民府居留民会長				台–1–161、164、241、321、413、502	職M31–74 甲M32–715、718 甲M33–799、799 甲M34–843 職M35–183 職M36–197	満洲編11–143、152 ・奥谷貞次・藤村徳一編『満州紳士録』後編、1908年、3頁	15	○		50号	『「満洲」に渡った一万人』102頁	＊字名、方村。

37	三谷末次郎	香川	三豊郡（豊田郡）粟井村（現観音寺市）	平民	医師	三男	明治5年11月	昭和10年3月4日 64歳	父・医師三谷憲裕。中学校卒業。	明治24年、補充生募集の際に研究所入所。 明治26年8月、卒業後、実地科（日清商品陳列所か）修業。 日清戦争時、陸軍通訳官、第1軍従軍。 明治29年、台北庁台北県（台中県？）事務嘱託（明治30年、高等官待遇、台北に転任？）。 明治31年、台北県内務部分課未定嘱託。 明治33年、義和団事件の北京占領後、北京天津間の治安維持に尽力（従軍せず）。 明治34年、東亜同文書院設立の第1期生募集のため各地に遊説。同年、日本軍政署、北京警務衙門（橋口勇馬少佐）通訳嘱託。 明治35年、警務衙門を辞し、警務学堂教習。 明治36年、教習を辞す（種々画策従事）。 明治37年、天津駐屯軍司令官仙波太郎の支援により営口へ、満蒙を志し、支那本部と関係を絶つ。遼河水運の調査報告書・意見書を作成し営口軍政署に建議。8月、営口占領後、陸軍水路輸送請負、戦時中船舶輸送に従事。 明治38年、営口にて関東洋行を開設。8月、本社を奉天に移し、以後、満蒙経営に専心。 大正3年、貿易業から鉱山業に転身、日支炭鉱会社（日支炭鉱汽船株式会社）を創立。 大正12年、廃業。その後、奉天取引信託株式会社、東省実業株式会社、奉天醤園株式会社、瀋陽建物株式会社など取締役、また日露戦後の奉天居留民会創設に奔走、後行政委員（明治40年に民会長、明治42年、奉天商業会議所会頭：5代目）。この年12月、家督相続。 昭和2年、奉天商工会議所副会頭（昭和5年まで）。 昭和6年、張学良の日本ボイコットに対し在満日本人会を組織して抵抗。満州事変後、奉天市政公署・地方維持委員会の財務課長。その間満鉄地方委員に当選。 昭和10年頃、肉腫瘍、丹毒を併発。	647		668		職M31-35	満州編11－27、20－301 ・「奉天草分の人々・事業と活躍の人々」『奉天二十年史』日清興信所、1927年、50頁 ・満洲日報社臨時紳士録編纂部編『満蒙日本人紳士録』満洲日報社、1929年5月、み3頁		○			『「満洲」に渡った一万人』1402頁	
38	澤本良臣	高知	高知市	士族		三男	明治元年3月	昭和12年6月25日 70歳	父・徳永秀信。高知城下にて出生。 13歳、澤本良樹の養嗣子、澤本姓。 明治15年、大阪中学入学、後に第三高等学校（後の第三高等学校）。第五高等学校入学（熊本か？）。	明治23年、研究所入所。 卒業後、日清商品陳列所入所。 日清戦争時、京都に引揚げ残務整理。9月、陸軍通訳官、第1師団司令部附、花園河口上陸、金州、旅順、太平山、田荘台の戦闘に従事。 戦後、東華紡績会社入社、見習生として大阪貿易会社にて実習。 明治30年、会社解散し退社。 明治31年、日本郵船会社入社。義和団事件時、会社在勤のまま陸軍通訳として従軍、広島から太沽、天津へ、江口昌條少佐の歩兵大隊と従軍、ジャンク船修理監督、天津-北京間の電信隊通訳、北京に入り騎兵大隊附。休戦後日本郵船へ復帰、上海支店勤務。 大正2年、家族の不幸により神経衰弱。 大正5年、辞職。後、東亜製麻会社（日中合弁、安部幸兵衛ほか）専務。 大正6年、済南・東亜蛋粉会社監査役、大連・日本酸素株式会社、天津・東亜燐寸会社、上海・船渠会社、京都・絹布織物会社、東方絹布会社、大阪・化学肥料株式会社など出資。製麻会社、蛋粉会社は英国注文の機械未着により破綻しはじめ、製麻会社、蛋粉会社は機械不完備により操業不能・資金欠乏、30万円の借入も上海で銀貨暴騰、大正9年の恐慌により、製麻会社大減資、蛋粉会社、燐寸会社は全損、酸素会社は減資の後解散、京都の絹布会社その他も全損。東京へ帰る。 大正12年、大震災により家産消失。	501							○	○	50号		
39	青木喬	福岡	久留米市櫛原町	士族	久留米藩士	二男	慶応元年11月10日		父・青木義方。 幼名は熊五郎か。 幼時、父より四書素読。 小学校卒業。 明治13年、県立久留米中学校。後、陸軍士官学校受験、痔疾により及第せず。 明治17年、清仏戦争および久留米中学教頭宮崎駿児就任後により中国に関心を抱く、後、小学校訓導。荒尾の久留米演説時に渡清決意。	明治23年、久留米市より半額の学資を得て、9月、研究所入所。開校後、生長。 卒業後、日清商品陳列所入所。小売部は卒業生20名余が担当、卸売部は大阪貿易商・岡崎栄次郎が日華洋行のもと担当。 明治27年4月、イギリスからの帰途立ち寄った稲垣満次郎の案内で蘇州杭州方面を旅行視察。大阪朝日新聞から北支政情視察のため遼一での通信依頼、稲垣と朝鮮へ、5月中旬、芝罘着。鍾崎三郎（瀧川海軍大尉とともに渤海海沿岸測量）、宗方小太郎（特別任務、威海衛旅順間往来）と遼東。6月、天津へ、楽善堂赤津仁作のもとに寄寓、中国服着用、支那宿春元楼に投宿。荒川巳次領事訪問、大河平書記生、井原真澄、石川五一らと往来、松昌洋行に宮崎駿児、三井洋行に鳧永寿、駐在武官神尾光臣少佐など訪問。7月開戦時、領事館留守（ボーイ頭、荒川領事引揚げ後、青木以外に、石川、赤津、鍾崎、山田良圓陸軍大尉らと残る）。8月5日、撤退勧告、8月8日、上海着、日清商品陳列所に寄り、御幡雅文から所務手伝いを懇請、留まる。20日頃、上海道台衙門により臨検、米国領事より出頭命令（角田隆郎、三谷末次郎、吉原洋三郎、猪田正吉、渡部正雄、高橋正二ら連行）。弁髪を刈り、東和洋行に撤退（研究所残留者、御幡、土井伊八、金島文四郎、澤本良臣、吉原洋三郎、岩本嘉次郎ら）、残務整理（共同住宅始末）、不用物品の換金後英国人ダラスに管理委託、8月31日撤退、9月2日長崎着。 9月中旬、大本営招電、陸軍通訳官、10月16日、第2軍附、花園河口上陸後、神尾光臣から敵地視察員（山崎、鍾崎、藤崎、大熊鵬、向野、猪田）着用の中国服調達。後、著川兵站司令官につき各地転戦、兵站事務、宣撫工作。 明治28年1月、熊岳城兵站司令部勤務。3月、金州、第2軍兵站監部附、山海関上陸作戦待機中休戦、5月18日、宇品へ。帰朝後、京都の荒尾を訪問、商品陳列所再興計画。10月、陸軍通訳官、台湾総督府転任、民政局財務部租税課員、樟脳・アヘンに関する調査に従事。 明治29年3月、帰京。10月、台湾総督府製薬所通訳事務嘱託（奏任待遇）、アヘン事項取り調べ。民政局事務嘱託。 明治31年、民政部衛生課嘱託兼製薬所嘱託。4月、アヘン密輸状況視察、全島各県庁下に出張。宜蘭でマラリア罹病。 明治32年1月、アヘン視察、香港、澳門、広東、汕頭、厦門、福州へ。3月、台北帰任。4月上旬、慰労休暇二ヶ月、帰郷。6月中旬、帰台。 明治34年6月、台湾総督府専売局翻訳官（高等官七等）。 明治35年、警察本署衛生課嘱託。5月（1日時点）、専売局監査課翻訳官兼掌者銓衡委員。 明治36年4月、専売局監査課翻訳官兼掌者銓衡委員（5月1日現在、高等官六等）。5月、台湾総督府辞任。 明治37年、陸軍通訳官。4月、満洲軍政委員附属、朝鮮梨花浦上陸、安東県軍政委員松浦寛威少佐のもと軍政事務従事、車馬徴発、中国人訴訟関係交渉の事務主任。6月、軍政委員更迭、大原武慶大尉着任後、安東県新市街設計（満鉄附属地）。7月、安東県軍政署交渉課長・木村処理主任、政務調査委員、民事訴訟処理委員兼任。8月、奉天将軍増祺の派遣した営務署委員馬龍潭監視のため、鳳凰城に派遣、大道溝、梨花浦、兼二浦、義州など出張。 明治38年7月、遼陽兵站司令部附、過労のため病、東京渋谷病院に後送療養。 明治39年1月、陸軍通訳官免官、赤十字特別社員。同年、宏文学院（東京高等師範学校長嘉納治五郎）支那学生監督（奉天将軍趙爾巽派遣の速成師範科の満洲留学生60名）。 明治41年1月、東亜同文書院教授（～昭和3年3月まで）。 昭和8年6月、満州国政府招聘、総務庁嘱託兼法制局嘱託。 昭和12年5月、満州国より叙勲。	463			台-1-357、457	職M31-4 職M35-5、35 職M36-5、63			○	○	50号	『博多青年須読』13頁 『近代日中関係史人名辞典』2頁 『東亜同文書院大学史』103、119頁 久留米市編『久留米市誌』上巻、1933年、701頁 青木喬編『現代支那尺牘教科書』出版地年不明 青木喬編『支那時文類編』東亜同文書院、1918年	＊研究所時代、陳列所撤退時、台湾・満洲時代の挿入回顧あり。 ＊日清商品陳列所は漢口路と四川路の角にあったとの記述あり。 ＊そのほか、校舎、退学生、校舎移転などについて記述あり。
40	市川徹弥（市川次郎吉）	福岡	御笠郡（筑紫郡）御笠村大字大石（現筑紫野市）			文久3年9月13日	昭和22年3月24日 65歳	明治16年7月、福岡中学卒業。同年、福岡県御笠中学校助教諭。明治18年7月、御笠高等小学校訓導。荒尾の構想を聞き渡清決意。	明治23年9月、研究所入所。 明治26年6月、卒業。支那中部の実業視察。 明治27年10月、陸軍通訳官、大本営附、11月、第2師団野戦砲兵第22連隊附。 明治28年5月、大本営附。次いで台湾へ出征、7月台湾総督府新竹庁附、新竹庁旧慣制度調査課長、11月、陸軍通訳高等官待遇、台湾総督府新竹支庁附。新竹支庁旧慣制度調査課長、同財務課長兼調査課長、民政局行政組織調査委員など兼務、収入主任官、民政局行政組織調査委員長、台湾総督府民政局附など歴任。 明治29年、戦争終結により陸軍通訳免職。 明治30年1月、小倉にて商店開設、神戸、大阪で中国貿易経営、棉花綿糸売買に従事。 明治37年、陸軍通訳官、高等官待遇、大本営附。3月、第1軍司令部附へ転任、満洲軍政署勤務、満洲軍政委員、遼東兵站監部。6月、遼東兵站部に転勤。 その後、神戸・大阪で棉花綿糸の貿易に従事。	639		24		○			○		50号	『博多青年須読』13頁	長女・潤子は奉天兵器製造所長松本古一郎に嫁ぎ、長男・洋造は陸軍軍人。
41	伊藤久米蔵	福岡	夜須郡秋月町（旧甘木市、現朝倉市）																			『博多青年須読』14頁	
42	猪田正吉	福岡	久留米市櫛原町			長男	明治2年2月16日	26歳	5歳、父・重秀を失う。 小学校を経て久留米明善校。卒業後小学校訓導。大熊鵬とは明善校時代の同窓。 辞職後大阪へ。荒尾の講演を聞き、上京し受験、校費生となる。	明治23年9月、研究所入所。 明治26年、優秀で卒業。上海日華洋行（日清貿易株式会社）に就職。 明治27年、清軍軍艦の出入りに注目、敵情偵察。8月、帰朝、広島大本営に招集され陸軍通訳。10月、第2軍に従い盛花園河口に上陸。山崎羔三郎、鍾崎三郎、藤崎秀、大熊鵬、向野堅一とともに大孤山方面へ、消息を絶つ。	619		21					○	○	50号	『烈士鍾崎三郎伝』烈士略伝、6頁 『巨人荒尾精』297頁 篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981	＊九烈士

43	内田英治	福岡	早良郡 田島村 （樋井川村） （現福岡市）				明治3年 10月17日	明治38年 3月9日 36歳		明治23年9月、研究所入所。 明治26年6月、卒業後、日清商品陳列所入所。帳簿整理に従事。 日清戦争時、第1軍・通訳官。 明治29年、台湾へ、台湾総督府法院通訳官。 明治31年、民政部税務課嘱託。 明治35年3月（1日現在）、臨時台湾土地調査局監督課嘱託。5月（1日現在）、財務局税務課嘱託兼高等土地調査委員会通訳。 明治36年4月（1日現在）、財務局税務課嘱託兼土地調査委員会通訳。臨時台湾土地調査局調査課嘱託（土地調査局書記）。 明治37年4月（1日現在）、財務局税務課嘱託兼臨時台湾土地調査局調査課嘱託。 日露戦争時、通訳官として従軍。 明治38年3月9日、奉天会戦時に戦死。	637		401	台-1-349	職M31-5 職M35-10、21 文M35-43 文M36-10、26、44 文M37-10、40			○	○	50号	『博多青年須読』14頁	
44	大石直二郎 （直次郎）	福岡	鞍手郡 新入村 （現直方市）							日本電力？								○		50号	『博多青年須読』14頁 篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981年、156頁	＊向野堅一と同郷同村。
45	大熊鵬	福岡	竹野郡 （浮羽郡） 船越村 （旧吉井町／田主丸町、現久留米市か）			三男	明治4年 7月27日	24歳	久留米明善校。猪田正吉と同窓。 明治23年3月、卒業。	明治23年9月、研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。 明治27年7月、上海に潜伏、敵情偵察。10月、帰朝し、広島大本営招集、第2軍従軍、陸軍通訳。盛花園河口から大孤山方面へ、後消息絶つ。	620		146					○	○	50号	『博多青年須読』13頁 『巨人荒尾精』294頁 『烈士鐘崎三郎伝』烈士略伝、5頁 篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981年、78頁 『玄洋社社史』玄洋社社史編纂会，葦書房，499-505頁	＊九烈士 ＊「日清貿易研究所第一学期試験成績表」では「栄治」。
46	太田勘太郎	福岡	福岡市 博多蔵本町							満鉄株主？ 博多商工会議所会頭？								○			『博多青年須読』13頁	營業報告書 日滿實業協會總會報告書
47	岡田兼次郎	福岡	久留米	士族	久留米藩士	三男	慶応3年 8月18日	明治34年 2月17日 35歳	父・有馬家家臣、岡田弾右衛門正秀（正雄）、維新後刑法局総裁、会計局総裁、権大参事など歴任。藤原氏末裔。 次兄鉄五郎、父正秀を継ぎ京都へ。 同志社に学ぶ。天龍寺の滴水和尚に参禅。	明治23年、研究所入所。 卒業後、日清商品陳列所。 明治27年、陸軍通訳官。台湾出征軍に転じる。領台後も官途につく。 明治30年11月（1日現在）、台中県集々辨務署長。 明治31年、中島真雄とともに八重山島にて祖山調査。帰台後、集々辨務署長。集々辨務署廃止後、福州東文学堂（中島真雄、陳宝琛、孫葆瑨ら）創設により、総教習として赴任。旧慣調査に尽力。 明治33年、福州から上海へ、大東汽船会社支配人、結婚（久留米藩士吉田足穂二女芳野）、東亜同文書院の講師嘱託。 明治34年、猩紅熱に感染。	630		180	台-1-88	甲M30-642			○	○	50号		＊『台湾歴史考』拓務省文書課 ＊一女・千代野。岡田源次を迎えて継嗣。遺族は三浦半島へ移住。 ＊ベルギー駐在公使劉崇傑、満洲高等法院長林榮、福建省長陳儀など東文学堂の門下生。
48	香月梅外	福岡	夜須郡 （朝倉郡） 三輪村 （現筑前町）／ 那珂郡 住吉村	平民	医師	二男	明治8年 1月31日	昭和22年 2月17日	祖父・香月春庵、代々医業。 父・恕経は、秋月藩校訓導、秋月の乱に関与、自由民権家として第1回衆議院議員・名士、玄洋社員。	明治23年、研究所入所（16歳）。当時生徒中、最年少者。 明治26年6月、卒業。日清商品陳列所入所。 明治27年5月、徴兵検査のため帰省、家族の服喪。9月、広島に参集し待命、第1師団乃木旅団司令部に配属。 10月、花園河口上陸。大川愛次郎も同道。旅順攻撃参加、陷落後金州、普蘭店、蓋平を経て、太平山攻撃参加、凍傷となり蓋平の野戦病院へ後送。退院後、蓋平軍政署勤務、第1師団司令部に転じ、旅順待機中停戦。 明治28年5月、近衛師団司令部属、台湾三貂角に上陸、台北（赤痢感染）、新竹、彰化（マラリア流行）、嘉義など各地転戦。10月、台南滞陣中に総督府附転任。11月、辞任し帰省。 明治29年9月、向野堅一、河北純三郎とともに北京東交民巷に筑紫辨館創業。北京へ創業準備（向野・河北は京阪へ商品仕込）。 明治31年、筑紫辨館をやめ、白岩の大東新利洋行入社。 明治39年4月、辞職、帰省。竹皮をもとにした下駄製造（大正南部表）製造で事業。 明治42年1月、宮坂九郎夫妻、福田眉仙と重慶旅行。巻、宜昌に留まり、新利洋行、武林洋行の代理、棕梱毛、桐材の輸出兼営。 明治44年10月、辛亥革命により宜昌引揚げ命令、漢口へ出て帝国領事館に引渡し統率後、上海へ避難、橋三郎の宅に留まり、宗方小太郎と辛亥革命観察。この年、江南製業会社（古荘弘発案、橋三郎、白岩龍平、河野久太郎出資経営）営業主任、上海在住、後、大倉組に譲渡。 大正2年、長沙に商店・泰来号開設、同地方物産輸出業経営。 大正10年、革命後の避難準備計13回で妻が神経衰弱、郷里の母のため帰朝。この後、輸入事業など関係（～昭和6年）。 昭和7年、東京に在住、鎮泊学園、満蒙義塾、豪徳書院などで支那語を教授。 昭和13年2月、福岡へ帰り、支那語教授。（67歳）			407					○	○	50号	『近代日中関係史人名辞典』173頁 『博多青年須読』13頁 石瀧豊美『玄洋社発掘―もうひとつの自由民権―』西日本新聞社、1981年、245、341頁	
49	河北純三郎	福岡	生葉郡 （浮羽郡） 山春村 大字山北 （旧御幸町、現うきは市）			二男	明治5年 9月4日		父・俊蔵。 福岡中学。 後、上京し神田共立学校。 荒尾の講演を聞き渡清決意。	明治23年9月、研究所入所。 卒業後、日清商品陳列所入所。 明治27年4月3日、単身内地旅行、鎮江から北京へ。帰途、河南から漢口へ出る途中で開戦、天津から上海へ。 上海帰着後在留邦人とともに帰国後、広島大本営から陸軍通訳官として従軍、第2軍属。旅順陥落後、兵站監査部、亮甲店兵站部ほか勤務。 戦後、向野堅一、香月梅外らと北京進出計画、北京公使林董を頼るが、北京駐在武官神尾光臣少佐の仲介で許可、東交民巷に築地辨館開業。倉富熊次郎の雑貨店にて陳金壽（蔡州出身、13歳）とともに福岡支店を経営（郡島忠次郎、向野堅一、倉富熊次郎、末永節、島田経一など）。その後経営難。 明治33年、義和団事件時、店舗襲撃され、店員中村秀次郎死去。向野とともに東京・有馬組店員となって渡華。 明治35年、原口聞一から広東省に鉄鉱山発見との知らせにより奥地一帯を視察（鉄鉱は物にならず）。 日露戦争時、第2軍兵站監参謀長有田大佐から、湯家屯・営口の兵站司令部設置について尽力。大熊鵬の遺品（印形）発見。 任務終了後、各地を転々、貔子窩にて陳金壽と再会。陣は馬賊の馬福錬に属し、守田利遠少佐の忠義軍に参加（後の陳中孚の前身）。 辛亥革命時、台湾からの武器購入を依嘱され、奉天・井深彦三郎の世話で、満洲総督趙爾巽に売渡、朝鮮の金鉱区買収、山西の無煙炭輸入など。 後、すべてを精算、郷里久留米に戻る。（70歳）			535					○	○	50号	『博多青年須読』13頁	
50	鐘崎三郎	福岡	三潴郡 青木村 （現久留米市）		祠官		明治2年 1月2日	26歳	父・鐘崎良順は青木天満宮（青木村）祠官、鞍手郡八尋村（（現鞍手郡鞍手町））の小野氏をめとる。八尋村にて生まれる。後、長崎へ移住。 10歳、父を亡くし、太宰府の伯父（青木村）の下へ。 11歳、福岡市橋口町、日蓮宗勝立寺徒弟（住職加藤日能）、正学を称す。 15歳、母を亡くし孤児。後、福岡私立養蜆学校（津田信秀経営）。 明治19年、上京し成城学校へ、陸軍幼年学校入学、兄の喪により退学（18歳）。後、長崎で御幡雅文に中国語を習い、雑貨商資産家の養子となる。 明治23年、荒尾の研究所構想を聞き上京、荒尾に面会し入学を請うが養家のため反対される。養家と離縁して鎮西日報社員。	明治24年、荒尾長崎寄港により面会、承諾、3月上海、研究所へ。半年後、安徽省無湖の日本商順安号（田中洋行）に李鐘三として一年あまり実地取引実習。後、上海に戻り御幡雅文の書生。 明治26年6月、商品見本などを携え帰朝、大阪商業会議所、堺商業会議所にて対支貿易講演、内地商人を啓発。 明治27年3月、再渡清。鐘左武を名乗り、直隷、山東間を往来。海軍駐在武官澁川具和に従い、6月3日大沽から蒲河口の海岸偵察。24日陸路天津へ。7月19日、山海関偵察の命。8月4日、石川伍一らと天津にて敵情偵察（石川捕縛）。直隷一帯、芝罘調査後、東京へ帰還。10月3日広島へ。10月16日第2軍従軍、24日、山崎燕三郎、大熊鵬、猪田正吉、向野堅一らと花園河口へ。貔子窩街道から26日碧流河渡河時に捕縛。山崎、藤崎とともに10月31日金州で処刑。	576		237								『博多青年須読』14頁 『巨人荒尾精』276頁 納戸庇之助著『烈士鐘崎三郎』烈士鐘崎三郎伝刊行会、1937年 納戸庇之助『烈士の面影』烈士の面影頒布会、1923年 篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981年、78頁	＊九烈士

51	倉富熊次郎	福岡	竹野郡（浮羽郡）水縄村大字森部（旧田主丸町、現久留米市）				明治4年3月10日	明治41年1月9日 38歳	福岡県立中学修猷館。	明治23年、研究所入所。 卒業後、日清貿易陳列所入所。 日清戦争時、陸軍通訳官、第2軍司令部属の第1野戦電信隊附。 明治28年10月、台北県通訳。 明治29年4月、台湾総督府撫墾署、後、大嵙崁撫墾署勤務、9月辞職。帰国後、筑紫辨館（中国雑貨販売、栗村顕三郎、郡島忠次郎、向野堅一、末永節、島田経一など）。 明治32年5月、再度渡台、総督府法院通訳、対中地方院検察局台中法院通訳、後、辞職。 明治37年、陸軍通訳官、第5師団司令部に従軍。	638							○	○	50号	『博多青年須読』13頁	
52	桑野立生（許斐立生）	福岡	嘉麻郡（嘉穂郡）頴田村（旧頴田町、現飯塚市）				明治2年9月24日	昭和8年11月19日 65歳	実父・許斐市五郎。	明治23年、研究所入所。卒業後、桑野重三郎の養嗣。 日清戦争時、陸軍通訳官、第4師団従軍。戦後、養父重三郎の炭鉱経営が傾き、整理に苦しむ。 日露戦争時、大本営附通訳官、第1軍司令部附、満洲軍政委員附、関東州民政署旅順支署勤務。 明治40年、帰国後、郡会議員（大正13年まで）、地方公共事業尽瘁、青年の精神修養、剣道指南、三等郵便局長。	645							○	○	50号	『博多青年須読』14頁	＊実父は許斐市五郎。
53	郡島忠次郎	福岡	糟谷郡篠栗村（現篠栗町）	平民	商人	二男	明治3年10月19日		代々造酒業、宗像・糟屋両郡きっての旧家、両郡内の酒税取立て、上納を管理。父・甚次郎。 小学校卒業後、糟屋中学校。 明治19年、福岡へ、養鋭学校（士官予備学校）、鍾崎三郎、石橋禹三郎（タイ開拓）、豊村文平、高橋謙など知り合う。 明治20年、正木昌陽の塾（金子堅太郎、栗野慎一郎、明石元二郎、山座圓次郎ら排出）にて漢籍学習、斉長兼副斉長。次いで、簿記学校、官用簿記、商業簿記など習得、中山種三郎（杵島郡）と知り合い、中国問題の重要性を知る。 明治21年11月、長崎へ、同郷・古屋重三郎に身をよせ、漢学・簿記など教師。 明治22年、山口商会主（山口作太郎）家庭教師。荒尾の講演を聞き、鍾崎三郎と渡清決意。	519							○	○	50号	『博多青年須読』13頁 郡島忠次郎著『日清戦役前後ノ事情並ニ殉國志士事蹟概略』出版地不明 、1932年（「昭和7年11月25日郡島忠次郎談ス」との表記あり）、愛知大学図書館（霞山文庫）収蔵 郡島忠次郎編『山内岱遺稿』郡島忠次郎, 1927年	＊雅号・落雪 ＊高田商家との武器売買、日露戦争時の輸送について回顧あり。
54	河野久太郎	福岡	山門郡垂水村（三橋村垂見）（旧三橋町、現柳川市）	士族	柳川藩士	二男	明治4年2月27日	昭和11年9月24日 66歳	父・河野幾次。 長男宇太郎、二男勇、三男久太郎、四男作造。長男、四男は早世。 幼少期、村の矢張庵寺（蒲池学善禅師）にて教えを受ける。 陸軍教導団を志願する。 明治21年頃、福岡中学修猷館入学。 明治23年、退学。	明治23年、修猷館から研究所へ転校。柳河の学務課長渡辺村男後援。病により修学課程が遅れる。 卒業後、日清商品陳列所入所、白岩龍平と福州路三山公所に同居。 明治27年、第6師団混成旅団に従軍、旅順威海衛戦に参加。戦後、近衛師団に従軍、台湾へ。民政移行後、嘉義庁判任官筆頭。 明治29年11月（時点）、台南県嘉義支庁通訳生。 明治30年、嘉義県知事官房通訳。帰郷、結婚。台湾帰任中、嘉義庁廃止し解職。 明治31年、臨時台湾土地調査局第1課属（臨時雇員、～32年までか：明治32年2月1日現在）。後、帰国し、晴氣大尉の清国陸軍教官招聘（安徽省）につき通訳として随行、晴氣と安徽巡撫王之春が衝突。 明治33年8月、帰国。神戸・兼松商店入社。明治34年、上海支店員。支店閉店。岡田兼次郎の仲介で上海順泰洋行（吉田順造経営、石炭販売）入社。2年で事業失敗、破産し失業。吉利洋行を経営（雑貨販売、蘇州）。 明治36年、大東汽船会社（白岩）入社。 明治40年4月、日清汽船会社成立、小蒸気部担当。大倉組上海支店多賀武次郎が急死、白岩の推挙で大倉組入社。大倉組上海支店長山田馬次郎が本店へ転任、後任として支店長。中国へ塩鰹輸出するため、北海道、樺太を旅行後、各問屋について中国人にあう製品を指導、販路拡張。根室の昆布輸出再興。辛亥革命時、日露戦争後の戦利品武器弾薬（ロシア製）など、大倉組を中心に、大倉組上海支店の軍器販売。上海杭州間の鉄道を担保に、黄興へ借款300万円を出資。順済公司（安福派曾祥麟、楊延棟、葉養吾、日中合弁）設立、江西豊城、餘干、楽平地方の14砿区（1500万坪）の炭鉱試掘権獲得。五金公司（黄篤鑑と共同）設立、常軍県の銅鉱試掘。両社とも100余万の欠損を招き失敗。その後、周樹模を説得、段祺瑞の許可を得て、順済公司から満洲での新邱炭鉱の利権獲得。後、満鉄に譲渡、満洲炭鉱会社が経営。 大正4年、東京本店傍逗、鉱山部重役兼支那部総支配人。大同鉱業株式会社（長沙、第一次大戦で休止）に参画。 大正6年、日本興業、台湾銀行、朝鮮銀行、交通銀行間に金貨500万円の借款契約を仲介、1月8日、交通銀行顧問。豊村公司（大倉・周自斉合弁、松花江流域木材）設立。天津・裕元紡績公司設立（大倉・王祝三合弁、資本銀200万元から後720万元に増資）、監査役。裕津製革公司（大倉、徐樹錚・施肇会合弁）理事。 大正7年、大倉鉱業取締役。2月、興源公司（三井、三菱、古河、久原、鈴木、高田の7社、後に明治鉱業、住友、藤田、貝島を加え、大源鉱業株式会社、昭和7年解散）成立、対中交渉に関与、水口山鉛鉱借款が成立し販売権を一手に収める。 大正9年、富楽公司のもと江西省楽平・満俺鉱採掘に従事、経営が軌道に乗るも政治情勢により失敗。 大正10年、興林造紙公司（大倉・鮑貴卿合弁）。 大正12年6月、共栄起業会社（王子製紙：富寧公司・造紙、華林公司・製材、黄川公司、大倉組：豊材公司、興林公司の合同統一、長春・吉林）、後に取締役。モンゴル・ナイマン王から依頼、華興公司（水田開拓事業）設立。震災時、亡命中の徐樹錚が邸宅にいて助かる。浦口土地共有組合（大倉、三井、三菱、一銀、東亜興業、日清汽船、中日実業など匿名組合、上海津浦線浦口停車場隣接の土地投資事業）発案、経営関与。本渓湖煤鉄公司（1905年着手、1910年成立、1921年停止）の再興に関与。大正14年11月、奉天電車株式会社創立、関与。昭和10年、大倉本店の参事。 昭和11年9月、大蒙公司成立（関東軍の対ソ物資供給機関）、取締役会長。11月、奉天電車株式会社、奉天交通会社に譲渡合併。 このほか、大倉組にて河野が関与した会社として、華寧公司（南京・鳳凰山鉄鉱採掘、大正6年頃か）、上海益昌碼頭、南定炭鉱株式会社取締役兼務、日華実業協会理事。	487	780	台-1-53、91、137	甲M29-615 甲M30-645 職M31-33 甲M32-691	企業家編33-370、433 ・実業之世界社編纂局編『大日本実業家名鑑』上巻、実業之世界社、1919年、11頁		○	○		『博多青年須読』13頁 九州時論社編輯部編『河野久太郎傳』河野久太郎傳記編纂所、1941年	＊東京白金の邸宅は中国亡命者からの避難場。 ＊大倉喜八郎の信認を常に受けていた。大倉組の対中交渉はおおむね河野が関与した。 ＊伝記あり

55	向野堅一	福岡	鞍手郡 新入村 大字上新入 （現直方市上新入）	平民	農民	四男	明治元年 9月4日	昭和6年 9月17日 64歳	父・向野彌作。兄・斉。 秦巌、勉焉学舎。 明治20年3月、修猷館卒業。	明治23年、研究所入所。 明治26年、全科卒業後、商品陳列所参加。長口沿岸視察中、日清戦争のため帰郷。 広島大本営の召により、陸軍通訳官、第1師団司令部附。 明治27年10月16日、宇品発。艀子島から書簡店、復州への偵察任務。 明治28年1月29日、藤崎、山崎、鐘崎の行方調査。3月9日、発見。 明治29年1月、混成第7旅団司令部附、台湾宜蘭へ。5月31日、陸軍通訳官。10月、北京東交民巷に公使館用達店として、河北純三郎らと筑紫鉾館開設、和洋雑貨販売。 明治32年、天津に日本商品の陳列所を設置するため帰朝。在野を遊説し、賛助を得る。 明治33年、義和団で店が焼かれ、留守中の主任中村秀次郎も義勇兵に加わり戦死。廃業後、第5師団監督部用達として、天津にて有馬組北部の主任となり、通州北京間の輸送を請けおう。 明治35年、広東省へ、両広の内地旅行として商工業視察。 明治38年5月、陸軍より遼西物資調査のため新民府へ出張し、物資輸送および調査、有益公司（輸送及び仲買業）設置。また奉天陥落後、紳商趙国綬と合資で石炭販売、土木建築業、仲買業経営。その後居留民会評議員、行政委員、後これを辞職。 明治39年、奉天へ。茂林洋行開設（ドライクリーニング業）。 その後、奉天商業会議所副会頭、正隆銀行取締役、瀋陽建物会社専務取締役（大正元年）、満洲市場株式会社取締、奉天銀行、奉天製氷各株式会社監査など。	602		557			満洲編11-25、78、398、12-144、19-232、20-308、340 ・藤村徳一著『満洲紳士録』前編、1907年、195-196頁 ・『支那在留邦人興信録』1926年、28頁 ・満洲日報社臨時紳士編纂部編『満蒙日本人紳士録』満洲日報社、1929年5月、む2頁 ・「奉天草分の人々・事業と活躍の人々」『奉天二十年史』日清興信所、1927年、81頁		○	○	50号	向野康江「日清貿易研究所における学生生活―向野堅一の兄たちの書翰を手掛かりに―」『アジア教育史研究』第23号，2014年3月 向野堅一顕彰会研究部編『向野堅一顕彰会会報』向野堅一顕彰会事務局 『博多青年須読』14頁 『烈士鐘崎三郎伝』烈士略伝、9-10頁 『「満洲」に渡った一万人』558頁 向野堅一著『向野堅一従軍日記』出版地不明（愛知大学図書館収蔵） 『向野堅一関連画像』出版地・出版者不明，2005年8月（愛知大学図書館収蔵）	＊日清戦争の従軍日記あり。 ＊明治28年頃分家。堅一没後、長男晋が茂林洋行を継ぐ。二男有二は長崎商業学校、三男元生は東京帝大法学部、国務院交通部鉄路司鉄道科長、四男啓助は陸軍士官学校、航空兵大尉、会寧駐屯、五男玄吉。長女信子は日本女子大、二女克子。
56	堺与三吉	福岡	糟谷郡 和白村 （旧和白町、現福岡市）	平民	商人	長男	明治6年 5月9日	大正6年 11月19日 59歳	父・堺次右衛門。家は貧しく、素麺業。 小学校卒業後、医師岡村某方の薬局生、私塾にて勉学。 研究所募集に合格、郡費生となる。	明治23年9月、研究所入所。 優秀で卒業後、陸軍通訳、第1師団司令部附。後、蓋平行政署附、大本営附など。凱旋後、海軍省の翻訳係。 明治31年6月、外務通訳生。重慶、天津、芝罘（領事館）などに外務省書記生として転任。 日露戦争時、芝罘領事水野、小幡両領事を補佐。戦後、奉天領事書記生、次いで副領事（領事萩原守一）。その年10月、チチハル領事館開設、領事代理。 明治40年、奉天副領事。 明治43年、長沙領事、蘇州領事転任、在官のまま鴨緑江伐木公司理事。 大正2年4月、辞職し、6月23日、間島総領事代理。 大正3年11月、独立第18師団司令部附。山東出兵に参加。 大正5年5月、長沙領事転任、6月、間島転任、朝鮮総督府事務官、在任中総領事（大正8年9月30日総領事代理、大正10年12月26日総領事）。 大正11年10月12日、吉林総領事に転任。 大正12年3月、官（高等官三等従5位）を辞し帰朝。 昭和2年5月、外務省嘱託。亜細亜局文化事業部（対支文化事業）にて上海自然化学研究所の事務。 昭和6年、病により退職。	622		642					○	○	50号	『博多青年須読』13頁 『日本官僚制総合事典』57、58頁 「外交官及領事官年鑑」外務省人事課、1908年11月（明治期外交資料研究会編『外務省制度・組織・人事関係調書集』明治期外務省調書集成、第1巻、株式会社クレス出版、1995年、37頁、2巻、330頁、3巻、93頁。	＊鄭永昌の縁酌で長崎人の楊某を娶る。 ＊『東亜先覚志士記伝』では、「広東」へ転任したとあるが、「間島」が正しい。
57	佐々木卯三郎	福岡	生葉郡 （浮羽郡） 椿子村 （旧浮羽町、現うきは市）																○		50号	『博多青年須読』13頁	
58	澤江与三吉	福岡	企救郡 石田村 （城野村） （現北九州市）																			『博多青年須読』13頁	
59	高橋正二	福岡	久留米市 篠山町	士族	久留米藩士	三男	明治3年 1月24日	昭和11年 7月 67歳	父・高橋正幸。 明治19年、久留米中学校卒業。上京、私立東京英語学校初等科入学。 明治21年春、卒業。	明治23年、久留米市費生として研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。 日清戦争時、陸軍通訳官、第2軍従軍。 戦後、台湾憲兵隊附。次いで三井物産合名会社香港支店勤務。 明治35年、退社。10月、東亜同文書院、教授兼寮監、書院12期生教育。 明治40年12月、辞職、帰郷。久留米市立商業学校教諭。以後25年間在校（～昭和5年まで）。 昭和8年、九州帝国大学、支那語講師。久留米憲兵分隊および九州医科専門学校など語学ならびに書道講師。		545						○	○	50号	石田卓生「日清貿易研究所の教育について―高橋正二手記を手がかりにして」『現代中国』第90号、2016年6月 『博多青年須読』14頁 篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981年、78頁	高橋正二『在清見聞録』、『日誌第弐』（明治24年9月9日起）、『書簡』長江一帯暴民蜂起について（全3通、明治26年）、猪田政吉『雑誌綴』（明治28年起）、愛知大学図書館収蔵（マイクロフィルム） ＊上記は『鶴久資料』として福岡市博物館所蔵の在清見聞録（全5巻，明治23-26年） 鶴久資料『在清見聞録』（全5巻，明治23-26年、福岡市博物館所蔵）
60	永田熊麿	福岡	福岡市 薬研町／博多北船町				明治5年 5月5日		父・木山長閑。 4歳、両親別居、母（永田すへ子）の永田家へ。親戚間を母子で渡り歩く。 明治14年、糸島郡加布里村定着、母のもと扶養（10歳）。 明治19年、叔父永田達雄のもと永田家入籍（15歳）、高等小学校から福岡商業学校入学、卒業。	明治23年、福岡市貸費生として研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。 日清戦争時、陸軍通訳官、第1軍附、朝鮮着後、大東溝兵站部附。 明治28年、兵站部改正のため荘河兵站部に転じ、一般軍需品輸送に従事。5月、東京へ、解職。後、九州生命保険会社、福岡日々新聞社、三池紡績会社など勤務。 明治37年、辞職し、陸軍通訳、第9師団属。7月25日、柳樹屯上陸、旅順攻撃参加。鞍子嶺、二龍山など戦闘。 明治38年1月1日、旅順開城とともに守備混成連隊附。1月28日、第9師団復帰、2月27日、奉天会戦参加、戦後両家子滞陣中休戦。 明治39年1月13日、金沢へ、解任後帰郷。後、福岡市立商業学校教諭。支那語、作文、珠算など教授担当。 昭和4年、辞職。		1062							○	50号	『博多青年須読』13頁	＊俳号、其葉。宗匠。 ＊俳誌『盧橋』『やよひ』の二誌を発行
61	原田茂俊	福岡	嘉穂郡 穂波村平恒 （旧穂波町、現飯塚市）				明治3年 12月17日		福岡中学修猷館卒業。 明治22年、福岡歩兵第24連隊入営。 明治23年、帰休兵、除隊（2等軍曹）。	明治23年、研究所入所。 明治27年1月、小倉第12連隊入隊。3月、比志島支隊編入、門司から台湾へ従軍。澎湖諸島鳥公街上陸、占領。 吐瀉病流行し、病死者埋葬、現地人雇傭。澎湖庁に入り、澎湖島守備。 明治28年秋、基隆上陸、宜蘭戦闘に従軍。後、小倉師団に復帰、除隊（一等軍曹）。 日露戦争時、小倉連隊再入営、将校に支那語教授。待機中罹病。 後、鉱業経営に従事。（72歳）		414						○	○	50号		＊澎湖庁に入った際、清国側の人相書類として日清貿易研究所卒業写真を発見。

62	平石安太郎	福岡	福岡市 西町	平民	商人		明治元年11月		父・徳兵衛は米・荒物商。 19歳、長崎へ遊学。 明治21年、福岡へ戻り簿記学、正木昌陽の塾で漢籍学習。	明治23年、福岡市貸費生として研究所入所。 卒業後、中国各港視察。朝鮮内地視察中、日清戦争開戦。 日清戦争時、釜山兵站監部雇員、軍用電線切断の探偵、逮捕に従事。10月、陸軍通訳官、第2師団附、輜重兵第2大隊に属し、山東省栄城湾上陸、威海衛攻略従軍。第4師団第7旅団司令部附。 明治25年4月16日、大連上陸、貔子窩から海城へ、同地守備、溝陣中師団参謀長に随行、岫厳地方巡視。三国干渉により東京に帰る。 明治31年1月、台湾台東庁通訳官、水尾辨務署勤務。6月、廃官、後台湾守備第3旅団司令部附、台南県下の治安維持従軍。 明治33年、義和団事件時、陸軍通訳官、第5師団第21連隊配属、韓家樹・北京東直門の戦闘従軍。北京占領後、駐屯軍附。 明治34年9月、解任辞職。帰朝。 明治37年、従軍、第12師団司令部配属。5月1日、石城交戦、九連城ほか転戦。後、第1軍司令部附、奉天会戦参加。 戦後、対馬で平石商店開店。以後、村会議員、信用組合長など。脳溢血により故郷で静養。		413							○	○	50号	『博多青年須読』13頁	
63	福井六郎	福岡	福岡市 博多瓦町							兄・砿業家、福井嘉納。												『博多青年須読』13頁	
64	三澤亀太郎 （亀次郎）	福岡	御井郡 北野村 （旧北野町、現久							福岡高等小学校教員												『博多青年須読』13頁	
65	三澤信一	福岡	久留米市 篠山町 （京町）	士族	有馬藩士	長男	慶応3年 1月14日		父・三沢清魚。 明治17年、久留米中学明善校卒業。 明治18年、福岡県高等教員検定試験合格、英語学会創設、英語教授。後、高等小学校教員。 明治23年、荒尾の講演を聞き渡清決意。	明治23年9月、研究所入所。 明治24年2月、研究所財政難につき率先して居残る。 明治26年6月、卒業。7月、日清商品陳列所入所。 明治27年、舎弟急病により帰国。8月、陸軍通訳官。 明治28年3月、広島大本営勤務。征清大総督小松宮彰仁親王に従軍、旅順、威海衛へ。休戦後、占領地視察、沖縄雄（理学士）と砿山調査。6月、新開港地専管居留地査選、上海領事珍田捨巳、外務書記官楢原陳政、陸軍少佐津川兼光、大本営特派（三沢ら）、蘇州、杭州、漢口、沙市、重慶など視察査定。 明治29年、帰朝。 明治30年、御用済、帰郷。帰郷後、久留米紡績会社副支配人。その後業績不振につき博多、中津、久留米、三池、熊本各社合併で九州紡績株式会社設立、営業部長。さらに後鐘淵紡績株式会社に吸収合併。 明治37年2月、陸軍通訳官、大本営勤務。金州軍政署附、第2軍、南山攻撃従軍。 明治38年5月、金州へ、軍政署勤務。 明治39年、関東州民政長官官房勤務、中国人行政に関する法令など審査。遼東半島の利源調査委員。各地を視察、大豆、豆粕の生産・輸出の実情調査。戦後軍票回収の整理。製塩事業に専念し辞職、神戸貿易商・吉川久七らと資本金200万円で大日本塩業株式会社設立、大連に関東総局設置、局長。貔子窩および旅順方面双頭湾約四千町歩を開拓。 明治41年、退職。 大正3年、久原鉱業招聘、北京へ、金、銅、鉄、石炭の実地調査。電気事業（才賀電気商会）につき大同視察、大同方面の炭田調査（～大正8年まで）。 大正8年、農商務省鉱山技師派遣、大同炭田調査。大倉組を介し調査。 欧州大戦時、大源鉱業株式会社（大倉、三菱、三井、古河、安川、鈴木の均分出資）設立、取締役として北京常駐。 大正9年、欧州大戦終結により混乱、各社数千万の損失、大同炭田にも余波。 大正14年、大倉喜八郎満支蒙古視察のため北京へ。大倉をとどめ山西商人と会商、梁士詒仲介のもと300万元の合弁会社の仮契約を見るも、各社難色を示し、本社解散、蒙彊政府管理下となる。 その後、久原の興亜公司借款回収、対支文化事業、対支回顧録編纂（中島真雄）、興亜院政治部事業に従事。 昭和15年春～16年春、事変下の中支視察。		418							○	○	50号		＊対支回顧録編纂に関与。
66	安川道	福岡	糟谷郡 宇美村 （現宇美																			博多青年須読13頁	
67	山崎羔三郎	福岡	鞍手郡 吉川村 ／山口村 （旧若宮町、現宮若市）	士族	福岡藩士	三男	元治元年 7月4日	明治27年 11月 31歳	父・白水清八。 明治2年鞍手山口村へ移住。 明治3年母を（9歳）、11歳で父を失い、祖母・兄の至（白水家）に養育される。長じて隣村の小学校で教鞭をとる。 鞍手学校藤雲館、福岡中学校（修猷館）に学ぶ。 17、8歳の頃、海妻甘蔵、筒井勝に師事し、英学舎に入る。三州義塾（鹿児島）入塾後、祖母病のため帰郷、小伏黒丸小学校教師。玄洋社と交遊。 明治17年御笠郡筑紫村山崎茂一郎の絶家を継ぐ 明治18年祖母他界、喪を終えると京都へ出て泰西学館入学。その後東京へ、ハットソンに英語を学ぶ。この頃荒尾と邂逅、渡清決意するが資金不足のため、奈良で英子塾開校。 明治20年10月頃漢口楽善堂へ浦敬一と北御門松次郎（後姓吉田）と参加。11月～、漢口から鎮江・揚州へ旅行。山致誠（常致誠）、字子羔を名乗る。29日帰漢。 明治21年、9月30日、平岡浩太郎の中国青年派遣につき上海渡航（監督中野二郎）、城内の馮相如に南京官話を学ぶ。この後、漢口楽善堂に参加。 明治22年、雲南、貴州を探検、常致誠（山致誠。字、子羔）を名乗り、12月末から元旦にかけて漢口帰任。 明治23年1月4日、広東、広西探検、6月、上海帰着。	明治23年6月上海にて探検帰着後、研究所設置を知り参加。庶務を担当。 明治24年5月、学生再募集のため九州各県、三府常総へ遊説。郷里へ戻り著述に従う。 明治25年6月、再渡清。研究所には関係せず、上海、漢口間を上下する。 明治26年、漢口熊家巷で写真屋開設（中国人協同経営）。 明治27年夏頃、上海から芝罘、朝鮮京城へ。清軍の駐屯地京城牙山に密偵。7月23日、京城入城後、大院君邸宅守護。牙山の戦で戦闘参加、混成旅団司令部属、後龍山兵站部附通訳。平壌で偵察任務、軍の撹導、物品徴発、捕虜尋問。10月4日広島大本営へ、陸軍省通訳、第2軍司令部附。16日、出征。23日（24日）、遼東半島花園河口にて参謀神尾光臣、鐘崎三郎、猪田正吉らと水雷艇で上陸。普蘭店から遼陽付近へ偵察。消息を絶つ。26日碧流河畔にて捕縛され金州都統衙門に投獄、31日鐘崎と共に処刑される。（向野堅一が調査）。 明治28年2月8日、遺骸埋没地が知れる。後根津により金州城北崔家屯に墓碑建立（三崎山として藤崎、鐘崎も建立）。遼東守備軍撤退時、三碑を東京高輪泉岳寺へ移建、靖国神社へ合祀。	569		472										『烈士鐘崎三郎伝』烈士略伝、1-2頁。 石瀧豊美『玄洋社発掘―もうひとつの自由民権』西日本新聞社、1981年、267頁 塩川角太郎、木本盤之助共編『山崎羔三郎君傳』山口村（福岡）：山口村在郷軍人分会、1928年	
68	吉原恒三郎	福岡	福岡市 福岡魚町																○			『博多青年須読』13頁	
69	戸田義勇	福岡	久留米市	士族	久留米藩士	三男	明治2年 1月3日	昭和4年 1月19日 61歳	父・戸田乾吉（堅吉）は元治元年から明治初め頃まで藩の汽船長。長崎聞役方、水軍取調方を歴任、蒸気船購入や回航に関係。維新後は地域の産業振興につくし。著書に「久留米小史」。 父業を継いで船員となるため、東京商船学校入学。故あって退学。	明治24年秋、研究所入所。 明治26年7月、卒業。 日清戦争時、陸軍通訳官。 明治31年、台湾総督府法院通訳、台南、新竹など転勤、まもなく帰国。次いで土木請負の志岐組会計主任。 明治33年、志岐組員として鉄道工夫150名を引率。 日露戦争時、陸軍通訳官、砲兵第1連隊、南山、得利寺、蓋平、海城、遼陽、沙河などの転戦。 明治38年、辞職し、山海関にて軍用品輸送従事。 その後、一家に不幸あり、河南産の竹皮を下駄表製造（大正南部表）の仕事を開始、無産者に糧を与え、資力も得る。蕃月梅外が発案・支援。 大正2年、関東大震災時に中国産竹皮を日本産同様に漂白する方法を完成。災害後の資源調達、破壊された工場の再建。	648		114							○		篠原正一『久留米人物誌』久留米人物刊行委員会、1981年、353頁	＊父・戸田乾吉は漢学・国学大家。元治元年～明治初期まで潘の汽船船長。 ＊妻は白仁武の妹。
70	末広栄二	大分	中津市	士族	藩士			昭和12年 2月6日 66歳	父・奥平家藩士、扇平、母・宮村氏。 父が福岡県の属官であったため福岡の小学校を卒業。 佐賀県新設時に、父が佐賀県会計課長に転任、佐賀県の中学校に入学。 明治23年、熊本第五高等学校在学中、荒尾の講演を聞き、渡清決意。	明治23年、研究所入学。在学2年目の頃、病により退学。 明治26年、療養の後、大阪商業興信所に入社。 明治34年、父逝去により辞職、安田生命保険会社京都出張所長に転職、次いで本社へ、「保険の栞」を著述。 明治37年4月、野津将軍の第4軍に通訳として従軍。 明治39年、凱旋後解職。 戦後、鉄嶺に居住し、木戸蘭禅経営の新聞に関与。 明治42年5月、遼東新報の支局を引き受け、その傍ら商況日報の漢文欄を担当。自らは「新鉄嶺」を刊行。 大正4年、共成合資会社創立。 大正5年、居留地民会議員。 大正8年、鉄嶺取引所、鉄嶺証券信託会社など創立発起人となり、共成合資会社を合併。 大正10年、これより前に牧師ウイン博士の洗礼を受けキリスト教に帰依、母の喪および在留民の精神修養のため教会堂設立。また南満鉄道会社地方委員会鉄嶺副議長、全満洲地方委員連合会鉄嶺代表、鉄嶺商工会議所副会頭など。 満州事変時、松岡勝彦と城内に入り、県自治指導員。 昭和12年、満洲治外法権撤廃鉄道附属地行政権委譲となると『鉄嶺三十年史』を執筆中、心臓麻痺により急逝。	601								○				

71	水谷彬	大分	速見郡杵築町 （現杵築市）			二男	明治9年9月3日		父・武寿、母・千賀子。 長男夭折のため嗣子。	明治23年、研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。 明治27年11月、陸軍通訳官、広島で越年。 明治28年3月、金州半島兵站監部附として宇品出帆。柳樹屯着後、虱子窩兵站司令部附。4月、大総督府が旅順へ、近衛および第四両師団が柳樹屯、虱子窩間に駐軍、輸送に従事。遼東還付後12月、東京へ帰国。 明治29年2月、台湾総督府附、台北へ。4月、宜蘭守備隊配属。5月、辞職。 明治30年6月、海軍省事務嘱託、日清戦史編纂に従事。 明治31年5月、病により辞職。 明治32年6月、中島真雄と福州に遊学。 明治33年、帰国。 明治34年3月～36年7月、東京同文書院で留学生教育に従事。この頃からキリスト教に興味を抱く。 明治37年5月、陸軍通訳官、軍政委員附、軍政官木村宣明中佐に属し、27日、南尖子から大孤山へ、同地軍政署開設および勤務。7月、木村軍政官海城軍政署転出のため同地転勤。12月、海城軍政署・牛荘分署設置のため牛荘へ。 明治38年1月11日、ミスチェンコ騎兵隊営口襲撃、12日、海城軍政署へ引揚げ、17日、牛荘復帰。3月、大熊鵬の消息確認。7月、安東軍政署転勤（初代軍政官大原武慶）。10月、軍政署撤廃により東京へ、免官。 戦後、健康を害し、キリスト教研究。 明治43年4月、洗礼を受けキリスト教者。 明治44年、旅順工科学堂（大正11年、旅順工科大学）嘱託教師（～昭和5年まで）。 昭和6年、関東庁支那語奨励委員、毎年の庁員験試に参与。辞任後、別府温泉に滞在。		416							○	○	50号		
72	吉武勝平	大分								福岡県若松港安川松本商会							13		○				
73	広瀬貞治	大分	日田町 （現日田市）						天領日田、私塾・咸宜園を創設した儒者・広瀬淡窓。 曾祖父・久兵衛（南陔・6代、淡窓は兄）。 祖父・広瀬源兵衛（雨窓・7代）、父・七三郎（南窓・8代）。 貞治は広瀬宗家第9代。	明治29年11月（現在）、台北県五指山撫墾署通訳生。 明治30年11月（現在）、台北県五指山撫墾署主事補。				台-1-22、85	甲M29-584 甲M30-639			○		51号	大分県立先哲資料館編『広瀬淡窓資料集』大分県先哲叢書、大分県教育委員会、2012年 向野康江「日清賀易研究所における学生生活―向野堅一の兄たちの書翰を手掛かりに―」『アジア教育史研究』第23号，2014年3月	＊広瀬淡窓の一族。 ＊子の広瀬正雄は日田市長、衆議院議員（佐藤内閣時に郵政大臣）。 ＊東京大学史料編纂所：『東京大学史料編纂所報』第37号（2001年）https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/syoho/37/saiho_37_046.html（2015年12月閲覧）。
74	広瀬寅太郎	大分	日田町 （現日田市）						広瀬貞治とは親戚関係。										○				
75	大川愛次郎	佐賀	佐賀市 上声町				慶応3年 6月15日	大正15年 4月3日 60歳	中学校卒業後、長崎県の儒者楠元碩水につき漢籍を学ぶ。後、軍人を志し、佐賀市の干城学校入学。	研究所入所。 明治26年卒業。 日清戦争時、陸軍通訳官、第2軍第1師団乃木旅団に従属。第2軍旅順陥落後、岫厳の第1軍との連絡のため、各中隊から27名選抜し、小隊に嚮導として随行。 明治29年2月、台湾総督府通訳。後、辞職し土木建築請負に従事。 明治37年5月5日、大本営附遼東特別任務隊専任通訳、花田仲之助少佐麾下、6月1日、安東県上陸後、満洲義軍として各地転戦。7月上旬、毛利大尉に随行、八河灘に潜行。7月中旬、義軍左翼四ヶ隊を編成、22日、城厳に上陸、占領。このほか間島方面の馬賊と通化付近で対峙するなど。8月5日、義軍を離脱。 明治38年12月、病により内地後送、入院後辞職。後、奉天にて土木建築業請負に従事。 大正9年、シベリア出兵に従軍、特別任務として哈爾賓などの地で活動。9月、凱旋。後、安東県に移る。 大正12～13年頃、長男を亡くす。	641		143						○	○	50号	串間聖剛「新出史料『明治四十一年七月知人名簿』-佐賀市長・石丸勝一の交友関係について-」『佐賀民俗学会』第20号、2009年、73頁	
76	大木熊雄	佐賀	佐賀市 赤松町 西堀端 （現佐賀市赤松町）	士族			明治5年 9月1日	大正6年 2月26日 45歳	小学校卒業後、干城学校（干城社）入学。 荒尾の演説を聞き入所決意。	研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所。 日清戦争勃発後、帰国、陸軍通訳官、第1軍従軍。 明治28年、講和成立後、台湾総督府副官部附通訳、11月福州へ出張。 明治29年、鳳山地方法院附。 明治31年11月、台北憲兵隊本部へ。 明治34年7月、臨時台湾旧慣調査会に転勤。 明治35年、臨時台湾旧慣調査会通訳。 明治36年、台湾総督府から広東主張の命、臨時台湾旧慣調査会第1部通訳（～明治40年まで）。8月1日、出張の形式で免。 明治44年、佐賀市市役所勤務。 大正2年、辞職。	642			台-2-13、110、186	文M35-21 文M36-26 文M37-26 甲M38-607 文M39-113 文M40-153				○	50号		＊清語教師の免状も持っていたが、教員となったことは不明。
77	甲斐靖	佐賀	佐賀市 赤松町 中館 （現佐賀市）	士族	多久家滞士	四男	慶応元年 7月		父・甲斐宗平、維新時に帰農。 明治4年、県下小城郡東多久へ移住。小学校卒業後、丹立義塾へ。小学校教輟。 明治17年、陸軍教導団。 明治18年、歩兵科下士官、熊本鎮台配属。 明治23年、荒尾の演説を聴き渡清決意。9月、満期退営。	研究所入所。 明治26年、卒業。 明治27年7月、非常招集、後備第12連隊、関門地方守備。 明治28年3月、比志島混成枝隊に編入、佐世保から澎湖島へ、小隊長として同島占領戦参加。講和後帰朝、召集解除、特務曹長から歩兵少尉。10月、陸軍通訳官、台湾総督府附。 明治29年1月、台北城包囲戦時、軍事教練教官、防御指揮官として尽力。5月、民政移行で辞任。 明治33年3月、上海へ、唐才常起義に参加、唐と同居して参与、上海日本人義勇隊の副隊長（隊長は稲村新六大尉）、訓練に尽力。8月、漢口へ。唐才常らとともに武昌巡撫街門に捕縛、死刑宣告を受けるが領事瀬川浅之進仲介で助かる。三年の退清処分。 明治35年1月、山内岱の仲介で下関商業学校支那語教師。 日露戦争時、福岡連隊招集、歩兵第24連隊附（中尉）、冬営中小隊長勤務、中国語での後方作業従事。 明治38年2月下旬、奉天会戦に参加、3月5日、敵弾受け内地後送。5月、癒えて福岡中州の俘虜収容所長。 明治39年2月、長崎にてロシア側捕虜受取委員に引渡し後、招集解任。 戦後、満洲へ、長春駐在武官守田利遠と連絡、東蒙古へ情況調査。 明治44年10月、吉林地方視察中、辛亥革命遭遇、大連より武昌へ、黄興の野戦総司令部に投じて革命軍指揮、漢陽戦線で銃撃、重傷を負う。武昌へ渡り、拂暁総司令部日本人公館に収容、漢口同仁医院に入院後回復。 明治45年1月、帰朝。福岡大学病院にて手術。 大正2年7月、第2革命により上海へ。着後罹病。快復後、四川独立軍総司令熊克武に招聘、佐藤嘉平次大尉（後青島攻囲戦戦死、少佐）とともに軍艦鳥羽で重慶へ行くも、熊克武敗退のため引揚げ。 大正3年、青島陥落後、軍政委員吉村大佐のもと学務一切担任。 大正4年末、第三革命。 大正5年1月、辞任し帰朝、田中参謀次長を訪問し、根津一仲介で原参謀総長を説得するが外務省反対により、青島引揚げ。帰着後、中西正樹の依頼で、周村にて呉大洲を擁立した倉谷箕蔵に倒袁運動参画（萱野長知は雑県）。6月、袁世凱死去し活動打切り。この後青島定住。 大正10年頃、孫文を訪問し長江南北二分を意見。 大正13年、青島居留民団理事就任。青島在留時から観世音信仰。 大正15年春、青島妙心寺蛾川和尚より法号（無月居士）を得て仏弟子、平和主義を唱える。 昭和2年春、故山に帰り、全果下七ヶ月の行脚。（77歳）	482							○		50号	串間聖剛「新出史料『明治四十一年七月知人名簿』-佐賀市長・石丸勝一の交友関係について-」『佐賀民俗学会』第20号、2009年、73、77頁	＊号、癡庵、三忘道人。 ＊「丹立義塾」とあるのは、多久の古名、「丹邱」のことか。「東原庠舎」のことか。

78	楠内友次郎	佐賀	基肄郡（三養基郡）田代村字鳥栖（現鳥栖市）	士族	対馬藩原藩士	二男	慶応元年2月16日	30歳	父・対馬藩原藩士儒者、青木文造。 明治2年、藩原の藩黌某明館。 明治4年、父亡くし（7歳）、兄置が家督相続（二代目青木文造）。 明治5年、天木家養子。日新小学校。15歳、天木家家業の売薬行商監督、両肥薩隅間を跋渉。後、青木家復籍。後、兄文造の友人楠元直矢の親戚の絶家・楠内家を継ぐ。 明治18年、陸士応試は不合格（視力不足）。鹿児島県属官の登用試験に最高点で及第、収税属。 東京専門学校（早稲田大学）入学、法律を学ぶ。英語科に転じる。 荒尾の構想を聞き訪問、渡清決意。	明治23年、研究所試験終了後、入学。 明治26年卒業後、九州、四国、中国、大阪方面の海産物調査。 明治27年1月頃、一時上海へ、横浜の貿易新聞社長某と同行、中国内地を視察、数ヶ月後上海へ。帰着後、赤痢罹病。 7月頃、日清戦争時、根津に偵察参加を依頼し、福原林平らと参加。営口、遼陽（奉天の敵情報告）、鳳凰城（沿道の敵情報告）、鴨緑江、該江から朝鮮（敵数調査）へ、義州街道（沿道の状況報告）のため、8月11日、福原と営口仏租界にて捕縛。上海護送をへて南京にて福原ともに処刑。	583		441					○			『巨人荒尾精』299頁 『烈士鏈崎三郎伝』烈士略伝、7頁 『上海新報』50号	＊九烈士 ＊母・美布子、姉・マス子、弟・栄。
79	富永又吉	佐賀								明治23年、研究所入所。 卒業後、日清戦争へ従軍、陸軍通訳官、近衛師団附、遼東に集結中停戦。近衛師団とともに台湾へ、病により陣没。		374	125					○	○	50号		
80	西村忠四郎（梅四郎）	佐賀	神埼郡蓮池村（現佐賀市／神埼市）			二男	元治元年4月24日	明治29年1月9日 33歳	父・忠甫。 志田丙村（保吾）に漢籍を学ぶ。後、佐賀の木原義四郎、周防の東宗一、福岡の正木昌陽らに漢籍を学ぶ。熊本に出て数学を修める。 明治17年9月、陸軍士官学校入学。 明治20年7月、卒業。歩兵少尉、歩兵第12連隊小隊長。 明治23年、小山秋作と共に清国差遣。8月、参本附、第2局附、中	明治23年9月、軍に在職のまま、研究所幹事に就任（宗方小太郎と同時）、舎監となる。課報任務遂行。 明治24年、中尉。 明治26年、川上操六が清国出張時に同道。8月、研究所閉所につき帰朝、原隊（歩兵第12連隊附）復帰。 明治27年11月、病により休職（日清戦争出征せず）。 明治28年3月、歩兵第12連隊補充大隊附（13連隊か？）、その後復員。6月、休職、帰郷療養。	596		95								中野紹太郎『蓮池伝記』蓮池伝記編纂部、1922年、65頁（国会図書館収蔵）	＊旧姓北原、のち西村に改める。上海時代は忠一と名乗る。 ＊『雨期作業杞人之憂』を記したという。
81	野中林吉	佐賀	神埼郡東背振村（現吉野ヶ里町）			三男	明治2年	明治28年8月20日 27歳	佐賀中学校卒業。	明治23年、研究所入所。 卒業後、日清戦争従軍。 明治28年3月、近衛師団配属、最中、病になる。	647							○	○	50号	東背振村史 東背振村七十年史	＊雅号、三杉。
82	平野六郎	佐賀								台湾台南日報社							13	○	○	50号	串間聖剛「新出史料『明治四十一年七月知人名簿』-佐賀市長・石丸勝一の交友関係について-」『佐賀民俗学会』第20号、2009年、73頁	
83	牧瀬省三郎（森川省三郎）	佐賀	杵嶋郡武雄町（現武雄市）			三男	明治5年10月12日	大正13年5月18日 53歳	父・町田代賢龍。 後、森川姓を継ぐ。	研究所出身。 日清戦争時従軍。 戦争後、牧瀬保次郎の養嗣子となる。台湾総督府法院通訳、台南地方院兼検察局に属す。 明治31年、台湾総督府台北県滬尾辨務署嘱託。 明治34年4月（1日現在）、台南地方法院風山出張所通訳風山出張所検察局通訳。（～明治35年5月1日現在、明治36年5月1日現在、明治37年5月1日現在）。 日露戦争時、陸軍通訳として従軍。	636			台-1-355、447、448、535	職M31-42 甲M34-792、793 職M35-30、31 職M36-35、36 職M37-35、36			○	○	50号		＊姓が田代→森川→牧瀬と変わる。
84	江口音三	長崎	北高来郡諫早町（現諫早市）	平民	農民地主	三男	明治4年12月		父・森林平。地主。 明治20年、祖母の実家を相続。	研究所卒業。 日清戦争時、大本営附、第1軍附として従軍。 明治28年6月、台湾総督府に転任、台南民政部、嘉義地方法院など勤務。 明治32年、官を辞して、商業営業。斗六精糖株式会社専務取締役をへて、斗六精糖株式会社監査役、台湾赤糖株式会社専務取締役を歴任。 明治40年4月、居留民会会長 大正5年、東洋精糖株式会社に両社を合併解散し辞職。 大正12年5月、後、有馬洋行大連出張所主任。						満洲編12-208 満洲日報社編『満蒙日本人紳士録』満洲日報社臨時紳士録編纂部、1929年、え1頁	13	○	○	50号	『「満洲」に渡った一万人』244頁	
85	工藤常三郎	長崎								京都市寺町通今出川下る扇町　京都商業学校							11		○			
86	中西重太郎	長崎	長崎市小曽根町				明治8年6月25日	大正3年7月18日 40歳		明治23年、研究所入所。 明治25年、父の訃報により退学、仏人経営のフレンチスクールに入る。 日清戦争時、佐藤正連隊長（大佐、第1軍第3師団歩兵第18連隊連長）に属して各地転戦。 明治28年5月、帰国。後、台湾に入り通訳官。キリスト教に帰依していたが、禅学へ。禅師黄檗宗一に師事、後福岡聖福寺の東瀛禅師に参禅。後、東京専門学校（早稲田大学）英文科入学。 明治32年7月、東京専門学校卒業。康有為渡米時の通訳として随行。11月、東京同文書院の留学生監督。 明治34年、福州東文学堂総教習の岡田兼次郎辞任により後任となる。 明治36年、病により帰養となったため桑田豊蔵が後任。 明治38年、山口高等商業学校講師。 明治40年、病により辞職。茅ヶ崎ほか転地。	632		344					○			『近代日中関係史人名辞典』417頁	＊療養の費用を児玉源太郎が出した。 ＊東文学堂は東亜同文会が支援したが、その実は児玉から出ていた。その縁起による。
87	渡部正雄	長崎	島原（南高来郡島原町）（現島原市）			長男	明治6年2月1日	昭和8年8月11日 62歳	父・渡部好馬。 小学校卒業後、英語義塾。 長崎中学校（元の英語伝習所、長崎英語学校）。 明治22年、荒尾の演説に呼応、中学退学（18歳）。	明治23年9月、上海に渡航するも学資を払えず、校費生として入所。卒業。 日清戦争時、佐藤正（大佐、第1軍第3師団歩兵第18連隊連長）の連隊に陸軍通訳として所属、嚮導任務。 明治28年10月、台北県（台北庁）通訳官。内村邦蔵とともに荒尾のベスト看護。11月、恒春庁一等属、財務に従事。 明治30年6月、鳳山県に転任（11月1日現在、鳳山県財務部属）、脊髄病により辞す。 明治33年、大東汽船会社、後支店長岡田兼次郎病没のため支店長転任。病再発。 明治38年5月、大東汽船会社を辞し、鎌倉にて養生。後、東京に移り、駄菓子屋。宮坂九郎の発見した、四川省の棕梠毛の輸入を譲られ利益を得る。 大正8年、キリスト教信仰。 大正10年、基督教伝導隊活水学院入学。 大正14年3月、学院を修了、牧師となる。4月、基督伝導隊落合基督伝導館牧師。 昭和2年、基督伝導隊評議員を兼任。 昭和8年7月、神経痛併発。	626		207	台-1-94				○	○	50号		＊昭和10年8月追悼録作成（未発見）。
88	赤嶺国弥太	熊本																○		50号		
89	池部秀二（秀次）	熊本								明治31年、台湾総督府台中県内務部庶務課嘱託、か（？）。					文M31-50			○		50号		＊下記資料を出版か。 池部秀二編『九州鉄道案内』斉藤源八出版、1893年

90	井口忠次郎	熊本						大正13年頃		研究所出身。 日清戦争時、陸軍通訳として従軍。 日露戦争時、陸軍通訳として従軍。 後、漢口の東肥洋行入社、日中貿易に尽す。晩年は不遇により大正13年頃没す。								○	○	50号	『巨人荒尾精』17頁	
91	岩崎重平	熊本																○		50号		
92	岩崎博隆	熊本								熊本県飽託郡五町村 アルカリ鉱泉事務所。						13				『孫文・日本人関係人名録』35-36頁	
93	右田亀男	熊本	熊本市坪井町（現熊本市中央区）	士族	熊本藩士	長男	明治4年1月	明治28年9月16日 25歳	細川家出仕、父・右田徹。 小学校、済々黌、文学館に学ぶ。 明治23年、卒業。	明治23年、研究所入所。 明治26年、卒業。 日清戦争時、陸軍通訳官、第1軍従軍、朝鮮耳湖浦上陸、安東県にて第三師団従軍、二道河子、桜樹溝など戦闘参加、海城へ、缸瓦寨、牛荘、田荘台など従軍、鬼通訳と称される。 明治28年7月、蓋平、復州、金州をへて名古屋へ。7月21日、台湾総督府へ赴任、9月1日、台北にて南進軍司令部附、赤痢に罹病、客死。		538	387					○		50号		
94	岡部喜三郎（山鹿喜三郎）	熊本								熊本県天草郡今津村						12	○	○	50号		＊『河野伝』附録、思出のアルバム、日清貿易研究所卒業記念撮影 ＊『続対支回顧録』、緒方二三の項、320頁
95	小野常三郎	熊本								明治40年5月（1日現在）、台湾総督府総督官房文書課雇（～明治45年までか）。臨時台湾戸口調査部調査課雇。				文M40-10、39 文M41-13 文M42.5-14 文M43-11 文M44-14 文M45-24			○		50号		
96	小山平二郎（平次郎）	熊本															○	○	50号		
97	勝木恒喜	熊本						大正末年 55～56歳		研究所卒業。 日清戦争時、陸軍通訳。戦時中、通訳人員不足のため、帰郷し、3か月速成の通訳養成所教師。 戦後、東肥洋行入社、上海主任。方言学堂にて教鞭もとる。 辛亥革命時、黄興、孫武など交流。 第2革命時、革命派との関係が疎遠せず帰朝、東京へ。			234				○	○	50号		
98	鳥居赫雄（鳥居素川）	熊本	熊本市本荘町 （熊本市中央区）	士族	熊本藩士	三男	慶応3年7月4日	昭和3年3月10日 62歳	代々藩主細川家に仕える。父・藩医鳥居般蔵。 幼時、父を失い、長兄は西南戦争時、薩摩軍の部隊長として陣没、長兄夫人に養育される。明石華陵の漢学塾に学ぶ。 明治6年、本山小学校入学。 明治15年、済々黌入学。 明治19年（16年巻？17年？）、卒業。上京。 明治20年、有斐学舎の給費生として、独逸協会専門学校に入る（17歳）。三年半ばで退学。	荒尾の意見に賛同し、同伴を請い渡清。研究所参加。 明治21年、数ヶ月で病を得て帰国、半年療養。老母を残し渡清できず、母とともに京都に出て、修学院林休寺由利滴水に参禅。滴水の高弟天田愚庵（鉄眼）を知り、のもとへ。 明治23年、天田から陸実（鳳南）を紹介され、『日本』新聞に入社。 明治27年9月、日清戦争時、従軍記者として戦地赴任、通訳も兼ねる。戦況報告記事により知名度を上げる。 明治28年5月、帰朝。 明治30年、池辺三山（吉太朗）の勧めで大阪朝日新聞入社。 明治32年頃、「玄兎」「素卿」の名で「一週評論」を書く。 明治34年、大阪朝日からドイツ・ハレ大学に派遣留学。 明治36年、帰社。 明治37年3月、第1軍従軍記者。近衛後備混成旅団長梅沢道治少将の沙河戦に従軍（39年10月まで）。 明治44年、冀鄂・乃木大将と同船して渡欧。イギリス王の戴冠式参列、欧米各国游歴。 明治45年、西村天囚に代わり責任編集者。 大正元年1月、帰朝。 大正7年10月、大朝筆禍事件（白虹事件）に関し編集局長として大阪朝日を引責退社。 大正8年2月、我等社を創立（長谷川如是閑、大山郁夫、丸山幹治、井口孝親）、『我等』を発行。11月、大阪にて大正日々新聞創刊。 大正9年、出資者と意見を違え大正日々を解消。以後、兵庫県芦屋に閑居。 昭和2年7月、中国を游歴。帰国後、大阪毎日新聞、東京日日新聞に「支那は支那なり」を連載。	651									『明治新聞雑誌関係者略伝』161頁 原武哲編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院,2014年 西田長寿編『明治新聞人文学集』筑摩書房、1979年 『三代言論人』第7巻、時事通信社、1962年 鳥居素川著『支那は支那なり』大阪：大阪毎日新聞社，1927年 新妻莞著『新聞人・鳥居素川ペン・剣に勝つ』朝日新聞社、1969年 口	＊雅号、素川。鳥居元忠の末裔という。 『類杖つきて』 『舞台は廻る』 『支那は支那なり』
99	橋口吉之助	熊本								鹿児島県薩摩国出水郡野田上名村						9					
100	藤城亀彦	熊本					明治4年	24歳	明治10年、済々黌。	明治23年9月、入所。 明治26年6月、卒業。商品陳列所入所。10月、日華洋行で綿花買入れ、日清戦争勃発で27年8月帰国。翌月陸軍糧秣員、第2軍・兵站司令部附。鎮子窩滞在後、11月26日斥候勤務、渋谷中尉の斥候隊に所属、普蘭店前進中、苅家店北東・曲家溝にて戦死（夜中嚮導の任で住民の門をたたいたところ馬賊と誤認され胸部を刺殺される）。	582		526					○	○	50号		
101	深水十八（清田十八）	熊本								営口正金銀行行員。 正隆銀行取締役兼支配人。						9	○		50号		＊深水静は親戚。 ＊『続対支回顧録』、緒方二三の項、320頁
102	古荘弘	熊本	熊本市新南千反畑町 （現熊本市中央区）			長男	慶応3年10月9日	大正14年8月11日 59歳	父・古荘龍象。 幼時、藩儒平田平七門下、漢籍学習。小学校卒業後、済々黌。陸士士官学校入学準備のため育雄黌に入学。 明治18年、渡米（19歳）し、カリフォルニア州商業学校に入学。 明治21年、帰朝し、郷里に私塾開設、英語教授。	明治23年、研究所入所。 明治26年、卒業し、帰熊。大日本製革所を起業（アメリカの製法）。 明治27年、陸軍通訳官。戦後、製革事業に再従事。 明治37年、陸軍通訳官、第6師団兵站部附、満洲に出征。戦争後、上海へ、江南製革公司（清人・江孟聡、河野久太郎、白岩龍平ら）起業。 大正13年、護謨製品工場を起業、護謨靴の製造に従事。	683							○		50号		＊「日清貿易研究所第一学期試験成績表」では「古庄」。

103	牧相愛	熊本	熊本市京町（現熊本市中央区）	士族	熊本藩士	長男	明治5年5月4日	明治41年9月9日 37歳	父・細川家家臣、牧相之。 叔父に牧相信（相之の弟）。 明治23年、済々黌在学中、研究所設立を聞き渡清決意。	研究所卒業後、上海から陸路北京へ旅行、帰途、芝罘で宗方小太郎より依嘱を受け、助力。 日清戦争時、陸軍通訳官、第2軍第6師団工兵第6大隊附。 明治30年、京都市立商業学校支那語教師。 日露戦争時、第12師団司令部附通訳官。 戦後、鹿児島県立商業学校教諭、支那語教師。 明治41年、病により熊本県立病院に入院。	631							○				＊兄・牧次郎は陸軍歩兵大佐。
104	松倉善家	熊本	玉名郡鍋村 （旧岱明町、現玉名市）	士族	熊本藩士	長男	明治3年11月29日		寛政14年、天草の乱に連座した後改易される。その後、細川家出仕。 父・松倉則吉。 小学校卒業後、文学精舎。この頃、荒尾が熊本鎮台勤務、知己となる（14～5歳）。 同精舎を卒業。荒尾が研究所員募集のため熊本に寄った際に訪問、鳥居赫雄とともに渡清決意。	研究所入所。成績は非優秀（鳥居は退学）。 明治26年、卒業。同県出身者で、東肥洋行創立。 日清戦争時、陸軍通訳官、第6師団（熊本）第23連隊、威海衛戦従軍。威海戦後、近衛師団司令部転属、台湾へ。 明治28年5月31日、三貂角上陸、基隆攻撃従軍。台北着後、山根信成の混成支隊に属し、新竹、龍潭堡、桃子園、大科崁、台中へ。彰化へ滞陣中、荒賀直順とともに総督府へ召喚、高島鞆之助将軍に随行、台南へ。劉永福捜査のため安平へ。台北帰任後、辞職。帰国後、東肥洋行創立に従事。 明治29年10月、創立（岡崎唯雄社長、三池親信熊本本店主任、深水十八大阪支店主任、緒方二三漢口主任、松田清雄沙市主任、松倉が上海主任）、その後意見対立で、上海主任を勝木恒喜に引き継ぎ帰国。 明治30年10月、農商務省織田一の北支視察のため、熊本商業会議所代表として参加、北京、天津、営口、芝罘など視察。営口に商品陳列所設置計画、大隈重信、伊藤博文、佐々友房を動かし、曾禰荒助農商務大臣と会見し政府補助金（三千円）獲得。 明治31年5月、営口に日本商品陳列所設置。郵船会社社長近藤廉平により東肥洋行商品に対し二割五分割引など。 明治35年9月、多大な欠損により解散。以後、独力で東肥洋行を維持。この後、陸軍特別任務の拠点（江木靖夫少佐、土井市之進大尉など、山海関諜報連絡部への送達任務）となる。 日露戦争時、帰朝。引揚げ時、在留民を監督、山海関より長崎へ避難。 戦後、営口撤退により瀧川領事と協議、東肥洋行閉所。東業義園、振興銀行創設。 明治44年、辛亥革命時、北京で種々計画するが、皮膚病により断念。以後、治療に専念。		539						○	○	50号	『「満洲」に渡った一万人』1348頁	
105	本島正礼（本嶋正禮）	熊本								熊本県八代郡八代町堀端 明治31年、台湾総督府台中県知事官房嘱託兼台中県警察部嘱託。 明治33年4月（1日現在）、台北地方法院通訳兼台北地方院検察局通訳。 明治34年4月（1日現在）、台北地方法院新竹出張所通訳兼新竹出張所検察局通訳。（～明治35年5月1日現在、明治36年5月1日現在、明治37年5月1日）。				台-1-191、268、269、352、353、445、446、533	職M31-50、52 甲M33-749、750 甲M34-790、791 文M35-26 文M36-30、31 文M37-30、32		14	○	○	50号		＊『上海新報』50号では「元島」の記載。
106	武藤岩彦	熊本																○	○	50号		＊『続対支回顧録』、緒方二三の項、320頁
107	川村時彦	熊本																			佐々博雄「日清戦争と通訳官」『日清戦争と東アジア世界の変容』下巻、東アジア近代史学会編、ゆまに書房、1997年、379頁	
108	池畑平二郎	鹿児島								鹿児島県新町二番丁							13					
109	伊地知季綱	鹿児島		士族				27歳	伊地知正治の甥。 黒田清隆の書生。	明治25年、研究所入所。 明治26年、研究所卒業。 日清戦争時、陸軍通訳、遼東各地転戦。次いで第2軍従軍、台湾へ、乃木希典麾下で通訳任務。従軍中、急死。	568		10							50号		
110	岩元嘉次郎	鹿児島	鹿児島市	平民	商人	四男	明治8年7月6日	明治37年10月 37歳	父・岩本清兵衛。実業家。	明治23年、研究所入所（16歳）。 明治26年6月、卒業。 明治27年10月、陸軍通訳官、第2軍第6師団附。山東省栄城湾に上陸。 明治28年10月、台湾総督府附。 明治29年5月、台湾軍政から民政移行につき台中県属（～明治34年まで）。台湾総督府台中県通訳生。 明治30年、台中県財務部租税課属兼通訳。 明治31年、台北県内務部分課未定通訳。 明治33年、台北県知事官房通訳係通訳（4月1日現在）。 後、清国天津警務学堂の教官。 明治35年1月、天津・北洋軍医学堂翻訳（～明治36年確認）。	639			台-1-50、86、141、216	甲M29-612 甲M30-640 職M31-35 甲M33-774			○	○		「清国官庁雇聘本邦人一覧表」（明治36年4月調）,外務省外交資料『外国官庁ニ於テ本邦人雇入関係雑件』(3-8-4-16-2-2)	＊『旧植民地人事総覧』141頁では「岩本嘉次郎」の記載。
111	小浜為五郎	鹿児島	姶良郡加治木村（加治木町） （現姶良市）	士族	鹿児島藩士	長男	明治元年2月15日	大正8年12月18日 52歳	父・成田氏興は維新勤王党。陸軍大尉の後、西南戦争に薩軍として各地転戦、後免ぜられ姶良郡郡長。 東京に遊学、三田英学校。海軍を志望するが胸囲が足らず断念。上海へ。	明治24年、研究所に招聘され、英語教授担当。 日清戦争時、陸軍通訳官。 明治30年11月（1日現在）、台湾総督府宜蘭庁宜蘭辨務署長（高等官7等従7位、～明治33年4月1日現在）。 日露戦争時、従軍、大連軍政署、安東県軍政署属、軍政官高山公通のもと従事。 戦後、安東県に定住、『安東新報』発行、社長。 明治40年、外務省、天津、上海、漢口、牛荘、安東に民団組織、安東県民団委員、官有財産管理委員兼任、後、吉田茂が民団理事長に抜擢。 明治44年10月、朝鮮警務総監明石元次郎の密旨を受け北京に潜行、清朝復興のため醇親王、粛親王、恭親王らと面会、粛親王を奉じて旅順に退く。後、満鮮運輸株式会社創設。 大正2年、両社を退いて安東県居留民団理事、安東官有財産管理委員会長、安東商業会議所特別議員など歴任。後、安東新報社後任社長の死去により、社長に復帰。 大正8年、帰郷、療養。		266	165	台-1-165、241	職M31-83 甲M32-719 甲M33-799						『「満洲」に渡った一万人』361頁	＊号、錦江。 ＊小浜氏照は実弟。 ＊長男・氏清、氏典、氏明、氏長、ハル子、アサ子。 ＊研究所では英語教師であったが学生と同世代であったため友人関係であったという。

112	川村景敏	鹿児島		華族		長男	明治4年2月	昭和16年7月3日 71歳	父・川村景明子爵。	研究所入所。 明治26年、卒業。 日清戦争時、父景明将軍に従い台湾へ従軍。戦後、日本郵船会社。後、副参事。大連、長崎など支店長。病により退職。 大正15年、父元帥逝去により襲爵。		519				満洲編11-14、140		○	○	50号		
113	隅元康真（武次）	鹿児島	鹿児島市長田町	士族			明治6年1月11日	昭和15年2月27日 68歳	代々島津家出仕。 旧名、武次。 祖父猪之助、剣道家。野村新九郎に直心影流を学び、永井肥前守の家中、長沼四郎左衛門に師事、奥義皆伝、諸家指南を許され、郷里にて道場を開く。門下に高崎正風、川上操六など。 父七次郎、藩校の準訓導、英学。 母さえ、藩儒甲斐右八郎長女。 明治10年、父、西南戦争に参加、4月4日戦死（33歳）、他の弟（5人）は戊辰戦争でみな戦死。武次このとき5歳。 10歳、祖父の家督相続。 軍人を志望するが身体虚弱のため挫折。 荒尾の講演を聞き参加を決意。	明治23年9月、研究所入所。 卒業後、日清商品陳列所入所。同県出身学生で、北四川路久慶里に居住。中島真雄（先輩）、佐久間洪（大尉）、荒井甲子之助などがいた。 日清戦争時、帰省。招集され広島大本営にて陸軍通訳、第1軍附。朝鮮上陸後、九連城にて第5師団附。牛荘、田荘台転戦。 戦後、広島に戻り解職。後、台湾総督府通訳官、彰化憲兵隊附。雲林守備隊（台中）の今橋中佐につき土匪蜂起の対処に参加、マラリアが再発し辞職、帰国。 帰郷後、骨粉輸入の鹿児島肥料株式会社創立。事業失敗、家産の大部分を失い、台湾銀行に月給生活をなす。 明治37年、従軍し、大連軍政署勤務。同僚に草場勤三郎、野間芳太郎、片山俊彦。民政移行後、遼東兵站部附、鉄嶺馬蜂溝兵站司令部附。 明治39年、帰国、解任。戦後、田鍋安之助から平岡浩太郎の事業（蘇州で西陣織織造の監督）に参加。伊東良造の異母弟伊東半次郎渡華。 明治40年、東洋公司を名乗るが、資金運用に失敗、一年で解散。 その後、大阪・高橋盛大堂店員（売薬）、上海・日信大薬房にて福州、厦門、汕頭など視察。帰郷後、晩年を晴耕雨読。		598						○	○	50号		＊『対支回顧録』編纂に当って九州方面の史料蒐集を担当。
114	中原毛助	鹿児島	下谷口村（日置郡伊集院町下谷口）（現日置市） ／福岡市福岡大名町	士族	鹿児島藩士	長男	明治4年12月		父・中原尚雄は、鳥羽、会津に転戦、明治7年の台湾出兵には薩摩徴集隊四番隊長、後警視庁少警部。明治10年、西南戦争時、私学校党に捕縛。解放後、高知、山梨、福岡など警部長歴任、明治25年、品川内相選挙干渉事件に関係し、辞職。大正3年、病で郷里に没す（70歳）。 明治22年、造士館在学中、帰省の途上で福岡に向かう途中、父親友・安楽兼道（熊本警察部長）を訪問、荒尾の構想を知り、荒尾を研屋旅館に訪う。	明治23年9月、研究所入所。 明治26年、卒業。日清商品陳列所入所。 日清戦争時、父から川上操六参謀次長へ照会、陸軍通訳官、騎兵第1大隊属。花園河口上陸、金州攻撃後、東海岸偵察、土城子へ、旅順攻撃参加。 明治28年6月、第1師団から安東県民生部附転任。11月、台湾総督府に転任、台中民政支部在勤。対少数民族中、マラリア罹病、辞職し帰国。帰国後、麦稈竹材製造合資会社、骨粉肥料会社など監査役、取締役。 明治32年、日置郡農会会長、石炭施料廃止、排水工事、稲苗正条植、改良に従事。 明治35年、渡台、台湾糖務局在勤。 日露戦争時、辞職し帰国。6月、陸軍通訳官、弘前第8師団兵站監部附。9月、大石橋方面転出。 明治38年1月25日、黒溝台戦、軍医同行狼洞溝兵站部出張、戦死者負傷者の収容に従事。11月、第16師団歩兵31旅団附転任、帰朝、赤十字社正社員。 帰郷後、製紙工場理事長、村治、経済に貢献。神道、仏教研究。		532					13	○	○	50号		＊渡清前の滞在地は福岡市福岡大名町。 ＊『博多青年須読』13頁には、福岡市の公費生として派遣されている。
115	成田錬之助	鹿児島	鹿児島市西田町	士族	鹿児島藩士	二男	明治4年8月19日	昭和5年7月20日 60歳	父・成田安秩（藩医か）。兄の成田安輝は小笠原やアラスカを放浪の後、台湾総督府技師、ラサに入り、日露戦争時には任務でゴビ砂漠へ入る。 少壮時代、京都建仁寺黙雷老師にに参禅。 19歳、造士館卒業。卒業後、東京へ遊学。鎌倉円覚寺の洪川老師に参禅。 中国游学。	明治23年、研究所入所。中途退学し、漢口楽善堂支店に入る。中国語、英語ができたため根津に信任された。湖南方面、貴州旅行後、上海に帰る。財政難で迎年準備不可のため漢口にて麻買込みの荷為替を組み、上海にて金策実行。後、日清商品陳列所にて商務研究。日清戦争前、一時帰郷。根津一大尉が参謀本部特命の任で上海へ行く際、長崎で同行し、上海へ。 日清戦争時、上海根津のもと、前田彪、松田満雄、景山長次郎らと共に営口方面へ敵情偵察、上海帰任。帰朝し、第1軍従軍、陸軍通訳官、騎兵部隊附。遼東進出後、尋常通訳官、第1線旗兵偵察隊に参加、偵察。後、第2師団司令部附、台湾へ従軍。 戦後、京都へ、建仁寺で参禅、京都商業学校教師。兄安輝が横浜正金銀行の鍋倉直と在米中の知友であったため、正金銀行に入り、上海支店詰め。後、天津支店、病により神戸支店。 明治34年、外務省政務局長山座円次郎の推薦で、日清起業調査会の創業を担当、中枢人物となり対支投資事業に没頭。 日露戦争時、正金銀行遼陽支店開設に尽力。 明治42年8月、同会から東亜興業株式会社成立、支配人として漢口駐在、以後12年中国各地勤務。 大正11年頃、脚気、肺気腫併発。東京へ戻り、後に帰郷。 昭和5年2月頃、告別の辞を述べる。	624		335					○				＊西蔵探検家成田安輝は異母兄。 ＊大正13年、田鍋安之助が欧米漫遊の際に一千金を寄付。 ＊営口での偵察は、中国側兵力数を大豆取引数に見立て、上海にて角田隆郎が本国に打電。
116	藤崎秀	鹿児島	姶良郡加治木村（加治木町塩入）（現姶良市）				明治4年3月18日	24歳	明治15年頃、小鳥小学校。 15、6歳頃、郁文館にて谷山初七郎の薫陶を受ける。 鹿児島造士館入学後、海軍志願、病により床に伏す。 明治19年、熊本済々黌にも転学（卒業せず）。 荒尾の遊説により渡清決意、荒尾を訪問、学資一半を確約。	明治23年5月、東京で受験、9月、研究所入所。 明治26年、卒業後、帰朝、家事支援。 明治27年4月（7月？）、上海商品陳列所入所、事務従事。9月、陸軍通訳官第1師団附。10月16日、第2軍司令部と広島発。24日、花園河口上陸、金州城内潜入、捕縛。10月29日、処刑。	581		525					○	○	50号	『巨人荒尾精』285頁 『烈士鏈崎三郎伝』烈士略伝、2-3頁	＊九烈士 ＊字実夫、号雲岬。
117	別府真吉	鹿児島						昭和4年2月29日 59歳		明治23年、研究所入所。 卒業後、一旦帰国。 日清戦争時、従軍通訳官。遼東各地転戦。 日露戦争時、通訳官。満洲に従軍。満洲利源開発への着意から、三谷末治郎経営の関東洋行の吉林支店支配人として、吉林から第2松花江の上游（長白山）森林地帯を調査、マッチ軸木原料の楊樹を伐出し、長春燐寸株式会社に売り込み財をなす。 大正6年、長春運輸株式会社（満鉄、日中有力実業家出資）設立により、嘱託として入社。長春へ集まる特産物輸送担当。 大正7年、シベリア出兵により、該輸送会社が軍事輸送を請け負い、輸送係担当。 大正8年、軍事輸送が閑散となると、吉長鉄道沿線各駅の特産品出廻期に、輸出貨物保管の金融業を開始。 大正12年、静養のため東京へ。	635		114					○		50号		
118	森田新太郎（信太郎）	鹿児島	鹿児島市	平民	商人	二男	明治8年1月10日		父・森田藤助。実業家。	明治23年、研究所入所（16歳）。 卒業後、日清商品陳列所入所。 日清戦争時、陸軍通訳官、第1軍に従軍。10月、朝鮮龍岩浦に上陸後、大連溝兵站部附。 戦後、11月、陸軍通訳官、児玉少将に随行、台湾の兵営敷地選定。 明治29年1月1日、蜂起により台北城包囲の報を受け、台北へ、臨時混成第7旅団司令部附、宜蘭へ従軍。3月、憲兵隊附、風山勤務。7月、病により辞職、帰国。 日露戦争時、陸軍通訳官、第9師団野戦砲兵第9連隊に従軍、旅順攻撃に参加。戦利品受領委員。2月8日、原隊帰還、奉天戦にて3月6日負傷、金沢陸軍予備病院に後送、6月、入院、三ヶ月後戦地復帰。戦後の遺骨収集兼同地方産業調査。 明治39年1月、金沢師団司令部へ、後帰朝。 相次いで子を亡くし、仏教に帰依。（67歳）	503							○	○	50号		

119	青木染之丞																	○					
120	池田寛三																	○					
121	伊藤太郎																	○					
122	井上徳太郎																	○		51号			
123	岩崎唯一																	○		51号			
124	大石仲之介																	○					
125	大沢大之輔																	○					
126	大西禹造									台湾台北						10			○				
127	大西忠平																	○		50号			
128	岡田伝吉																	○	○	51号			
129	熊井米藏																	○		50号			
130	甲田松太郎																	○		50号			＊下記資料執筆か。河村透, 跡部義雄著『征清譯林　大義名分』上巻,磊々堂,1894年10月、近代デジタルライブラリー
131	河野仙之助	（福岡）																○		51号			
132	佐藤謙造（謙三）																	○		50号			
133	島田常三郎																	○					
134	島谷治三九																	○					
135	下田圭一																	○		51号			
136	外山八代吉																	○					
137	竹添岳三郎																	○					
138	武田寅吉																	○		51号			
139	田代雄一																	○					
140	田村強之助																	○					
141	東郷珍彦																	○					
142	橋本勝哉																	○		51号			
143	福田金三																	○					
144	福原伴十郎																	○					
145	藤井柳泉																	○		50号			
146	藤城駒之助																	○		50号			
147	藤原知十郎																	○					
148	古川梅太郎									＊以下の人物か。 明治34年4月（1日現在）、台湾総督府鉄道部汽車課技手（～明治40年）。 明治40年5月（1日現在）、鉄道部打狗出張所技手（～明治41年）。 明治43年、鉄道部汽車課技手（～明治45年）。			台-1-292、365、455、540 台-2-18、89、166、327、409、506	甲M34-814 職M35-54 職M36-57 職M37-50 甲M38-612 文M39-46、文M40-66 文M41-72 文M42.5-71 文M42.11-28 文M43-65、文M44-72 文M45-124			○				
149	前島勘三																	○					
150	槇田作造																	○					
151	森永卯八郎																	○		50号			
152	安村友次郎																	○					
153	池野鹿郎																			50号			

◆「日清貿易研究所生一覧表」項目の凡例
以下に同表の項目について述べておく。本表に関して、上述した点とあわせて以下の項目を作成して表に記載した。
(1)【No.】・【氏名】・【出身県】　氏名については、全員の読み方を判別できなかった。このため、出身県別に並び替え、順不同で表記するものとし、その上で番号をふった。
(2)【出身地】　出身地については、出典史料により表記が異なる。このため、原則1888年4月に実施された市町村制に依拠して表記した。また括弧内は現在の所轄地である。
(3)【戸籍】　戸籍については、便宜上の目安として、原則1898年の戸籍法に依拠して判断した。
(4)【家系・身分】　家系や身分について、一部史料表記上から判断できるものはそのままとし、判別しないものは一部出身地から判断した。
(5)【続柄】　続柄について、「長男」「二男」「三男」「四男」と表記した。「次子」「次男」「二男」等の表記はすべて「二男」に統一した。
(6)【出生時期】・【没年時期/満年齢】　出生時期・没年時期について、史料上判別できるものは表記した。没年がわからものは満年齢を表記した。
(7)研究所参加前の経歴　研究所参加後の経歴　経歴は、日清貿易研究所の参加前と参加後に分けて記載した。年号は和暦で統一した。
(8)各出典欄　出典については、以下の史料を中心に記載し、出典頁(先頭頁のみ)を表記した。
A:主要出典
①『対支回顧録』下　　:先頭の出典頁を記載
②『続対支回顧録』下　　:先頭の出典頁を記載
③『東亜先覚志士記伝』下　:先頭の出典頁を記載
B:旧植民地統治に関与した人物は、台湾中央研究院近代史研究所のデータベース「台湾総督府職員録系統」及び『旧植民地人事総覧』で確認した。
④『旧植民地人事総覧』
記載例:台-1-88　＝『旧植民地人事総覧』台湾編第1巻, 88頁
⑤「台湾総督府職員録系統」
職＝『台湾総督府職員録』
甲＝『職員録甲』
乙＝『職員録乙』
文＝『台湾総督府文官職員録』
所＝『台湾総督府及所属官署職員録』
記載例:甲M30-642　＝『職員録甲』明治30年, 642頁
C:同時代的な人物伝として、皓星社のWebデータベースおよび『日本人物情報大系』を確認した。
⑥「皓星社データベース」
芳賀登, 杉本つとむ, 森睦彦, 阿津坂林太郎, 丸山信, 大久保久雄編『日本人物情報大系』皓星社, 1999年
記載例:企業家編39-326　＝『日本人物情報大系』企業家編, 39巻, 326頁
＝中西利八編纂『財界人物選集』第5版、財界人物選集刊行会、1939年、1239頁
D:以下の史料では日清貿易研究所生の氏名を確認することができる。登場人物の記載有無、出典頁を表記した。
⑦『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』:出典頁を記載
⑧「第一学期試験成績表」　氏名の有無を記載(有＝○)
⑨「河野久太郎伝」卒業写真　:氏名の有無を記載(有＝○)
⑩『上海新報』記載例:50号　＝「日清貿易研究所現存生徒諸子の決心」『上海新報』第50号
E:その他、すべてを銘記することができず遺漏は免れ得ないが、個別の出典史料として確認できるものは参考文献欄に記載した。
(9)【備考】　備考欄には本人の称号や家族情報、史料上関係する内容について表記した。また、同表を作成するため、以下の参考文献を参照した。そのうち①～⑩までの通し番号は、同表の参考文献欄と対照している。

◆主要参考文献一覧:
①東亜同文会編『対支回顧録』下巻列伝, 東亜同文会内対支功労者伝記編纂会, 1936年(〔復刻版〕原書房, 1968年)
②東亜同文会編『続対支回顧録』下巻列伝, 対支功労者伝記編纂会, 1941年(〔復刻版〕原書房, 1973年)
③黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻, 黒龍会出版部, 1936年(〔復刻版〕原書房, 1966年)
④『旧植民地人事総覧』台湾編1・2, 関東州編, 日本図書センター, 1997年
⑤「台湾総督府職員録系統」台湾中央研究院近代史研究所(http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action , 2015年12月24日閲覧)
⑥「皓星社データベース」(http://www.libro-koseisha.co.jp/top01/main01.html , 2015年12月24日閲覧)
芳賀登, 杉本つとむ, 森睦彦, 阿津坂林太郎, 丸山信, 大久保久雄編『日本人物情報大系』皓星社, 1999年
⑦松岡恭一編『日清貿易研究所東亜同文書院沿革史』東亜同文書院学友会, 「旧日清貿易研究所出身者」1908年, 9-15頁
⑧佐々博雄「熊本国権党系の実業振興策と対外活動――地域利益との関連を中心として――」『国士舘大学文学部人文学会紀要』(24), 「日清貿易研究所第一学期成績表」(『佐々家文書』)1991年, 49頁
⑨九州時事論社編輯部『河野久太郎伝』附録・思出のアルバム「日清貿易研究所卒業記念撮影」, 河野久太郎伝記編纂所, 1941年
⑩「日清貿易研究所現存生徒諸子の決心」『上海新報』第50号、修文書館、5月15日付(不二出版、2011年、356頁)
「日清貿易研究所に係る記事の抹殺」『上海新報』第51号、修文書館、5月23日付(不二出版、2011年、367頁)

◆その他参考文献
井上雅二『巨人荒尾精』左久良書房, 1910年
孫文記念館編『孫文・日本人関係人名録』2012年増訂版
竹中憲一『「満洲」に渡った一万人』皓星社, 2012年
中村義ほか編『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版, 2010年
日本加除出版編集部『旧市町村名便覧 明治22年から現在まで』日本加除出版, 1999年
納戸鹿之助『烈士鍾崎三郎伝』烈士鍾崎三郎伝頌布会(九州朝日新聞社印刷部), 1937年
秦郁彦編『日本官僚制総合事典』東京大学出版会, 2001年
宮武外骨・西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』明治大正言論資料20, みすず書房, 1985年